４）課外活動「WILL 冬の ESD ボランティアプログラム」

ESD プラットフォーム WILL　南川魁生

1 月 15 日、岡山県の長島にある国立ハンセン病療養所・邑久光明園で WILL 冬の ESD ボランティアプログラム(以下、冬プロ)が実施された。このプログラムは ESD プラットフォーム WILL が毎年行っているプログラムであり、今回の冬プロでは「出会い・もやい・学び合い」というテーマのもと、ハンセン病の隔離の歴史との関わりが深いこの島で多様な人々が協働し、その中で様々な学びや気づきを深めていくようなプログラムを計画していた。当初は 2 泊 3 日の予定だったが新型コロナウイルスの感染拡大により活動規模の縮小を余儀なくされ、それでもとにかくまず「出会うこと」を大切にしたいという思いから、感染対策をしっかりと講じたうえで日帰りでプログラムを開催することとなった。

そんな「出会い」のプログラムに、KUPI より 3 名の学生が参加した。1 名は以前も冬プロに参加したことがあったが、2 名は初参加だった。KUPI 学生以外には、ESD プラットフォーム WILL のメンバーが 20 名、授業の履修者から 10 名ほどが参加した。メンター学生・コーディネーター共にいない中での活動であり、その点で KUPI の正規のプログラムとは一線を画すものであった。

プログラム当日は、午前中に 2 時間ほど海岸清掃を行った。重い丸太を協力して運んだり、小さなゴミを 2 人組になって集めた。始めのうちはお互いの関係性を掴めず、緊張しながらワークをしている参加者も多かった。O さんと S 君も 2 人で協力しながらリヤカーを動かして自然ゴミを運んでいたが、以前の冬プロに参加したことのある N 君は、早々に海岸に降りて自由にゴミを拾い始めた。一応ゴミを拾う範囲は決まっていたが、彼がその範囲を超えて清掃し始めたことで周りの人も少しずつ集まり、より広範囲のゴミを拾うことができた。後半になってくると雰囲気もほぐれてきて、KUPI 学生 3 名も多様な参加者の中に混ざりながら木を運んだりゴミを拾ったりしていた。

午後は WILL が邑久光明園から管理を譲り受けている場所で土地の開墾ワークを行った。具体的には竹階段を作る、丘を切り開き海までの道を作るなど、それぞれやりたいワークに分かれて活動した。N 君は寝ていたがそれを咎めるような雰囲気はなく、O さんと S 君も別々のワークに参加していて、KUPI という集団が上手にほどけていた。午後のワークでは体力面でのきつさを感じる部分もあったが、中でも S 君の活動意欲はすさまじく、あらゆる活動に精力的に取り組んでいた。

プログラム終了後、KUPI 学生 3 名から「いい思い出ができた」「また参加したい」という声をもらうことができ、O さんは冬プロで使った備品の片付けにも来てくれて、現在は WILL メンバーとして、冬プロに留まらず様々な活動に参加してくれている。

今回の冬プロで、私は KUPI 学生 3 名それぞれに大学の授業で見る一面とは全く異なる一面をたくさん見た気がした。それは、様々なワークを通して参加者の緊張がほどけ、お互いを気にかけあいながら共に時間を過ごすことができたからではないだろうか。今回のプログラムでは、普段とは異なる場所・人の中でもいたいようにいる、やりたいことをやるということが、他者との助け合いの中で可能となっていた。そのような機会に KUPI 学生、授業から来た学生、WILL メンバーと多様な人々がいたことを嬉しく思う。1 日という短い時間ではあったが、非常に充実したプログラムとなった。

４．メンター学生からKUPI学生へのインタビューと感想

KUPIで「学ぶ楽しみ」を発見！～I君の語りから～

宮村　真菜

1.　本を読むことが好きになった

「今年のKUPIは楽しかった？」という問いかけに対して、真っ先に「大学の図書館で本を借りることができて楽しかった」と答えたＩ君。このインタビューをしている間も、本から目を離さなかった。KUPIに参加し、大学の図書館に出入りできるようになったことで、読書の楽しさに目覚めたのだろう。KUPI学生として神戸大学で学んだこの半年間、授業が始まる前や休み時間に本を開いて熱心に読んでいるＩ君の姿が印象的だった。

2.　学んだことはしっかりと覚えている

Ｉ君にとって、金曜日プログラムで取り組んだことが特に印象に残っているようである。「KUPIの授業で楽しかったものは？」という問いかけに対して、ダンスをしたこと、アゴラで絵を描いたこと、体験新喜劇で芸能人役としてカリンバを演奏したことを挙げてくれた。ただ語るだけではなく、写真を探して見せてくれたり、ジェスチャーをしながら話してくれたりなど、インタビューの中で思い出を共有しようとする姿も見られた。

水曜日プログラムで特に印象に残っていたのが、柴田先生の講義「ものづくり：フエルトでつくるミニマット」だったようで、「フエルトで南京町の西側の門を作った。南京町に行ったときにね、同じのを見つけた！」と、とても嬉しそうに語っていた。実際に、講義中はコーディネイターと一緒に、真剣な表情で丁寧にフエルトパンチャーを刺していたのが印象に残っている。他にも、伊藤先生の宇宙の講義、岡崎先生の音楽の講義なども楽しく受講できたようだ。

3.　食べることが大好き

そんなＩ君のKUPIでのもう一つの楽しみが、講義前と休み時間に食べるご飯とおやつである。袋を豪快に開けてもぐもぐと頬張るＩ君の姿はとても素敵で、休み時間に「今日は何を食べているの？」と聞くのが私の密かな楽しみでもあった。「おやつはいつもどこで買っているの？」と尋ねると、「六甲道のダイエーで、自分で買っている。変わったポテトチップスを買うのが好き」と話してくれた。色々な味のポテトチップスを買うのが最近のＩ君の楽しみであるようだ。

4.　お話しするのは苦手だけれど…

「KUPIに来て色々な人とお話しできた？」と尋ねると、読んでいた本から目を離し、「言葉分からない。会話できないんだ」と語気強く語ったＩ君。どうやら、Ｉ君の中に、話すことに対する苦手意識が強くあるようだ。

しかし、「KUPIに来て友達はできた？」という問いかけに対しては、すぐに「メンタ

ーさんとしゃべるようになった」と答えたＩ君。話すのが苦手だという意識はあるものの、KUPI に参加して、メンター学生と話すことの楽しさを見つけることができたようだ。Ｉ君の語りから、KUPI 学生とメンター学生が一緒に講義を受けることの意義を改めて考えさせられた。

5. Ｉ君の語りから見えた KUPI の意義

最後に、Ｉ君の語りを通して私が感じた KUPI の意義を簡単にまとめる。

まず、KUPI の良さは「人と人との関わり」にあるということである。Ｉ君も語っていたように、メンター学生と仲良く会話をしたり、大学教員と一緒に学んだりできるというのは、KUPI 学生にとって大きな意義であると感じる。本報告書の裏表紙を見てもらえると、KUPI 学生がメンター学生や一般学生、大学教員と楽しそうに関わっている様子が分かると思う。この半年間を通して、KUPI 学生が様々な人と関わり、関係を築いている様子を目の当たりにすることができた。知的障害のある青年たちにこのような機会を提供できるのは、KUPI ならではといえるのではないだろうか。

次に、KUPI を通じて、KUPI 学生たちが「学ぶ楽しみ」をたくさん発見できているということである。KUPI には、大学教員による様々な分野の専門講義、自己表現や体験新喜劇など、実にたくさんの学びが用意されており、KUPI 学生は様々な切り口から学ぶことができる。また、意見や考えが否定されることはないため、KUPI 学生はのびのびと意見を出し合ったり、自分を表現したりすることができる。KUPI 学生は、そのようなところに学ぶ楽しみを見いだしているのではないだろうか。

Ｉさんと対談をして

加戸　友佳子

Ｉ さんはいつも本をもってくる、勉強熱心な人という印象がありました。金曜プログラムでは神戸大学内の２つの図書館（教育や視覚的な表現を扱った本の多い人間科学図書館と、歴史的建造物でもある社会科学系図書館）を見学し、本を実際に借りてみるということを行いましたが、Ｉ さんは専門的な本を借りていて、プログラム後も継続的に本を借りていたのが印象的でした。どっちの図書館も気に入ったそうです。

本をよく読むのでインドア派かと思いきや、Ｉ さんは金曜プログラムでは、体を動かす活動をよく選択していました。KUPI で一番印象に残っている活動を聞いてみると、体育館での活動だそうです。

Ｉさんが KUPI に来るモチベーションは、「みんなに会える」ことです。KUPI 学生の皆と LINE 交換できたことを KUPI での変化としてあげていました。やりたかったことは，カラオケに行くことだそうです！

Ｉ さんは話すとき、声が聞き取りづらい周りの人に配慮し、ノートに書いて答えてくれます。自分の意見をしっかり持っている強さも、KUPI でのやり取りの中で感じました。

最後に KUPI の皆に伝えたいことを聞きました。「半年間ありがとうございました」とノートに書いてくれました。Ｉさん、こちらこそ、ありがとうございました！

KUPI に参加して

私はこれまでも KUPI に参加した経験がありましたが、今回の金曜プログラムでは、メンター学生が中心となって内容を決め、進行するという初めての経験をしました。大学だからこそできることをやりたい、卒業してからも生かされる学びができればと、毎週メンター学生同士で話し合い、KUPI の意義や限界まで問いながらプログラム内容を作り上げていくのは、大変でしたがとても刺激的で楽しかったです。なにより、KUPI 学生たちは、どの回のプログラムにも積極的に参加してくれて、楽しんでくれました。

学内や図書館の見学、作品鑑賞、同じ本を読む読書会（これは「ゼミ」をやりたいと考えたものでした)、アクティビティの内容を自分たちで話し合って決めること、表現活動、「困りごと」の話し合い…金曜メンターの間で、やりたいと話し合っていたことのほとんどを実現することができました。当然ながらこれは、KUPI に参加する全員の存在によって、可能になりました。

私は多くの KUPI 学生と年齢が離れているので、「お友達」のような関係にはなりにくいかな、と思っていたのですが、そんなことは全くありませんでした。私に声をかけてくれ、輪に入れようとしてくれました。関わっていく中で実感するのは、いかに KUPI 学生の皆さんが寛大で、かつ「多様性」と呼ばれているものを識っているかです。

メンター学生のみなさん、コーディネイターの黒崎さん、そして、どんな活動にも参加してくれ、成長を見せてくれた KUPI 学生のみなさん、本当にありがとうございました。

0 さんとの対話

土居　綾美

0 さんが KUPI に参加するのは三回目である。0 さんが初めて KUPI に参加した 1 年目に、私は一般学生として火曜プログラムを通して 0 さんとかかわりを持っていた。2 年ぶりに再会した 0 さんは、当時私が抱いていた 0 さんのイメージとは少し異なる感じがした。なにが変わったのか、なぜ変わったかを知りたいという思いが私のなかに芽生えていた。

また、今年度 0 さんは仕事仲間である M さんと S 君を KUPI に新たに誘っていた。対談において、「KUPI に参加することに意義や楽しさを感じていたため 2 人を誘った」と 0 さんは語っている。0 さんは KUPI にどのような意義を感じているのかについて、これまでの関わり、そして対談においてじっくり質問をすることで垣間見ることができた。

多様な授業を受講してきた中で、印象に残っているものとして、0 さんは、水曜日に開講された星座についての授業を挙げてくれた。0 さんはもともと星が好きだったそうで、冬になると空を見上げてオリオン座を探すことが癖になっているようだ。このように星を見上げることは好きなものの、今までは空の仕組みに関しては知らなかったらしい。覚えることが重視される勉強はもともと苦手であったが、今回の星座についての授業に関しては、もともと関心のある内容であったこと、そしてプロジェクターを使用しての授業であったことにより、楽しく授業を受けることができたようだ。もう一つ印象に残ったプログラムとして、体育館でバスケットボールやボッチャなどをしたことを挙げてくれた。0 さんは普段あまり体を動かさないが、実は運動が好きだということを教えてくれた。他の KUPI 生と活発に交流できたことも印象に残った理由として語ってくれた。

0さんは、KUPIでの活動以外に、ワークキャンプにも今年度参加した。これまでも参加したい思いがあったそうだが、親御さんが心配なさっていたこともあり、参加したい気持ちをはっきりと主張できなかったようであった。しかし、今年度は親御さんに提案をし、許可ももらうことができた。0さんは「OKをもらうことができてスッキリした」と語ってくれた。

また、対談においてKUPIにおいて成長したと感じていることはあるか質問をした。すると、0さんは、「以前より言葉がスッと出てくるようになった」と語ってくれた。3年前、KUPIに参加した当初は、発言権が与えられてもパスすることが多かったそうだが、今はパスすることなく、発言をすることができるようになったという。また、人と話すことにおいても、変化があったようで、「KUPI に参加するようになってから、男性とも気兼ねなく話せるようになった」と語る。授業を一緒に受けた一般学生や、ゲストとして来られた他大学の学生とも連絡先を交換したというエピソードも飛び出し、その積極性に驚かされた。

0さんとの再会は、KUPIに参加する中での0さんの変化をより色濃く感じることのできる機会であったと思う。また、0さん以外のKUPI学生からも、たくさんの刺激や発見をもらったと感じている。それらを感じ取る中で、KUPIの見え方は、一般学生としてKUPIに関わったときとは違うものになっていった。学ぶことの楽しさ、そして学びを求める純粋な気持ちをKUPI学生に思い出させてもらったと感じている。

S君の語りから『学びとは何か』を考える

橋澤　慧

今回このような対談をするにあたって、各メンター学生は皆「KUPI に参加してどうだった？」「お互い成長したなって思うところはどんなところだろう？」というような例題がいくつか書かれた紙を受け取っていた。しかしこの「どうだった？」という漠然とした質問への返答は、知的障害の有無に限らず結構難しい。数日悩んではみたものの他に良い質問がさっぱり思いつかなかった私は、対談相手であるS君が答えに窮するのを承知で、漠然とした質問をそのまんま投げかけてみた。

橋澤（以下H)「KUPIは10月から始まったけれど、4ヶ月間（注：対談は1月下旬）やってみてどうだった？」
S君（以下S)「僕、初めてKUPIっていうのに入ったんですけど、来年もしたいと思いました」

なんと模範的な回答！しかも即答！！
来年もまたやりたい、だなんて、メンター冥利に尽きる。嬉しい気持ちを抑えつつ、何が彼にKUPIのリピートを決断させたのかと問えば、

S「津田先生の授業が楽しいと思いました」

まさかの私の担当（水曜日）ではない、火曜日のプログラム。担当曜日以外のプログラム

内容を知らない私に、対談時期に行っていたのは『自己表現をしてみよう』という内容で、S 君は Y 君のダンスを撮るカメラ担当なのだと教えてくれた。彼は「最初は手首が痛かったけど、だんだん慣れてきて今はもうバッチリ！」と胸を張る。自分の行動に自信を持っている彼の笑顔が眩しい。その湧き立つ自信、私にも少し分けてはくれまいか。

その後もＳ君からは「KUPI で図書館に行ってから、本を読むようになった」「最初は大学生の勉強は難しいと思っていたけど、これこういうふうや、って（自分の考えを）ノートに書いて、発表するのが楽しかった」という語りが続く。KUPI の多種多様なカリキュラムは恐らく彼にとって『新鮮』の連続であり、毎回楽しみながら自然と『学び』を深めていったのだろう。彼の満足げな表情はとても印象的で、『学びとは何か』という壮大な問いの一つの答えを表しているのかもしれない。

実は、対談序盤で彼にこんな質問を投げかけていた。

H「KUPI に入る前と今とで、何か変わったこととかある？」
S「全っ然！」

ツンデレか？

好きなことを突き詰める場としての KUPI～T 君の語りから～

竿 美羽

１．T 君の印象に残った授業

T 君は各曜日の、特に印象に残った授業を教えてくれた。火曜日は公開授業にもなった「表現活動」。T 君は「結婚シミュレーション」で、本人役と他のカップルの結婚を判断する神父の役(重大な役どころ！)をする。他の KUPI 学生の劇もとても気になっているようだった。水曜日の授業の中では、彼の大好きな音楽に関連する岡崎先生の授業を挙げていた。いつも元気な T 君であるが、音楽の授業になると、さらに生き生きとした表情になる。そして、金曜日の活動の中でも「表現活動」を挙げてくれた。金曜日の「表現活動」は火曜日とはちがい、具体的には、「スターウォーズのオープニングソング」や DISH//の「猫」の曲に合わせてダンスをしたそうだ。「どんなダンスをしたんですか？」と聞くと、「いや、それはまぁいろいろです…」と恥ずかしそうに言葉を濁した T 君。T 君のダンスを見られなくて残念であったが、きっとすばらしい表現力で踊ったのだろうと思う。

２．KUPI で過ごした３年間を振り返って

T 君はいつも明るくて元気だ。教室に入ってきた大学教員、メンター学生、KUPI 学生みんなに「〇〇さん、こんにちは！」と挨拶してくれる。彼の姿は周囲の人を明るく照らしてくれる。私はそんな T 君を見ていて、「T 君が今日しんどいなぁと感じることはないのかな？いや、誰しもそんなときはあるはずだ。」と思い、T 君に「正直、今日 KUPI 行きたくないなぁと思うこととかなかったですか？」と尋ねてみた。すると、「1 年目はありました。」

と正直に答えてくれた。T 君でもそんなときもあるんだなぁ。でも、1 年目だけ…？すごい…。T 君は 1 年目のとき、自分があまり興味のない授業を受けることはとてもつらかったと語ってくれた。しかし、2 年目と 3 年目は、「興味がないと感じる授業はなくなった」とのこと。その理由として、T 君は 1 年目と比べて体力も上がったし、T 君のお母さんの「しんどいときこそ力を出す」という言葉を忘れないでいたからだと言っていた。そうであっても、「T 君の興味のない授業はない」という言葉には T 君らしさを感じる。これは私の勝手な想像でしかないが、T 君が「興味のない授業はない」と思えるようになったのは、一緒に学べる仲間の存在も理由としてあるのではないだろうか。T 君は積極的に発表してくれる。そして、彼はたくさんの趣味をもっており、それらへの情熱をたくさん語ってくれる。そのような授業中に発表するにせよ、趣味を語るにせよ、必ず聴いてくれる相手がそこにいる。T 君の話に耳を傾けてくれる仲間の存在が、彼の学ぶ意欲をより高めているのではないかと感じた。

３．来年も KUPI に参加したい！

今年で KUPI3 年目の T 君。そして「来年も参加したい！」という思いもすでにある。特にやりたいことが二つあると語ってくれた。まず一つ目は、歴史の研究をすることだ。彼は歴史が大好き。T 君の好きな音楽の歴史はもちろんのこと、社会科で学習するような歴史ももっと学びたいようだ。そして二つ目は、剣道に関すること。彼は学生時代剣道部だった。実際に大学で剣道をしたり、剣道のことをもっと知りたいとのことだった。ここからも、現状の自分に決して満足しない T 君の姿が見てとれる。自分の得意なことは「もう他に知ることはないだろう。とにかく披露したい！」と多くの人は思ってしまうのではないだろうか。しかし、T 君はちがう。披露するだけでなく、それらについてもっと研究したい、もっと学びたいという方向に気持ちが向いているのだ。彼の止まることのない知識への探求心をわたしも見習いたい。

４．私のことを少し…

これまで T 君のことについて書いてきたが、最後に KUPI に参加した私自身の感想を少し書きたい。2 回生になって普段履修する授業のコマ数も増え、それと比例して課題も増えていく中で、常に何かに追われて焦る日々が続いていた。「自分に余裕がないなぁ」と軽く落ち込みながら KUPI の教室へと足を運ぶことが多かった。しかし、KUPI に参加すると、焦っていた自分がうそみたいにいなくなる。その理由を考えたとき、私にとって KUPI 内で流れる時間がゆったりしている感じ、その空間の居心地のよさが私の焦る気持ちに影響を与えているのではないかと感じた。それは授業の進み具合が、自分が普段受けている授業に比べてゆっくりだからということもあるかもしれないが、そんな単純なことではない。一人の KUPI 学生が自分ことを情熱的に語っていたり、反対に上手く言葉にできない沈黙の時間が成立する。その間、他の KUPI 学生が静かに待っている。そうした KUPI 特有の空間が、居心地よく感じさせてくれるのだと思う。私はそんなゆったりとした寛容な雰囲気に包まれる KUPI 特有の良さだと感じながらも、そうした空間が学校や社会に広がっていけばいいのになぁと思う。

KUPI で「学ぶ楽しみ」を発見！　～T さんの語りから～

チャン　ジュソン

T さんからのメッセージ

家が三田なので、神戸大学に来ることが遠かったですが、楽しい時間でした。四か月があっという間でした。もう、寂しいです。皆とライングループを作って繋がってほしい。大野君との仮想結婚式をしてみて、実際の大野さんと会いたい気持ちができた。大野君は 41 歳のことが気になるし、自分が自己表現として作った動画を大野君にお送りたいです。自己表現の作業する間に緊張したけど、楽しかったです。そして色んな先生に会って、得意に姿を見たのが印象的でした。もともと漢字検定の勉強をしていました。神戸大学に来てから自分が勉強することに興味があることを気づいた。そして、授業をしながら、漢字をもっと覚えたい気持ちが出ました。機会があれば、音楽のこと特に歌うことを神戸大学で学びたい。

チャンジュソンからのメッセージ

知的障害者が大学に通う意義を探究する目的をもってこのプログラムに参加しました。私自身は、Careworker として多年間、施設で障害者を支援してきた私にとっては、物凄く興味深い活動でした。何を利用者さんに提供しなきゃいけないという立場から少し離れ、支援者と被支援者が共に学ぶことによって、真の支援的アプローチが出てくるという自分なりの信念を再び確認した尊い時間でした。知的障害者の権利擁護に関する Self-advocacy という概念に、キーワードになる自己表現への学習を通し、本人中心は活動を支えながら、ただの支援ではなく、良い学びの機会でした。

まず、自己表現の価値をおろそかにする私自身の内的自我について気が付きました。13 年間、日本という外国で住みながら、この社会に生き残るため、無意識的に日本の文化に染み込まれている私について認識できました。沈黙の文化と言えること、つまり問題意識があってもまずは沈黙する人格が理想になっているこの国に慣れていた私の姿をクーピ学生の自己表現活動をしながら感じることができました。

そして、自己疎外という概念についてじっくり考える機会になりました。知的障害者が置かれているという風になっていますが、実際に現代の人々が置かれている状況ではないかという意識でした。そしてそれを克服することによって新たな生き方を習得し、生きる意味について持続的に享受することができたと言えます。４か月間、一般学生とクーピ学生の皆がそれぞれの立場で協力し、一体感を感じたことも意味ある時間でした。また、機会があれば、参加したいと思います。ありがとうございました。

N君にインタビュー

藤井　令奈

1．KUPIに参加してよかったこと

KUPIに参加してよかったことは、思い出ができたことだそうだ。N君はKUPIが始まった3年前からずっと参加し続けてくれている。毎年増えたり減ったりする他のメンバーと関わりながら、様々な活動に取り組んできた。「１回生、２回生、３回生でそれぞれ思い出を作った」というN君の中には、３年間の経験がしっかりと積み重なっているのだろう。水曜日プログラムで「KUPIで成長したこと」と言うテーマで作文を書いた。N君はそれぞれの年で使っていた教室を巡り、「この教室に来たら思い出した。」と言いながら３年間のKUPI生やメンターとの思い出を語ってくれた。

2．人との関わり方

KUPIに参加して変わったことを尋ねてみると、人との関わり方に関する答えが得られた。「去年はT君に注意することが多かった。」同じKUPI生であるT君の受講態度や人との接し方に納得がいかず、折に触れて衝突していた。しかし今年は心を入れ替え、T君を目の敵にするのはやめたという。その代わり、今年はM君に注意をしているそうだ。インタビューの時も、「もっと周りを見てほしい。」、「ちょっとわがまま。」などと不満を漏らしていた。しかし、「人とのコミュニケーションの部分でいいところもある。」、「友達でもいいかな。」と相手のいいところを見つけたり、歩み寄ろうとしたりするような姿勢を見せている。と言うよりも、友達になりたいからこそ気になるところが見えてくる、と言うこともできるように感じる。

3．自分の居場所を見つける

N君はKUPIを自分の居場所であると感じているようだ。「ここにいると一人じゃない。」と言っていた。これは、KUPIを通して受容される経験を重ねたからだと考えられる。KUPIのコーディネーターやメンターとの関わりも影響しているだろう。「(メンターの）宮村さんが俺に３年間会いに来てた。会ったら100%こっちも元気になる。」と言う言葉から、メンターとの良好な関係が窺える。

N君はKUPIにおいて自分が先輩であることを強く意識している。授業の振り返りでは「後輩たちが楽しそうでよかった。」と言う感想が出てきていた。これはN君がKUPIを自分の居場所であり、自分を認めてくれる場所であると感じていることの表れだと考えられる。

N君には将来、YouTuberになるという夢があるそうだ。KUPIのメンターとグループを組み、アスレチックや家具の紹介など、様々な動画を撮ると言っていた。自分の好きなものを追求し、夢を追いかけようとする姿勢は、自分に居場所があると感じ、受容されているからこそ生まれるものだと考えられる。KUPIでの経験や人間関係を通して、新たな挑戦をしようという心が生まれている。KUPIは「学ぶ楽しみ発見プログラム」と言う名前ではあるが、学びに関してだけでなく、関わる人それぞれの生き方や考え方にも影響を及ぼすものであると感じた。

「KUPI の全てを楽しんだ！」～HH さんとの対談～

黒崎　幸子（コーディネイター）

HH さんは、いつ会っても笑顔だった。いつも楽しそうでどの授業も積極的に参加をした。今回、急に対談をお願いすることになったが、印象に残っている授業を尋ねると金曜日の自己表現（ダンス）と水曜日の音楽と体育、、、と、次々思い出して話してくれた。小さい時からバレエやダンスを習っていると聞いていたので、特に表現を取り入れた授業や活動は取り組みやすかったと感じた。火曜日の自己表現では踊っている動画をいくつか撮ったが「〇〇さんと踊りたい」と希望を伝えて実現させていた。授業前には CD デッキを自ら運んで準備をするなど、何も言わなくても動く姿があった。

１．コンファレンスの発表に参加をして

10 月から授業が始まってまだ半月しか経っていない時に、コンファレンスで KUPI のことを発表してくれるメンバーを募集した。経験豊富な再受講生が手を挙げてくれるかな？と予測したが、HH さんは早い段階で手を挙げてくれた。KUPI での経験は短かいが感想とやってみたいことを話した。オンライン発表の会場には見学者がたくさんいて、フェイスシールドを装着するといういつもと明らかに違う環境だったが、緊張している感じはなくいつも通りにこやかに発表をしていた。

２．相模女子大学との交流について

コンファレンスが終わった数日後に相模女子大学からたくさんの見学の方が来られた。HH さんはみんなの前で KUPI について発表をして、相模女子大学で学ぶ就労青年やサポートする学生さんと交流会をした。交流会では見てほしいものを持参して自己紹介に役立てていた。コミュニケーションの取り方がとても自然で、HH さんの笑顔を見ると相手も話しやすいだろうと感じた。誰とでも仲良くなれる HH さんの強みだ。交流会はとても楽しかったと話した。今も大学生の方とは交流が続いているそうだ。すごい！

３．どの授業も興味あり！

表現系の授業は得意分野だとわかったが、座学の授業も熱心に聞いていた。「宇宙の授業は難しかったけど、それでも楽しかった」と話した。HH さんはわからない時もそこから離れず、ちゃんと参加をしていた。発表の内容が問いと違うことがあっても、その時感じたことをみんなの前で話す姿勢は素晴らしかった。不得意分野はなさそうだ！最後の二週間はオンライン授業になったので自宅から参加をした。ZOOM は経験があるので不安はなかったが、やっぱり大学でみんなと会える方がいいですね、と答えた。45 回の授業で欠席したのは一度だけだった。みんなとの学びだけでなく、友だちやメンター学生さんとの時間も全て楽しんだと感じた。

４．大学からの帰り道

大学への通学は交通機関を利用して一人で来ていた。慣れているから不安はないと話したが、帰り道は同じ方向の人と帰宅できるのがとても楽しい時間だったと聞かせてくれた。

修了式で感想を話した時も「友だちとの帰り道がとても楽しかった、友だちになってくれてありがとう！」と笑顔で話した。

５．感想

私はHHさんとは「あーち」（神戸市と連携して神戸大学が運営するサテライト施設での居場所づくり）で入学前から出会っていた。そこでは一緒におしゃべりをしたりカードゲームをしたことがあったが、どちらかというとおとなしい印象だったので、KUPIでどんなことでも積極的に参加をするHHさんを見て、おー！！そうだったのね！！と、何度も思った。大学でやってみたいことがあるか尋ねると、行事があるといいなー、文化祭とか、と話した。金曜メンターの井上さんに相談をしたら、来年あたり神戸大学の学園祭にKUPI学生が参加をしているかも！とひそかに思った。

KUPIで「学ぶ楽しみ」を発見！ ～HKさんの語りから～

澤坂　綾乃

[HKさんとの対談について]

まず、“KUPIでの学びはどうだったか、楽しかったか”について話した。HKさんは、KUPI学生、メンター学生、一般学生、先生方などみんなが親切で、自分が困っているときにたくさん助けてくれたことが印象に残っているようだった。楽しかったかについては、即答で「楽しかった！」と答えてくれた。特にみんなとたくさんおしゃべりできたことが楽しかったようで、授業前にHCセンターでご飯を食べながら談笑した思い出を話してくれた。授業の内容では、金曜プログラムの音楽の授業が特に楽しかったようで、自身が好きな音楽で得意な手話ができたことが嬉しかったようだった。いろんな曲をできたことも印象に残っているようで、嵐の曲を用いて行ったことを教えてくれた。

次に“KUPIで成長したと感じたこと”について話した。まず成長できたと思うかについては成長したと思うと答えてくれた。具体的には、性格が成長したと思うと話していて、もともと真面目なところがあったが、今年はより真面目になったのではないかと感じていた。また、HKさん自身はKUPIに参加するのは今年で3回目であるが、今年から参加したTさんやMさんと仲良くなれたことも嬉しいと話していた。特にMさんとは手話を通して繋がることができ、手話をできる友達ができたことが特に印象深かったようであった。

金曜日の音楽の授業以外に印象に残っている授業はあるかと聞くと、水曜日の体験新喜劇のことも教えてくれた。HKさんは喫茶店のママでありT君のママ役をしたこと、Mさんの後ろに台詞を貼って行ったことを楽しそうに話してくれた。HHさんとTさんが演じていたアイドルの役がかわいらしく好きであることも話していた。他に、クリスマス会のことも楽しかった思い出として話してくれた。プレゼント交換ではTさんからの入浴剤が当たったこと、お菓子はその場で食べられなかったので、持ち帰って姪っ子にあげたという優しい一面も知ることができた。

また、HKさんを語る上では避けては通れない恋バナをたっぷりとした。実は対談を始めるときにも「あとで彼の話してもいい？」という前置きがあったくらいである。彼とは

将来のことなど大人な話を最近はよくすること、一緒にスマートフォンのゲーム(野球、ドラゴンボールなど)をすることなどを教えてくれた。スマートフォンには彼の影響でたくさんのゲームが入っており微笑ましかった。彼の好きなところを教えてくれたり、写真を見せてくれたりと、仲睦まじい様子であった。

最後に、今頑張っていることについて尋ねると、手話の単語をたくさん覚えることだと教えてくれた。検定の2級に合格することを目指しているようで、HKさんにとって手話が大事なものであることが感じられた。

[メンターに参加した感想]

私は、先生からメンター学生を募集しているという知らせを受けるまでこのプログラムのことを知らなかったような、初めのモチベーションがすごく高かったわけではない学生であったが、半年間KUPIに携わった今、得た学びがとても多様でたくさんあることを実感し、参加してよかったと心から思う。KUPI学生をサポートする上で苦労したこともあったし、何を目指しているのか分からなくなったこともあったが、生き生きと楽しそうに学ぶKUPI学生の姿を見ていると、それだけで参加して良かったと思うことができた。特に、初めの方は緊張していたのかあまり口数が多くなかったKUPI学生が、回数を重ねるごとに笑顔が増えてゆき、教室に行くと名前を呼んで手を振ってくれるようになったのが、個人的にすごく嬉しかった。また、私が参加した火曜日ではKUPI学生と一般学生との関わりも見ることができ、他の人の関わり方を客観的に見られた点でも学びが多かったように感じる。学びはもちろん多くあったのだが、KUPIの授業に行くのが毎週単純に楽しかったので、来年もKUPIが開催されるのであれば、またメンター学生として是非参加したいと思う。

F君のKUPIでの学びを振り返って

松森　日菜

1 KUPIでの学びに関する対話から

1) F君のKUPIでの様子について

F君のお母さんと、F君がKUPIでどのように活動に参加していたかについて対話を行った。F君がKUPIの活動の中で特に楽しんでいる様子が見られたのが、体験新喜劇と体育館での遊びであった。これらの活動は、対話や講義中心の活動に比べるとF君にとって「参加しやすい」「みんなの輪に入りやすい」ものであったからである。

しかし、対話や講義中心のクラスでも発表を聞いて拍手をしたり、話し合いの雰囲気を楽しんだり、楽しそうな他のKUPI学生やメンター学生の顔をじっと見ていたりと、F君なりの形で授業に参加することができていたようである。また、オンラインではなく全員が顔を合わせて、リアルで関わることができるということが、F君にとってKUPIが楽しい場となっていた理由のようであった。ときには、目の前で講義がされていても眠ってしまうこともあったそうだが、誰もが経験のあることであり、またそんなハプニングをクスッと笑い合えるのも、教室というリアルな場で学ぶことの魅力だと感じた。

2)KUPI に参加したことで F 君に生じた変化

F 君が KUPI に参加したことで変わった点が２つあるというお話を聞いた。１つ目が、人の話をよく聞けるようになったということである。KUPI に参加した当初は、対話中に声を出すことが多く見られたが、授業に参加していくうちにじっくりと KUPI 学生や大学教員の話に耳を傾けられるようになったそうだ。２つ目が、金曜日に行った読書会や図書館見学がきっかけで本に触れる機会が多くなったということである。今まで絵本に触れる機会は少なかったが、KUPI に参加したことによって、本の読み聞かせを新たに始めた。

以前からよく知っている KUPI 学生だけでなく、初めて出会った学生や大学教員といった様々な人々との関わりを通して、F 君は KUPI 学生としてたくさんの学びを得ることができたようだ。

2 KUPI に参加して感じたこと

私は、今年度初めて KUPI に参加させていただいた。参加当初は、メンター学生としての役割は KUPI 学生の学びの可能性を広げる手助けをすること、つまり自分は支援する側だという認識が強かった。それゆえ、必要以上に KUPI 学生に気を遣ってしまっていたこともあった。しかし、様々な活動を振り返ってみると、むしろ私が学生たちにサポートしてもらう場面や、KUPI 学生の発言から気づきを得ることの方が多かったように感じている。KUPI 学生の発言にドキリとしたことも多かった。たとえば、一人暮らしに関する悩みを話し合ったときなど、自己開示を行う場面においては KUPI 学生が支援される側として葛藤していることを知った。KUPI 学生と同じ目線で、同じ場所で学ぶ時間は私にとって非常に有意義なものであった。

また私は KUPI 学生が、自分たちのことを「メンター学生と同じ神戸大学生」「(KUPI への参加が３回目だから）同じ３年生」などと自分たちが大学生として学んでいるということを誇らしく語ってくれるのが好きであった。今後の課題としても挙げられると思うが、教室の外にいる一般学生や地域の人々に学生たちは KUPI 学生を神戸大学生として認識していたのかということが気になった。KUPI での学びを発信するということができれば、もっと KUPI 学生という存在を知ってもらい、大学が開かれた場になるのだと思った。

最後に、KUPI で出会った素敵な皆さんとの縁をこれからも大切にしていきたいと思う。

居場所　あるいは、とりあえず寄る辺の力強さ　―M さんの語りから

井上　太一

【M さんのナラティブに触れて】

過去二年間の KUPI、また今年度の KUPI にも、同大学の職員として勤務している KUPI 学生のうち数名参加している。M さんも大学に附属する図書館で働き始めて三年になる。KUPI に参加したきっかけは、職場の同僚である O さんからの紹介であった。これまでも話を聞いて楽しそうだなとは思っていたものの、まだ仕事に慣れていなかったため参加を見送ってきた。やっと慣れてきたと感じた今年度、家族からの応援もあり、参加に踏み切った。

Mさんの学校経験として、中学以降は特別支援教育を受けてきた。そこでは「実習」「作業」という、具体的には箱詰めや検品といった、社会で働くための能力を身に着けるための時間が印象深いと振り返る。すなわち中等教育以降、こうした社会化の過程が、Mさんにとっての「学び」であった。「社会人になったら大変だから」と言われながら、教育を受ける。それは厳しいものであったが、同時に社会への所属感、承認を獲得できるような感覚であったという。ちゃんとできれば、認められる。それはそれで安心感があった。

KUPIに参加して一番感じたことは、それまで当たり前だと思ってきた「学び」との違い、またその「楽しさ」だったと語る。その「楽しさ」をMさんは「一人ではないこと」と表現した。時間を、空間を、共にする人が居て、わいわいできる。なかには自分が学びたいことをきいてくれる仲間がいたり、ときには一緒に学んだりする。KUPIは落ち着ける「居場所」なのだという。

とくに金曜プログラムでの困りごと、悩み事を介した対話では、それぞれが身に迫る問題、人によっては今まで他者になかなか開示できなかったような内面を、共有してもいいと思えるような関係性が、気づけば構築されていたことを、改めて感じたという。

同時に、大学で障害があって職員として働いている青年は多いが、身近に居る同世代である大学生との間に、悩みを語ったり、仕事上での問題やニーズを共有したり相談したりできる関係性はほとんどないのだということも見えてきた。

働くためというよりは、生きてゆくための「学び」だということ。(もちろん、社会で生きる以上、そこに「働くこと」は深く関わってくるとはいえ）なにかができるから、交換条件として承認を与えられるのではなく、共に居れば、共に居る時点で、とりあえず認められている。そうした今までとは異なる手触りの安心感をKUPIで得たというMさんの語りには、学びを楽しむための基本的な安心感やそこに基づく関係性の切実さが詰まっているように思う。

【わたしのナラティブをすこし】

三年間メンターとして参加したが、いまなおメンターという立場、その役割がよくはわかっていない。大学に先に居た、先輩のようなものかとも思う。わたし自身、先輩から多くのことを学んだ。とはいえ後輩から学んでいるし、同様にKUPI学生からもたくさん学んだ。とくに、とりあえず誰でも（もちろん自分も）そこに居ていいという原初的な条件が築く関係性の力強さである。とりあえず一緒に居れば、なにかが生まれるかもしれない。約束できる、予測可能な生産性にとらわれていると、そんな予測の不可能な生産性を、わたしたたちは見失ってしまうのかもしれない。わたしは見失いかけていた。

M君の新たな１面

今西　恵美華

M君にとって、今年度のKUPI学生としての経験は2年目となる。昨年度の彼は、真っ先に自身の好きなことに熱心だという1面を見せてくれた。志摩スペイン村、乗馬、だんじり、日本のお城、プロ野球、の話題になると止まらず、休み時間には好きな野球ゲームを

行う。またM君は授業がある度に今日何をするのかをノートにとる1面もある。授業内でもみんなで演奏を行う中、M 君は「今はノートを取っているから」と参加を拒んだ。他にも、よくメンター学生には楽しそうに親しみをもって接してくれる1面もあった。

そんなM君は今年度のKUPIで、私に3つもの新しい1面を見つけさせてくれた。まず1つめは、いつかのふりかえりでのことである。1 年目も聞いたなぁと思いつつ「なんて呼んで欲しい？」と聞いたのだ。その時M君から初めて聞いたあだ名が飛び出してきた。そのあだ名は、前の学校の友達からつけられた気に入っているものだという。また前の学校では先輩とも呼ばれていたとも嬉しそうに語ってくれた。2 年目ということでM君自身がKUPIとして先輩だと自覚したからなのか、M君は新たな1面を見せてくれた。

2つめの新たな1面は、他のKUPI学生への意識である。今年度の休み時間もあまり他のKUPI学生と話すことのなかったM君だが、対談内で「KUPIの楽しいところ」について聞くと、「他のKUPI学生がいること」と挙げたのである。確かに思い返してみれば、今年度の最初の火曜日には振り返りの際に「(13人もいる)皆の名前を覚えてきた」と言っていたし、対談時に「今年初めてのKUPI学生って誰がいたっけ？」と聞くと、名前を考えながらあげてくれた。さらにオンライン授業では「Sくーん！Nくーん！」と他のKUPI学生に声をかける場面もあったのである。M君は対面の授業では1人で過ごしていることが多いため、他の KUPI 学生には関心がないと思っていたが実際は案外意識、関心を持っていることがわかったのである。

3つめのM君の新たな1面もまたオンライン授業になったからこそ分かったことである。それは彼がKUPIで学んだことをKUPIが終わってからも継続して大切にしているということだ。オンライン授業で見ることのできた彼の部屋の壁には「闘牛」に関する模造紙4枚がびっしりと貼り尽くされていたのだ。その模造紙は昨年度の金曜プログラム内で行った自由研究にて作成したものだと思われる。完成したあとも終わったものだとせずに彼がKUPIで学んだことを大切にしてくれている1面を見つけることができた。

M君は、興味のある話題しかあまり話さない。問いかけてもタイミングが悪いと誤魔化されてしまう。それでもコミュニケーションを重ね同じ時間を共有していくと、新たな 1面は見えてくる。今年度のKUPIで見つけることができた彼の数々の側面から、彼にとってのKUPIの存在について考えてみる。すると、彼にとってKUPIというものの存在が、好きなことを学ぶことができ、他者と共有することができるという点において大切な居場所の1つとなっているのかもしれないと思う。

Y君との対談

荒木　紘汰

はじめてKUPI学生と出会い、一人一人の「個」の強さに圧倒された日からおよそ五か月の時が経った。火曜日メンターとして過ごしてきた日々も、この報告書を書き終えることで終わると思うと少し寂しさを感じる。それはさておき、この報告書では、一対一で対談する機会を得たY君との対話を振り返りながら、彼と私がどのようなことを学ぶことができたのかをまとめていく。

最初に質問したのは「KUPI での学びはどうだった？」というシンプルな内容であった。それに対する返答もシンプルなもので、一言「楽しかった」と返ってきた。そのときの彼の充実感に満ち溢れたような表情を見ただけでも、彼が KUPI を通して何か得るものがあったことが分かった。その後、具体的にどんな学びを得たのかなどについてテンポよく話を続ける中で、彼がこのプログラムを通じてある言葉と出会い、その言葉からずっと勇気を貰っていたことで自己表現を完成させることができたのだと語ってくれた。その言葉とは、ともに自己表現を作り上げてきた一般学生から伝えられた「自分らしさでいいんだよ」という言葉であった。

詳しくは火曜日プログラムの報告書に記載されていると思うが、彼は火曜日プログラムを通して、ダンスの振り付けから演出までを一から考えたミュージカル映画のような作品を自己表現として完成させている。そんな作品を制作する上で、彼はたくさんの壁にぶつかっていた。最終的にはたくさんの人がバックダンサーとして参加してくれたが、はじめは全く人が集まらなかったこと。いざ協力者が集まり、ダンスの振り付けを考えては見たものの、自分らしさを表現できていてかつみんなが踊れるような振り付けを考えること。そんな壁にぶつかったときに一般学生から伝えられてのが「自分らしさでいいんだよ」という言葉であった。KUPI では、自分の思った意見や考えた表現を素直に表出させても、みんなが受け止めてくれる。自由に表現できる環境がある。彼は、そういったことに気付かせてくれたこの言葉を胸に、自分らしさを表現することに邁進できたという。

その後、彼は順調に作品作りを終え、発表当日は見事な映像を披露することができていた。そんな彼は発表後、ともに作品を作ってくれた一般学生や作成に関わってくれた人、KUPI の活動を支えてくれたすべての人に対して感謝の言葉を述べていた。そして、KUPI が終わってしまうことに対して寂しさを感じており、少し涙を見せる場面もあった。

実は、この想いは発表数週間前に行われたこの対談においてもしきりに口にしていた。KUPI に参加し、自己表現をすることができている自分は恵まれていると感じていることや、この活動が終わってほしくないこと、他の KUPI 学生にずっと感謝の気持ちを伝えたいことなど、溢れんばかりの想いを伝えてくれた。彼のこの気持ちこそが、彼が KUPI という活動を通じて得たものの一つではないかと私は思う。

さて、最後になったが、少しだけ私自身が学んだことについて記させていただく。

私は KUPI の活動を通じて、障害を持った青年との付き合い方を考える機会を得た。活動のはじめは、あまりそういったことを気にせず、ただ一友人として仲良くなりたい一心で KUPI 学生と関わっていた。そんな中、相模女子大学との交流会の中で、ある先生から「メンター学生の KUPI 学生への関わり方からは、相手への偏見や遠慮などといった微妙な距離感を感じない、素敵なものである」という旨の言葉を頂いた。そのメンター学生の中に私が含まれていたのかは定かではないが、仮に私が含まれていたとして、果たしてあまり気を遣おうとせずに接していた私の接し方は素敵なものであったのだろうか。結局、この報告書を書く段階でもその答えは出ていないのだが、私自身としては、「健常者」や「障害者」といったレッテルを気にするよりも前に、一人の人間として仲良くなろうとする姿勢が大事なのではないかと感じた。感じただけであり、実際にそれが正しいものなのかは分からないが、それは今後の私の人生を通じて考えていきたい。

５．プログラムから何を学んだか

1）　授業担当教員

自己表現の作品化に取り組んで

津田　英二

１．　　自己表現をテーマとした背景

火曜日の授業「社会教育課題研究」を担当している。一昨年は「ライフストーリーを語り合う」ことをテーマとし、昨年はイギリスのピープルファーストグループとオンラインで交流することをテーマとした。今回は「自己表現を作品にする」ことをめざして授業に取り組んだ。

このテーマに決めたきっかけになったのは、コロナ禍で対面の交流ができなくなっている韓国の知的障害者、発達障害者のミュージカル劇団「ラハプ」が、オンライン中心の表現活動にシフトしたことで制作した作品「Disabled」を鑑賞したことだった。この作品は、団員たちの言葉を拾い集めて、その言葉をラップのリズムに乗せて本人たちが歌う形式のもので、いじめや孤独などのとても重たい内容の歌詞が人間味あふれる形でさらっと表現されていて胸を打つ。この作品を観て、知的障害者が動画を通して表現できる可能性が、これまで見過ごされてきたのではないかということに気づいた。また、ラップという表現方法は彼らに合うのではないかとも思った。

しかしながら、私自身がラップに挑戦したことがないし、そもそも好きこのんで聴いてきたジャンルでもない。ラップへの挑戦は今後の課題として、まずは自由な形で今時の自己表現を若者たちが追求したらいいということにしたのである。

２．　　制作過程、そして感動的な作品群

授業は、「自己表現とは何か」を考えることから始めた。改めて自己表現について考えてみたら、深いテーマだということを再認識した。自己表現の「自己」とは何か、自己表現とただの表現との違いは何か、表現とするところの範囲はどうか……。学生たちにも問題提起して考えてもらったが、そのことにどこまで意味があったのか、今でもよくわからない。

実際に制作活動に入ったら、KUPI 学生それぞれの世界が開陳されていき、一般学生、メンター学生もそれにどんどんのめり込んでいった。ほとんど全員にとって初めての経験だったというのもよかったと思う。手探りしながら KUPI 学生の可能性を共同で探っているような雰囲気があった。週 1 回 90 分で、しかも終盤はオンライン授業になってしまい、十分な時間があったとはいえないが、KUPI 学生の生きている世界の共有がかなり進んだという実感があった。ちなみに、制作が続いた数週間、私自身は何か KUPI 学生の表現を助けることはないだろうかと、ただうろうろしていた。いったい私は何の専門家なのだろう？と苦笑しながら。

そうしてできあがった動画作品は、2 月 1 日の公開授業で次々に発表された。どれも力作で、感動を覚えたり、笑いが起きたり、感情が揺さぶられ続けた 90 分だった。動画は作品として残るのもいい。いつでも思い出して観ることができる。また、KUPI で何が起こっ

ているのかということを外部の人に伝えるための最高の資料としても活用できる。ほとんどの KUPI 学生が、そのようなことに役立ててもいいよと言ってくれている。誇りを持って制作された作品なのだということを改めて感じた。

結局、自己表現とは何だったのか。その答えは既にどうでもよくなっていた。一般学生たちからも「KUPI 学生の自己表現に関わっていたら、自分自身も自己表現したくなった」という声が上がった。内容も素材も何でもよい。素直に生き生きといっしょうけんめい何かを他者に伝えようとすると、結果的に自ずと自己表現になっている、そんな感覚が共有されたのだと思う。

担当授業（共同お悩み相談）を実施して

赤木　和重

私は，水曜日のオムニバス科目である「よりよく生きるための科学と文化」第 1 回目・第 2 回目の授業を担当とした。授業の初回を担当するということもあり，緊張している KUPI 学生も多いことから，できるだけ柔らかい感じで，授業をスタートするように意識した。具体的には，授業の冒頭で，赤ちゃんの動画やかわいいロボットの動画を見せることなどを用いて，自然と笑顔が出るような工夫を行った。

本授業では，おもに「短所」に対する見方を考える・変えることを意識して授業を行った。問題意識の背景には，多くの知的障害のある青年たちが，短所を「よくないもの」「克服すべきもの」とだけとらえ，生きづらさを感じることがしばしばみられていたことによる。

そこで，第 1 回では，絵本『みえるとかみえないとか』（アリス館，2018 年）の読み聞かせを行いながら，「できないからこそできるようになる」こともあるのでは？」と問題提起をして，ワークを行った。第 2 回目では，「ゴミをひろうことのできないゴミひろいロボット」や，「動けないからこそ，お母さんを見つめあうことができる」動画を用いて，「共同お悩み相談」を行った。ここでは，それぞれが，「できないこと・苦手なこと・嫌いなこと」を出しあい，「解決するための方法」および「解決しなくてもいいやん。その理由は…」という 2 点について話しあった。

このような授業を通して，KUPI 学生に，「できない」ことも含めて，自分を表現すること，受け入れてもらうこと，そして，複眼的な視点を身につけてもらえればと思って実施した。KUPI 受学生は，メンターのサポートもあって，自分のできないことを表現しつつも，それを笑いあえるような実感を持てたのではないかと考えている。

ただ，関係性はまだできていないなかで，短所を共有するのは難しい側面もあると感じた。この点については，今後の課題としたい。

KUPI での講義を担当して

伊藤　真之

2019 年度からの 3 年間だったと思いますが、KUPI の授業を担当しました。
科学の発展により、人間の宇宙に関する理解が大きく進んでおり、最近の進展を含めた現代科学が描く宇宙像や、興味深い話題などについて紹介させていただきました。

最近は、大型望遠鏡や人工衛星の観測などで得られた美しい画像もインターネット上で公開されており、それらも活用して、できるだけ平易にわかりやすくお話するよう努めましたが、授業後のアンケート、感想などを拝見すると、大変興味を持ってくださった方もおられる一方で、「難しかった」という声もあり、少し反省しています。ただ、全ては理解できなくても、こんな話を聞いたことがると心のどこかに残れば、私たちが住んでいる世界の認識の広がりにつながるのではないかと期待しています。

熱心に受講してくださったみなさまに、心から感謝いたします。

よりよく生きるための「てつがく」

稲原 美苗

2021 年度もコロナ禍の中で KUPI の哲学の授業を実施した。今年度も昨年度に引き続き、10 月 20 日と 27 日の 2 週連続で担当させていただいた。1 週目が「幸せ」、2 週目が「愛」についてという一般的に「哲学」という感じのテーマを設定した。しかし、私自身に脳性まひによる構音障害があるため、マスクしながら話すことが予想以上に困難だった。KUPI のコーディネイターである河南先生に助けていただきながら、KUPI 学生の皆さんに少しでも考えてもらえるように工夫をした。

哲学という学問は、「思考」によって、論理性を重視し、間違えや憶測を慎重に排除しつつ、事象の本質に迫ろうとする知的営みであり、言語に依存している。KUPI の授業を担当すると、言語が万人にとって不親切なコミュニケーション手段だと感じる。授業の進行が困難だったにもかかわらず、「幸せ」や「愛」について一緒に考えてくれた KUPI 学生と彼らを支援するメンター学生に感謝したい。

近年、「考える力」の必要性について頻繁に言及されている。コロナ禍が続いている今日、私たちは多様な人たちと関わり、これまで経験したことのない状況に対応できる力を必要としている。その際、既存の考え方では通用しないことが増えている。そこで、この授業では、「自分で物事を考える力」を身に着けるきっかけになることを目的としてきた。そのために、「哲学対話」の形式を応用して、KUPI 学生が自分のことを安心して話せる環境づ

くりに拘って授業を進めてきた。「哲学対話」と聞くと、何か非常に難しい思考実践をイメージしてしまうが、哲学者の思想を教え込んだりそれについて話し合ったりする実践ではない。「あなたにとって幸せとは何か、愛とは何か」といった自分の周りにある身近な問いについて、その場にいるメンバー全員で意見を出し合って考えを深めていく実践である。

10 月 20 日の 1 回目の授業では、「幸せとは何？」というところから入った。言語では、表現できない人が多いと勝手に推測して、スマートフォンの絵文字の中から「幸せな顔」を選んでもらってから、どうしてその絵文字を選んだのか、その理由について説明してもらおうと考えていた。しかし、絵文字を使用しなくても、KUPI 学生は自身の幸せについて十分に言語化できていた。その後、次の 3 つの問い（①幸せってどんな時？②誰といる時が幸せ？③幸せと感じるってどんなの？）を出し、順番に答えてもらった。しかし、「なぜそう思うのか？」について聞けなかったので、今後の課題が残った。KUPI 学生やメンター学生の答えが出そろったところで、「幸福論」で世界的に有名な哲学者であるアランとラッセルの考え方を簡単に説明し、レジュメをそれぞれ自宅へ持ち帰って、考え続けてもらった。しかし、授業の前半で、哲学者の考え方に触れて、それを踏まえて皆で考えるという方が、良かったのかもしれない。

10 月 27 日の 2 回目の授業では、1 回目の反省点を踏まえて、前半で哲学的な考え方を簡単に説明した。2 回目のテーマは「愛」に設定し、3 つの異なる「愛」①エロース（性愛・自分への愛、②アガペー（神への愛）、③フィリア（友愛）について簡単に話して、実際には、愛の概考え方は人によって異なるということを皆で考えた。この 3 つの分け方もはっきり分かれるものではないだろう。前半、ミニレクシャーを 15 分ほどして、その後、KUPI 学生に、愛について次のような質問をしてみた。「誰に向けての愛なのか？」、「なぜその人を愛おしいと思うのか？」、という問いをグループに分かれて話し合って、その後、その人に宛てて、実際にラブレターを書いてもらった。あらかじめ便箋や封筒を用意していた。便箋はメンター学生が 4 種類も作ってくれて、封筒とシールは私が購入したものを使って、ワイワイしながら、温かい雰囲気で作業が進んだ。2 回目の授業は、宮城県のエイブルアートから二人の見学者が来ていたので、KUPI 学生やメンター学生もゲストが新鮮な気持ちになっていたように見受けられた。しかし、数名の KUPI 学生にとって、言語のみを使ってラブレターを書くという作業は難しかったのかもしれない。「〇〇をデザインしてみよう」というタイプの作業の方がもっと多くの KUPI 学生に楽しんでもらえたのではないだろうかと、反省点が残った。昨年度（2020 年度）は「自分を表現するオリジナル T シャツ」をデザインするという作業をしてもらった。T シャツの中に自由に絵やちぎり絵（コラージュ）などを使って表現した後に、その絵についての説明を順番に発表していった。昨年度と比べると、話し合う時間が十分にとれなかったと思う。今年度（2021 年度）は KUPI 学生とメンター学生と一緒に対話をしながらラブレターを作成し、その後、5 名ほどが、自分たちが書いた内容を発表してくれた。中には、恋人に宛てて書いた人も、家族や 20 年間すっと友情関係が続いている人に向けて書いた人もいて、その場が暖かい空気に包まれて

いた。

今年度は、私にとって 3 度目の KUPI の「よりよく生きるためのてつがく」の授業だった。昨年度受講した KUPI 学生も半数ほどいたので、今年度用に新しいテーマを設定して教材を用意したのだが、昨年度のような手ごたえを感じることができなかった。3 度目を終えた私は、前半に少し講義（15 分間）をして、その後グループ対話（15 分間）をし、何か「もの（アート)」を制作するという作業（30 分間)、そしてその作品の発表（30 分間）という進行パターンが､KUPI での｢てつがく｣の授業には適したスタイルであると認識した。毎年、異なる授業実践を試しているのだが、最初から言語を使うよりアートを介して言語化するプロセスを経た方が楽しんで哲学的な思考ができるようになると、3 度目の授業実践を通して感じた。

最後に、「愛」というテーマは KUPI 学生に好評だったので、今後、もう少し形を変えて実践すれば､KUPI 学生一人一人が自分自身のことを大切にする性教育にもつながると確信した。来年度も KUPI での授業を担当するなら、もう一度「愛」をテーマにして、自分と他者の関係について立体的に考えてもらえるように工夫したい。

2021 年度 KUPI 授業を振り返って

岡崎　香奈

１．授業について

1) 1 月 12 日と 26 日に､｢音楽する人間―音楽表現活動を体験しよう！｣というテーマで、2 回授業を行いました。シラバスの授業内容欄には「私たちは、なぜ音楽を聴いたり歌ったり、楽器を演奏したり、踊ったりするのでしょうか。人が『音楽する』ことは、私達の健康に役立つことがとても多いです。生活の中で音や音楽がもたらす効果に気付き、それを活用する仕事『音楽療法（おんがくりょうほう）』について勉強してみましょう。実際に、授業内で音楽表現活動を体験していきたいと思います」と記述しました。

事前に「みなさんの好きな音楽やアーティストについて、教えてください。また、音楽表現活動を行うときは強制ではありませんので、無理をしないで、皆さんの参加したいペースで参加してください。音楽活動を体験しながら、音楽のもつ効果について考えていきしょう」というメッセージを伝えておきました。

2) 第 1 回目の授業の冒頭で、自己紹介の替わりに一人ひとりの「好きな音楽、アーティスト」について話してもらいました。この活動は、音楽療法でも使われる「ミュージックシェアリング」というもので、単なる名前や所属の自己紹介ではなく「好きな音楽、アーティスト」を語ることを通して、お互いの今まで知らなかった面が垣間見えたり、共通の話題ができて交流が増えることがあります。教員、メンター学生、KUPI 学生全員がシェアリングを行い、お互いに「語りたい」「伝えたい」気持ちが高まって大変盛り上がりました。後半では、少し距離を取りながら大きな円を作って、トーンチャイムで「音のキャッチボ

ール（トーンキャッチ）」を行いました。
3）第 2 回目の授業は、大学の感染予防対策の変更により、急遽ハイブリッド形式で授業を行いました。対面で 6 名の KUPI 学生と 2 名のメンター学生が集まり、他の学生はオンラインで参加しました。トーンチャイムで合奏を行いましたが、楽器の交替時、その都度アルコールで消毒する作業が増え、本皮や木の楽器の使用が限定されたことは残念でした。合奏そのものは、教室にいる KUPI 学生とメンターで行いましたが、途中で「ZOOM 画面で指揮をしたい！」というアイディアが出て、少し音のラグはありましたが、全員が画面に集中する時間となりました。後半は、替え歌活動を行いました。対面と遠隔の KUPI 生をグルーピングするのは難しく、また画面とリアルで意見を拾うのが大変でしたが、パワーポイント画面を活用してメンターさん達がうまくサポートしてくれました。

２．振り返りと感想

２回目の授業をハイブリッドで行ったため、準備不足でスムーズに進行できなかったことが心残りでした。今後、ハイブリッドでもできる「音楽活動」を、もっと工夫していく必要があると思いました。

今年度も、河南先生や黒崎さんに大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。学生たちの日常の様子や集団における力動を教えてくださることで、「KUPI 学生とメンター学生と教員との関わり」が円滑に行われたと思います。

KUPI で読み合うこと

川地　亜弥子

今年度の KUPI は、ドラマチックでした。私の授業はこれまでと同じで、「人はなぜ書くのか」をテーマに、KUPI 学生さんにもメンター学生にも作文を書いてもらいました。いきなり自由に題を選んで書きましょうと言っても難しいので、いくつかのテーマを私が準備しますが、作文で書く内容も題も、それぞれ自由に考えてもらうことを大事にしてきました。

今年、印象深かったことを２つ書きます。

まずは、３年連続参加の KUPI 学生さんの変化です。１年目は、書いてもいいけど読まれたくない、という人もいましたし、メンター学生さんがつきっきりで何を書くのか、どう書くのか、相談にのってもらって、やっと書けた、という人もいました。それが、３年目では、全員が、自分でことばを紡いでいました。書き出すまでに時間のかかる人はいましたが、それも大事な時間でした。拙稿「ねがい広がる教育実践　11」（『みんなのねがい』2022 年 2 月号所収）で簡単に紹介していますので、もしよければお読みください。毎年書くことを積み重ねる中で、「川地さんの授業だからきっと何か書くな…」と予想してくれていたことも大きいかもしれません。

もう一つは、見学の学生さんも書いて読んでくれたことです。その方は、「見学者なのに、発表していいのかな…」と迷ったそうですが、思い切って発表してみたら、みなさんから

のコメントが本当にあたたかくて、読んで良かったと思ったとのこと（後の感想でわかりました）。

これは、KUPI 学生さん、メンター学生さんの聴く力が素晴らしかったのだと思います。誤解がないように書くと、他の人の話を聴く力はみなさんもとからしっかりあったと思います。でも、それだけではなく、自分自身が実際に書いて読んでみたことで、書くことの楽しさやしんどさ、それを読むときのドキドキや不安を分かってくれていたこと、その上でじっくり聴いてくれたことが良かったのだと思います。作文を書けるか書けないかを、個人の書く力として考えることも多いと思うのですが、実際のところ、読む人たちの力によって、随分変わってきます。今年の KUPI では、今まで以上に、書くことだけでなく、読むこと、聴きあうことの面白さも味わってもらえたのではないかと思います（ちょっと自画自賛？）。

「私もみんなと書いて読みあってみたい」と思われる人に向けて、この３年間で大事だなと思ったことをまとめておきます。（１）書いてもいいし、書かなくてもいい、書くけど読まないということも OK、としておくこと。つまり、聴くだけ参加ありにしておくことです。無理に書かせることは控えるべきです。（２）題はいくつか示してもよいけれど、必ず「その他」を入れて、「他に書きたいことがある人は、それを書いてください」と明確に伝えておくこと。仕事、演奏、旅行、野球、ダンス、手話、好きな人、友達、家族、ポケモン…などなど、自分の好きなものが明確な人は、「これを書きたい！」という気持ちがあります。（３）書かれた作品を尊重し、どんなに短い作品もわかりにくいと思う作品も、その人が一番書きたかったことを読み深めること。字の間違いなどを皆の前で修正しないこと。時々、他の学生が間違いを指摘することはありますが、教員やリーダーは、間違いにはこだわらず、その作品のいいところや、書いた人にとって一番書きたかったことは何かを読み深められるようリードするとよいです。(なお、一つ一つの誤りを修正していかなくても、みんなで読み深めて、質問しあい、味わうということを重ねているうちに、次に書いた作品が以前と比べて格段によくわかるものになっている、ということはよくあります。おそらく、みんなで読み合う経験が積み重ねられて読む人を想像しながら書けるようになること、「次に書くとしたら」ということで物事のとらえかたが明確になってくること、文学等も含めて他の人が書いたものへの関心が高まること、などが影響しているのではないかと思われます。）（４）作品を読み上げるだけでなく、印刷したりスクリーンに映し出したりして共有するとよいです。記憶や発語の困難がある人も発表しやすいですし、文字の表記が難しい学生さんも絵を書いてくれることがあり、それを味わうことができます。

この３年間、KUPI 生さんも、メンター学生さんも、書くこと、読みあうことの両方を、真剣に、そして楽しんでくれてありがとうございます。KUPI に関わる大学教員の多くが書いていることだと思いますが、こちらの方こそ、共に学ぶことのドラマを味わっています。

KUPI 報告書「様々なドッジボール」

喜屋武　享

1.　講義の概要

講義冒頭では、ドッジボールを例に、文化としてのスポーツの意義について学修した。具体的には、ルールの歴史的変遷や現代の様々なドッジボールについて視覚教材を用いて説明し、受講生が経験してきたドッヂボールとの違いを比較しながらそれぞれの特性を議論した。このねらいは、競技に参加する全ての人々が楽しめるようにルールを改変できるというスポーツの特性を KUPI 学生が理解することであった。

その上で、様々なルールによるドッヂボールを体験する機会を設けた。投球は両手投げを原則とすること、複数のボールを使うことなどを基本的なルールとして、受講生に馴染みのある通常ルールによる試合、チームの代表がアウトになると勝敗が決まる“王様ドッジボール”、ボールをドッヂビーに替えたディスクドッヂを体験した。

2.　講義を振り返って

講義を通して非常に印象に残っている場面があります。講義を終えて片づけをしながら数名の KUPI 学生さんと団欒をしていたら、T さんが琉球舞踊を習っていることを教えてくれました。

「そうなんだね。先生、沖縄出身だよ。先生も“かぎやで風”なら踊れるよ。」

と何気ない会話を交わしていたら、「先生大好き」と、ハグしてくれました。こんなにも真っ直ぐに感情表現をされたのは、学生時代、教育実習で小学校 1 年生を担当したとき以来です。忘れていた人間関係のあり方を思い出させてもらったような感覚で、言葉には表すことが難しい KUPI の価値を実感した瞬間でした。

「競技スポーツは人類の創造的な文化活動の一つである」（文部科学省、https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/athletic/070817.htm）と言われます。スポーツは、人間の体を動かすという本源的な欲求に応えるとともに、爽快感、達成感、他者との連帯感等の精神的充足や、楽しさ、喜びを与えるものとして継承されてきました。本講義においてもこれらの諸要素が垣間見られる場面が多々ありました。ドッジボールの試合中、チームメイトを気遣ってボールを渡す場面や、効率良く相手にアタックするために声を掛け合う場面、誤って顔面にボールを当ててしまった時にお互い正直に誤りを認め合う場面などが見て取れました。中には怖がってボールに触れられない受講生もいましたが、それをお互いに尊重し合う関係性も垣間見ることができました。自身の経験を振り返っても、スポーツを通じたコミュニケーションは、日常会話によるコミュニケーションとは異なる質の人間関係を築くことができる特質を持っていることを実感してきましたが、本講義を通しても KUPI 学生同士、KUPI 学生と授業者である私とは座学にはない特別な関係性が生まれたのではないかと省察します。

授業を担当した私は、特性を持った方を対象に体育実技の講義を担当したことすら初めての経験でした。講義の担当者として不安を抱えながら臨んだ授業でしたが、KUPI 代表の津田先生やコーディネイターの河南先生、黒崎さんをはじめ、メンター学生さんのサポートのおかげにより、KUPI 学生は安心・安全のもと学修に取り組むことができたと思います。記して謝意を表します。

２）一般学生の学び

①

KUPI の授業に参加してまず初めに思ったことは、参加している KUPI 学生のみんながとても楽しそうにいきいきと取り組んでいることでした。私は小学生と中学生の時にクラスに知的障害を持った生徒がいたことがあります。その時は、同じ授業を受けることもありましたがほとんどは支援学級という障がいを持った子がサポートを受けながら授業を受けるという形で、異なる場所で授業を受けることが多かったように思います。そのようなこともあり学校では偏見を持ったり距離を置いたり、障がいを持った生徒が楽しんで学びを続けることができた場所ではなかったように思います。

KUPI の授業では主人公は KUPI 学生で、主体的に授業に取り組んでいく姿が小中学校で見た教育の場とは大きく異なる点でした。ペアワークなどでいろいろと話していく中でみんなそれぞれが好きなものや嫌いなものがはっきりとあって、特に好きなものを話しているときの膨大な知識量と熱意はすごいものでした。得意なことや好きなことにとことん追求していけるこのパワーは様々な分野で生かすことのできる KUPI 学生の強みの一つだなと感じました。　私自身、障がいについてや共生社会などの学習は座学で学ぶ機会はあったものの、実際に当事者がどのようなことを考え、悩み、生活しているのかはわかりませんでした。KUPI の授業の良いところは実際に交流していく中で共に学習していけるところです。障がいを持っているということに対して思っていることを自ら話してくれた KUPI 学生の方もいました。その方は、障がいを持って生まれてきたことに対しては嫌だと思ったことはない。でも障がいを持っていると思われることは嫌だ。障がいを持っていても持っていなくても同じ人間なんだからと話してくれました。本当にそうだなと思いました。持ちたくて持って生まれてきたわけではなく、できることできないことが少し人と違うだけで同じであること。偏見などを無くしていくためにはこのように実際に交流していく場をもっと作っていく必要があるなと感じました。直接話し合うことで、お互いに様々な感想を持つと思います。それが双方向に良い意味を持つのではないかなと思いました。

最後に、一番長く自己表現の作成に携わった方の話ですが、彼女は学校で嫌がらせのようなものを受けた経験があり、学校に行きたくない時期や積極的になれなかった過去を話してくれました。その後 KUPI と出会い、一人一人に発言する場が与えられたり、手を挙げて自ら発言する場があったりする中で、少しずつ自分に自信を持つようになり積極的に発言できるようになったそうです。本当はおしゃべりがとても好きだけど、そうできない時期があった。KUPI のおかげで変わることができたと楽しそうに話してくれました。学校の場は障害を持った人にとっては、まだ十分な配慮がなされてないのではないかと感じました。支援学級なども配慮されてできたものとは思いますが、共生していくということを考えると課題はあるのかなと思います。この KUPI の授業のように一般学生と KUPI 学生さんが協力して共に学び合うという形は非常に素晴らしいものだと感じました。このような障がい者の参加に配慮されたイベントや授業などがこれから広まってほしいなと強く思います。個人的に、自分の思いを心の底から自己表現する KUPI 学生のみんなはとてもかっこよく、見ていて元気と勇気をもらいました。自分自身を振り返ってみると、我慢したり抑制したりして自分のしたいことや好きなことに正面から向き合えてないかもしれないと思い

ました。この授業を良い機会にもっと自分も自己表現してみたいと思うようになりました。

②

この授業では、KUPI 学生、メンター学生、一般学生というそれぞれ別の入り口から参加している人が互いに協働して、KUPI 学生の自己表現を作っていった。週に一度、1 時間半を計 16 回、この中でまず自己表現とはどういうことかを考え、その後実際に自己表現を作り、それを見合った。集団に慣れるためのアイスブレイク、できるだけ多くの人と関わり合うための工夫、お互いをよく知らない中でうまくつながっていくための仕掛けが、様々な形で凝らされているプログラムだったように思う。

改めて考えると、他者の自己表現を一緒になって 4 か月考え続けるというのは初めての経験だった。相手の授業時の顔しか知らない他者が、当人の自己表現活動に上手く一緒になって参加できるのか。そのような不安もあったが、最終発表会の時には様々な方向に心を動かされた。4 か月という時間をかけた作品が 5 分に凝縮されているのだから、それは当然かもしれない。

作品を一緒に作っていく中で、様々な気づきや学びがあった。その中で一番迷ったことは、KUPI のプログラムは真の意味で自己表現になっているのか？という点である。具体的に言うと、関係性もまだしっかりとは構築されていない第三者の言葉が相手の自己表現の幅を狭めてしまうことはないか、という不安である。今回の KUPI のプログラム、それぞれの自己表現は自分の得意なことを起点に広がっていったように見えた。ダンスが得意な人はダンスで、手先が繊細な人は工作で、動画編集が得意な人は最後その過程を踏むことを見越して自己表現を作っていったように思えた。私自身、相手の自己表現の可能性を探る中で相手に趣味や日頃良くしていることを尋ね、そこからヒントを得ようとすることが多かった。自分の得意なことから 1 歩先にあるものに他者と共に挑戦してみる。これが今回の KUPI の自己表現プログラムの大まかな構成だったというのが、私がこの授業に対し抱いた印象の一つだった。

だが KUPI 学生と共に自己表現の形を探すにつれ、このような形での自己表現でいいだろうかと迷うことがしばしばあった。障害と差別の歴史は長く、自己表現を始めとするセルフアドボカシーにおいてもそれは例外ではない。障害特性や合うもの合わないものに関わらず、障害を理由に様々な行為やこだわりを否定されてきた。少なからず障害を持っている人は自己表現を抑圧されてきた、そのような歴史の先にこのプログラムも存在している。もちろんこの授業においてその支援は主目的ではなく、むしろ被支援者-支援者という関係性を離れ、学び合いの相手として関係性を紡いでいくための工夫がたくさんなされていた。しかしそのような歴史を踏まえ、かつ対等な関係性の中で自己表現を模索するこのプログラムだからこそ、今までなかなか外に出せなかった自分を外に出すような自己表現を模索してもよかったのではないか。今回の自己表現が「自身が得意なことを起点に始まる」ことが主体的選択であったとしても、もし「得意なことから抜け出せない」がゆえの選択であるなら、むしろまるっきり別の方向性、少し苦手意識のある分野での自己表現を模索するような関わり方も必要だったのではないか。この授業の先に「上手に自己表現で

きた」という思いだけではなくて、少し自分の今まで見えていなかった可能性に目を向けたいと思えたり、「苦手を含めて自分でよいのだ」と思えるような自己表現を目指すべきだったのだろうか。

「表現未満、」という言葉がある。「表現未満、」は著書中では「目の前の人が大切にしていることを創造の軸として認め、さまざまな行為を迷惑行為ではなく大切な行為だと捉えておもしろがる言葉」とされている(※1)。意図的に出された表現だけでなくその人がそこにいる中で行っている行為やこだわりをも大切な表現と認識し、そこに秘められている創造性を大切にする概念である。例えば右足と左足で違う靴を履かないと外出しないという癖を持った人がいたとする。それを「困ったこだわり」と見るのが一般的な見方であれば、「表現未満、」ではそのこだわりをその人の自己表現と認識し、左右違うペアであることでどんなポジティブなことが起きうるかを考える。その人の行う行為をその人「らしさ」と認識し相手がありのままでいることを肯定するだけでなく、そのこだわり自体に実は思いもかけない創造性が秘められているかもしれない、という考え方をするのが「表現未満、」の意味である。その人の在り方自体が一つの「自己表現」で、支援の形はその可能性を支えるようなものがよい。ありのままの相手を肯定しよう、これも多様性や共生の文脈の中でよく言われることであり、相手の在り方を肯定した上でどんなことが可能か、相手の声を大切にしながら相手と関わっていくという点では、KUPI のプログラムと共通している部分である。

この考え方を踏まえると、自己表現という「型」を設定することで、その人の可能性を狭めることにはなっていないか、ということが心配になってきたのである。KUPI のプログラムで目指すべきものは、「表現未満、」を外に出すことを目的とした素の自分をさらけ出す自己表現活動だったのだろうか。

結論から言えば、私はそうではないと思う。KUPI のプログラムは、「ただそこにいる」のではなく主体的に「学び楽しむ」プログラムである。いたいようにいるだけが目標なのではなく、真剣に自己表現について考え取り組むことで自分の中に新たな気づきを得たり、他者と共に何かを作っていく過程がどのようなものか体感して、時には面白さを見つけるような、そういうプログラムなのではないか。いたいようにいる自分を支えてもらうのではなく、相互の積極的な関わり合いの中で自分の表現を探すそこには「いたいようにいる」だけでは得られない新しい可能性を探していく。それがこのプログラムの良いところであったように思う。「自己表現をする」という型を一つ作ることで、何かに能動的に取り組む楽しさや充実感を感じながら自分の可能性にも目を向けられる、そういうことが可能になる。

もちろん空間としては「表現未満、」が大切である。今回の KUPI のプログラムでは、それが成立していたように思う。大きな音が苦手ならその場を離れることができたし、自由に時間を使うことができたし、席も決められておらずどこに座っても良かった。制約はほとんどなかった。また、ある学生が自分の自己表現が相手の自己表現を奪ってしまうのではないかと心配している瞬間があったが、それこそまさにその人が「いたいようにいられ

る」空間を作るための配慮であった。しかし私は、今回のプログラムを通じて「表現未満、」の先にこそ他者との協働との可能性があるのではないかと感じた。主観的な感覚になるが、今回完成した作品を見て、私はたくさんの独自性とわくわく感を感じた。ありのままを、相手の「表現未満、」を受け止めてその上に自分の表現を重ね合わせることで、今回のようなたくさんの個性が共存するような作品作りが生まれるのだと感じた。
以上、私にとってのKUPIは、自分のあまたある表現を他者と重ね合わせることで生まれる新しい可能性について気付かさせてくれるプログラムであった。

※1『ただそこにいる人たち　小松理虔さん「表現未満、」の旅」』　認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ，小松 理虔，　2020，現代書館，p261

③

感じたことを自由に書く、ということをしたのはいつぶりになるだろうか。この書き出しを書きながら、今、まさに自由に書いているのだが、これは最終レポートの指示にそうあったからではない。KUPI生との関わりの中で、自由に表現することの難しさと、そうすることができる豊かさについて触れ、私も最終レポートを自由に書いてみたくなったからに他ならない。

「自己表現」の作品作りに関わるプロセス全てに関わらせてもらう中で、様々な葛藤と常に戦うこととなった。しかしその中で、私の固定化されつつあった枠組みがほぐれたことが、大きな学びの１つである。
例で言えば、自分が本当にKUPI学生のやりたい、それこそ自由な自己表現のサポートをできているのか？という懸念である。言い換えれば、自分が手間や気持ちの余裕のなさなどの自分の都合を押しつけていたり、自分が社会のより多くの人に理解されるだろうという「型」に近づけさせようとしたりしていないか、という懸念である。ただ、その葛藤の中で「この状況ではこの『型』が主流であり、そのため無難なこの『型』にしていないと不安である」という類いの自身の認識的枠組みがほぐれることとなった。

私は知的障害をもつ大切な友達がおり、彼らに対する自身の中にある加害性のようなものにある程度は自覚的であると認識はしていたものの、常に悩ましさを抱えた。私のペアであったKUPI学生は、好きなものに対して喋ると止まらなくなるタイプであり、文字に全てを書いて表現するのを得意とした人であった。「どんな自分を表現したい、知ってほしいと思ったりしますか？」と質問しても、「うーん、とにかく、プロスピ（プロ野球のスマホゲーム）について話したい！」「(何を表現したいかは）分からない」と答えていた。好きなものに対して詳しく知っており、情報（例えば何番の〇〇選手、何番の△△選手など）を言葉で全て伝え、紙に書いても表現していたが、私含む一般学生は、それのどこにどんな面白さを感じているのかの文脈が見えてきにくく、情報を述べているように聞こえてしまう部分も多く、学生さんの感じる魅力があまり伝わっていなかったように思う。そんな状況の中で、初めは情報を絞って、そして、魅力ポイントをKUPI学生さんの言葉で表現した文脈もつけて、綺麗な台本を作ることで皆にすきなものの魅力を伝える作品を作ることを２人で目指そうと話した。しかしながら、絞るということの目指す意味を理解してもら

うのに時間がかかったり、その都度やりたいことが変わったりして作業は難航した。「この形よりも、もっと情報を絞った方が伝わるかも…」と考えたり、赤と黄色のみで表現する学生さんに対して「もっと色んな色を使うのはどうだろう？」と提案しつつ受け入れられないと、「うーむ、少し見にくいな」と感じたりしたこともあった。しかし、その度に、「これは自分が今まで生きてきた中でよいと思う『型』が絶対に良いと思い込んでいないだろうか」という問いも自身の中で巡り始めるようになった。このプロセスを経て、最終的には、自身のものづくりのあり方が、他者から見て美しい・綺麗とされるものに無意識のうちに大きく寄せられており、それ以外をどこか認めないような姿勢があることに気がついた。

また、面白いものに面白いと、より素直に言えるようになったことも、大きな学びの１つであった。『型』が存在せず、皆個性を発揮した作品を作る中では、全ての面白さの指標が平等となっていた。そこには『型』が存在しないがゆえに、それぞれ違う独自の面白さが表現できており、それが『型』に依存した私にとっては希望的な空間となっていた。心から、面白いものを面白いと言える感覚を得ることが出来たのである。

以上のように、認識的枠組みを大きく揺るがす学びを、KUPI 学生との関わりの中で得ることができた。ただ、一番は友達ができたことや、自己表現の作品に関わる中で自分も自己表現する中、その中で生まれたいきいきとした感情が大きな学びなのかもしれないと感じている。

④

今回、私が KUPI のプログラムに参加して感じたことは、ペアの KUPI 学生のやりたいことを心から応援したい気持ちになったし一緒に作品を作って楽しかったのだが、そのなかでできることはこちらで判断する要素が大きく、自分の力量が試されているような気がした。私がペアを組んだ I 君は自分から積極的にコミュニケーションを取りに行くタイプではなく、思ったことを話して伝えるのが苦手そうな様子だった。最初は癖のある喋り方をうまく理解することができずに悪いなぁと思いながら何度も聞き返してしまったこともあった。しかし、同じ目標に向かって 2 人で作業をしていく中で、相手の言わんとするところが理解できるようになっていき、こちらの言っていることも伝わっている感覚も増え、なにより相手が要求を伝えてくれることも増えた。人見知りのところやおしゃべりが苦手そうだったため、とりあえず手を動かして作業していく中で彼の人となりややりたいことがつかめればいいと思い彼の好きなものをとりあえず作ってみることから始めたのだが、この作業によってお互いが仲良くなれたと思う。誰しもそうだと思うが、最初から自分を出すというのは難しい。なので、関係性を着実に築いていくことが大切であると感じた。

実際作品制作作業をやっていく中で、彼の空間把握能力の高さを発見して、自分にはできないことを軽々とやってのけるところをみて、すごいなと感心した。また、最初プランに出していなかった作品を作っていたり、資料になる書籍を図書館から借りてきていたりして、どちらもできることを頑張っているという納得感があったように感じる。また、彼と関わっていく中で、彼は言いたいことはいっぱいあって頭の中ではきっといろいろ考えているんだろうけど、それがうまく言葉で言えないんだろうということが、彼が言葉をひ

ねり出そうとしている様子から伺いとることができた。また、時間が足りない中でできることとやりたいことの葛藤があったのが伝わってきた。そんな中でも、自分なりに諦めをつけたり、その悔しさを穏やかに処理していたところに彼の成熟した大人な一面を感じることができた。(私は仕事で幼児～小学生とよく関わる機会があり、定型発達の子どもたちが感情をコントロールできなかったり相手に当たったりしている姿をよく見かける。) 知的障害を持っている人でも、苦手な部分はもちろんあるがしっかりと経験を積んだ大人であるというごく当たり前のことを身をもって実感したし、それが自分のコミュニケーションの感覚として得ることができて今後の自分のコミュニケーションにもつながってくる経験になると思っている。最後の振り返りの授業では、最後の振り返りで作ったものを嬉しそうに紹介する姿が印象的で、彼に限らず作ったもの自体を好きになって、それが自信になっている様子が伝わってきた。

この授業では、楽しいことをやる、やりたいことをやるということは人間の経験においてとても重要だということを再認識した。振り返りで聞いたある KUPI 学生の「自分はできる子なんやと思えた」という言葉が印象的だった。自分のやりたかったことが実際に叶って、作品を残したという事実が KUPI 学生の宝物になっているのだと思った。私はできるという自己効力感を養う経験をたくさんすることが大切で、障害を持っているとそのような経験をする機会があまり無いのかもしれないとも感じる。自分でゼロから考えてつくるという経験は難しい課題でもあるが、だからこそ楽しくて達成感も大きくて印象的な経験を創出できるのだと思った。それに伴走して一緒に作品をつくることは自分自身の社会的スキルを試されて、さらにそれを養うことができる経験である。今までの自分自身の前の学生時代の経験・社会人経験・子育て経験全て生きてくる作業となり、私自身も回り道のキャリアではあるが確実に自分自身が成長しているということを実感できた良い機会となった。

⑤

まず、KUPI に一般学生として参加したことで大きく考え方が変わったことが 1 つあり、それは、障害を持つ人たちは支援されるだけの存在ではないと思うようになったことである。私は、障害者の方たちと関わる授業であると聞いたときに、障害者と関わることに慣れておらず知識も少ない私がきちんと「支援」することができるのだろうか、と身構えていた。つまり、気づかぬうちに障害者の方たちを支援の対象ととらえてしまっていたのである。しかし、KUPI に参加し実際に KUPI 生のみんなと関わるうちに、支援―被支援の関係にとどまらない KUPI 生と一般学生の間にお互いにエンパワメントし合うような関係性を感じた。

具体的に例として、私が KUPI の授業に参加してどういった気持ちになったかを綴る。最初は、KUPI 生のみんなは話しかけても、自分に対して心を開いてくれていないような気がしたし、どのように話しかけたら良いのか分からず、障害者の人たちと関わるのは難しいなと落ち込むことが多かった。しかし、自己実現のワークを始めた頃から、だんだんその考え方が変わっていった。私は M ちゃんのペアになり、M ちゃんの自己実現のサポートをすることになったが、M ちゃんははじめ、全然話してくれず無口な子なのかなと思ってい

た。しかし、回を重ねるごとに、M ちゃんはいろいろな事を話してくれるようになりだんだんと心を開いてくれているような気がした。私の文字が上手だと褒めてくれたり、写真を一緒に撮りたいと言ってくれたり距離が縮まっていることを感じて、何よりＭちゃんが楽しそうで、彼女の力になれている気がして嬉しかった。私は、M ちゃんをサポートしているつもりだったけど、逆に気持ちの面でＭちゃんに支えられていることが沢山あったと気づいた。Ｍちゃんの力になれているという感覚は、自己効力感に繋がっていて、Ｍちゃんが私のことを褒めてくれたりすることで逆に私が力をもらうようなことがよくあった。このときに、障害者と関わることはお互いにエンパワメントする可能性を秘めているのだと感じた。

また、障害を持つ人たちの自己実現を支援し発表会を見て、障害があるからこその視点や関心など本当に多種多様でとても面白かった。KUPI 生のみんなが良い意味で自分勝手で個性的で、しっかりと自分を持って、それをみんなに表現しようとしている姿が印象的だった。KUPI でしか感じることが無かったであろうことを沢山感じ、学ぶことが出来、本当に良い機会だったと実感している。KUPI で知り合った障害者の方たちとどこかでまた関われたら良いなと感じる。

⑥

私はこの授業を通して主に２人の KUPI 学生と長い時間関わり、感情が動かされた。最初に私が関わった学生は、T くんである。彼との関わりが一番私は悩むことが多く、勉強にもなった。T くんはペアを組んだ際にすぐ心を開いてくれたため、楽しく活動することができた。しかし、Ｔくんの私に対する認識が「〇〇さん」ではなく「自分に優しくしてくれる女の子」であるということに気がついてからは、彼への接し方がわからず戸惑った。私はただ友達として仲良くなりたいと考えていたのにも関わらず、背中や頭をポンポンされたり、彼の自己表現の中に登場する彼の結婚相手役になってと頼まれたりした時には、どうすれば良いのかがわからなかった。私は距離が近い男の人が苦手であるため、このようなことを言われたりされたりすると、複雑な気持ちになる。しかし、ここで私が嫌がる素振りを見せると、「自分は障がいがあるから拒否されるんだ」と彼が考えてしまうのではないか、私のせいで彼が自信をなくしてしまうのではないか、と考えたため、どうすることもできなかった。しかし、私が我慢をしながら彼と接し続けることは、人と人との付き合い方として良くないと考え、葛藤していた。結局正しい答えはわからなかったが、「自分の苦手な人とは距離を取りたい」という自分の意思を尊重し、なるべく距離が近くならないように気をつけた。結果的には、彼を傷つけることはなく、良い距離感でこの期間を終えることができたように思う。

次に私が関わった学生は、K さんである。K さんとは一番長い時間関わったため、お互いを深く知ることができたように思う。その中でも特に印象に残っている言葉がある。それは、「障がいを持っていることに対しては何も思っていないけど、何か自分がしていることに対していつも障がいを当てはめられるのは嫌だ」という言葉だ。K さんは手話をしている。しかし、それは障がいがあるからではなく、手話が好きだからである。障がいがある

から手話をしていると言われたくない、と語っていたことがとても印象に残っている。

次に、この授業全体を通して勉強になったことが大きく分けて２つある。１つ目は、障害のある人の“恋人”“結婚”というワードへの関心の高さだ。多くの人の感覚では「好き」「結婚したい」という言葉を発するハードルは高く、ましてや初対面の人に発することはほぼない。しかし、KUPI 学生の多くがこのような言葉に抵抗がなく、「(ペアを組む際に)女性とも話したい」「(一般学生に向かって) 結婚したい」と発言していたことに衝撃を受けた。また、自己表現をする際もそれを全面に押し出していることが新鮮で、興味深かった。私はこれまで障がいのある人の性について考えたことがなかったが、この授業を通して彼らの結婚や恋愛に対する意識がかなり高いことを実感することができたため、勉強になった。

２つ目は、彼らは人との関わりを大切にしているということである。自己表現について考える際に KUPI 学生の過去や交友関係について尋ねたところ、彼らは本当に嬉しそうに友達について語っていた。T くんは、過去に自分を助けてくれた人のことをずっと覚えており、大切な友達だと話していたことがあった。また、別の KUPI 学生は自分のペアの子に毎日 LINE を送っており、ペアの子と写真を撮った際には、 “大学の友達”というコメントとともに Instagram に載せていたことがあった。このことから、彼らは自分の周りの人をとても大切に思っており、大切な人とたくさん関わりたいと考えていることがわかった。

以上のように、KUPI 学生と過ごした４ヶ月間は毎回が新たな発見と葛藤の連続であった。振り返ると葛藤の方が多かったように思うが、この葛藤を前向きな気持ちに変えることができたのは、一緒にこの授業を受けていた学生とその葛藤を共有することができたためであると考える。この授業はほとんどが対面で行われていたため、毎回の授業後に帰りのバスでこの葛藤を共有し、どうすれば良いのかを一緒に考えていた。これは葛藤する気持ちを抱えるうちに自然と生まれた行動であったが、この時間が私にとって大きな学びの時間となった。この授業は社会教育課題研究のうちの１つであるが、このように意図されていない場所で学びを得られることが、社会教育の魅力の一つであると考える。また。この授業は「障害共生教育論」という名前で主に障がい者との関わりについて学んだが、彼らとの関わる中で、改めて人と人との基本的な関わり方について考えさせられた。

⑦

はじめに

私はこの授業に参加するにあたって、KUPI 学生が障害をどのように捉えているかを知りたいと考えていた。今まで障害についての授業を受けてきたものの実際に関わる場面は少なかったことから、自分自身が障害に対して一面的な解釈に留まってしまっているように感じていた。そのため、KUPI 学生と関わることで学生本人の中での障害の解釈を知るという目標を立てた。

自己表現という課題

この授業の最初に半年間の課題として与えられた自己表現は、当初私が立てた目標にも適しているものだと感じた。実際、自己表現の例として紹介された韓国の学生が制作した

ラップでは障害について本人の中での解釈と周囲の違いを伝えており、私はそのような「自分にとっての障害」を表現することが今回の授業で求められている自己表現であると解釈した。しかし、実際に授業が進んでKUPI学生の自己表現をサポートする活動に移るとその解釈に疑問を持つようになった。私が前半でペアを組んだ学生はまず例示されていたラップに対して「よくわからない」や「何を言いたいのかわからない」という感想を述べており、自分だったらどうするか？という問いかけに対して自分は好きなことについてとにかく伝えたいと言っていた。この時に私は自分が、障害に関する要素がKUPI学生にとっての「表現したい」自己なのかどうかという視点を持てていなかったことに気が付いた。当然KUPI学生の自己のなかに障害に関する要素は存在すると考えられるが、それはここで障害について考えている私や他のどの人物の自己を構成する要素としても存在するもののはずだ。だからこそ、それ以外にもたくさんある自己を構成する要素の中から何を取り出して表現したいと思うのか、その優先順位は人それぞれであるということをここで気づかされた。この経験は、自分がKUPI学生にとっての自己の要素に勝手に大小を付けていたのではないかという気づきを生み、同時にその自分の行為の暴力性にショックを受けた機会でもあった。

自己表現と自己紹介

そのような経験もありながら KUPI 学生と自己表現に取り組んでいく中で、徐々に具体的な内容についての取り組みへと移行していった。先に挙げたKUPI学生も、その後発表までペアを組んだ二人目の KUPI 学生も発表の内容は主に自分が好きなものや得意なことをもとに自己表現をしたいと言っていたため、好きなものをとにかく詰め込んだ発表にするという大きな枠組みができた。

しかしここで私の中で生まれたのが、「自己表現と自己紹介はどう違うのか」というものだ。自己表現の具体的な取り組みの前に自己紹介をする場面があったが、そこでも好きなものや得意なものを話す場面は多く、担当した KUPI 学生の自己表現は一見自己紹介の拡大版のようにも思えた。

そのような葛藤を抱えながらペアの KUPI 学生が好きなものや得意なものの写真や動画を組み合わせて動画を制作する中で、私はそのような表現に対する KUPI 学生のある印象的な姿勢を見つけた。ちぎり絵が好きで得意だという KUPI 学生が実際にちぎり絵を作っていく様子を 30 分ほど撮影しそれを早送りで動画に組み込む際、制作中に制作意図を字幕で入れたり、完成したところでタイトルなどを入れたりすることを提案した。しかしKUPI学生はまず「タイトルは特にない」と言い、さらにその他の部分に関しても写真や動画を説明するような要素は無くていいと言っていた。後者の部分は私が編集することで遠慮があった部分も想像できるが、私はタイトルが無い作品を制作する過程を見せることができている部分に自己紹介ではない自己表現を感じた。自分がどんな人物かを「他者に」「理解してもらうこと」が目的の自己紹介では、「タイトルが無いちぎり絵」は即していないと省いてしまう要素かもしれないのに対して、自分がどんな人物かを「自分で」「外に出す」ことだけを目的とする自己表現では、あくまでも自分主体で自分を表現できるのではないかと考えた。

自己表現の主体性と他者としてのかかわり

このような違いに関する発見を踏まえて、そこからはより「KUPI 学生主体」を意識して制作を進めた。主体性を重視する一方で他者としての自分のかかわりも求められるのは非常に難しかったが、私は先に挙げた自己表現の「自分で」「外に出す」という目的のために必要な要素である自分を自分で理解する部分に関与する存在としての立場を意識した。素好きなものを外に出す際には好きなものは何か？という問いが必要だという実感は自分の経験からもあったため、主体性を引き出すための他者の関わり方として「問いかけ」という答えを持ち、取り組みを進めた。

また、そのような問いかけは KUPI 学生の主体性を引き出すだけでなく私自身の自己理解も進める側面があった。何か好きかという問いかけから、私が好きなものを伝えるところまで発展できたのは、自己表現に他者として関わることの大きなメリットであるように思った。

授業を終えて

発表を終えて、このような取り組みとその中での気づきを経て私は当初立てた「KUPI 学生と関わることで学生本人の中での障害の解釈を知る」という目標について再考した。KUPI 学生にとって障害がどのようなものかを直接的に話したり知ったりする機会は作ることができなかったため、正直本人の解釈については全く分かっていない。ただ、自己表現という課題だからこそ見つかった「自己を構成する要素の中から何を取り出して表現したいと思うのか、その優先順位は人それぞれである」という発見と自分で自分を理解して外に出すという過程の中での学びを踏まえたとき、私が目標とすべきなのは学生本人の中での障害の解釈を知ることではなく、本人の中での自己の解釈自体だと気づいた。そしてそのように「自分にとっての自分とは？」を自己表現しながら知っていく過程こそが、障害についての視野を広げるために求められるコミュニケーションであるように感じた。

おわりに

この授業を通して当初期待していた障害自体の解釈を広げることはあまりできなかったと感じる。一方でそのための前提が適切ではなかったことに気づくことができたため、今後はその気づきをもとに、どのように解釈を広げるかの段階から考え直したい。そしてその広げ方の一つとして、今回感じた自己表現の可能性を踏まえて考えていきたいと思う。

⑧

私は始めにＮくんと、途中からＳ君と共に表現の手伝いを行いました。始めにＮくんと表現したいものはないか、と尋ねたときに難しいなという話になりました。私から歌や踊り、絵や作家など様々な表現方法を提案しましたが、どれもあまり納得していない様子でした。そこから私から一方的に意見を言ってしまうことがありました。これによって私が思っているよりもＮくんの意見を引き出せていないのかもしれないと思いました。しかし、こちらが提案を行うことが無くても共同の意味が無くなるので、うまい分配でこちらが意見を提案できたら良いと思いましたが、それがとても難しく感じました。手伝わなきゃと

いう使命感が逆にＮくんやＳ君を圧迫することは何度かあり、あくまで対等な会話をしようという意識を常に持つようになりました。

Ｓ君に交代してからもＮくんがどのような表現を行うのか気になっていましたが、最終的にノリノリで動画を撮っていたので良かったと思いました。

Ｓ君も表現をどのように行うかという段階で少し詰まっていました。カメラで撮影しようということまでは決まっていたのですが、撮影することでどのような表現が出来るのかが曖昧だと思っていました。しかし、カメラのアングルを色々調べていたときにＳ君に「何か気に入ったアングルはあった？」と伺ったところ「いや、ない、自分で見つけたい」と独自のアングルを見つけようといて、表現の心意気を感じられました。私もそれいいね！となり、Ｙ君の劇を撮影する際は最も劇を効果的に撮れる画角を探しました。本番はコロナ禍の波によってオンライン授業になってしまい、撮影が出来ませんでした。後悔は残りますが、きっとうまく撮影してくれただろうことは確信しているので、また何か撮って欲しいなと勝手ながら思っています。(笑)

また今回はＹ君の劇を撮影させて頂いたおかげで、そちらの準備にも携わることが出来ました。とはいっても制作に直接関与したわけでもなく、背景や照明の設営を行っただけでした。しかしながら劇中で用いる「サークルオブライフ」の楽曲がたくさんの歌手によってアレンジされており、だれのものを使うのかということやダンスについて参加者全員が空間的な余裕を持って移動出来るように修正したりと、様々な紆余曲折があったことを見ていました。そんな劇の一員として本番も参加でき、素晴らしい演出が出来たことに本当に感謝しています。

ほかにもこの授業で培った経験はたくさんあります。手話や手記によるコミュニケーションが身近になったこと、白板に翼をくださいの歌詞をＳ君と一緒に書いて字が汚いことをいじられたこと、ダンスの立ち位置の構成を黒板にしどろもどろになりながら書いたこと、みんながとても溌剌で元気なので授業もとても活力的だったこと。授業では教科書を開いて考え事をしていたこれまでとは違って、経験から直感的に疑問提起が為されて、解決策を経験を通しながら試行錯誤するようなとても実践的な授業でした。

⑨

私は本授業において KUPI 学生の自己表現をサポートする中で、担当していた学生とコミュニケーションを取り、興味・関心などを引き出すことがあまりできなかったと感じている。私が担当していた学生は言葉をうまく話すことができず、普段は指を差し出して「～したい人」と尋ね、指を掴むと肯定、指を跳ね除けると否定の意を示すことでコミュニケーションをとっていたほか、意思表示として楽しそうな時には体を揺らしたり、不機嫌そうな時には声を出してその意思を示すといった行動をとっていた。そのような中、私は言葉以外の方法で担当していた学生が表現したいことをどう汲み取るかについて、悩むことになった。そして、自身が普段コミュニケーションの手段として用いている言葉にどうしても頼ってしまい、担当していた学生のヘルパーの方やご家族の方の語りを頼りに、担当していた学生は何が好きか、何が嫌いかについて知ろうとしていた。

しかし、授業の途中で、学生の自己表現として制作されているものを改めて振り返った

際に、これは本当に担当している学生の「自己表現」になっているだろうか、担当している学生のヘルパーの方やご家族の方の考えを表現しているものになっていないだろうか、と感じてしまった。また、担当している学生が好き「だと思われているもの」を、彼に押し付けてしまっていないだろうか、と感じることになった。しかし、同時に担当している学生のことについては、私よりもヘルパーの方やご家族の方がより理解していることは事実であるため、なかなかその悩みを言い出すことができずにいた。そして、結局はそうしたことを言い訳に、担当していた学生とのコミュニケーションの中で、彼の興味、関心を引き出すのをどこか諦めてしまった部分があったことを、授業を振り返る中で少し後悔している。

担当していた学生とのコミュニケーションについて、どのように進めるべきであったかと考える中で、私は彼が教室の中だけでなく、教室の外の景色や、好きなものだと言われていた乗り物、食べ物などを実際に目にした時の彼にもっと触れる必要があったと感じている。一度、担当している学生が普段遊ぶ際に利用している施設へ私も同行させてもらったことがあるが、その時の彼は周囲の方が「好き」と感じているものは不機嫌そうに跳ね除けたり、逆に思いも寄らないものに関心を示したり、さまざまな一面を見せていた。彼とそうした時間を共に過ごす中で、少しずつ彼の考えていることを自分自身の視点から捉えることが、私が本授業に取り組む中でより必要だったことではないだろうかと、私は授業を振り返る中で考えた。

⑩

私は障害共生教育論の授業でKUPI学生と関わる中で様々なことを感じ、学んだ。その中でも最も述べたいのは、実際に障がいのある人と関わったことで、自分の中で障がいのある人に対する考え方、向き合い方が大きく変化したということである。なぜ「障害者」ではなく「障がいのある人」と表記しているかというと、一人ひとり個性豊かで多彩な魅力を持つKUPI学生と出会い、「障がい」はそのパーソナリティを構成する一つの要素（障がいはマイノリティであり個性ではないとは思うが）に過ぎないことを感じ、彼らにリスペクトを込めたかったからである。まずはこの授業で行ってきたこととそこで感じたこと、考えたことを振り返りたいと思う。

３Ｑの課題は、KUPI学生と一般学生が二人一組のペアとなりお互いを紹介することだった。最初の授業のとき、学科の友人が隣にいなければ教室に入るのをためらっていたと思うほど、KUPIのコミュニティに踏み込むことがとても怖かった。なぜなら今まで私は障がいのある人と直接コミュニケーションを取った経験がほとんどなく、どのように接すればよいか分からず不安だったからだ。彼らが一般学生に対してどのように思っているのかも分からなかった。そしてその不安は的中した。なんとかコミュニケーションを取ろうとグループにいた方に話しかけたが、はじめは反応がなかったり会話が成り立たなかったりで、円滑なコミュニケーションを取る難しさを痛感した。また明るくおしゃべりで、授業に積極的にかかわっている方もいれば、無口で消極的であったり授業に不満があると怒って教室をでていったりする方、痛みや羞恥心に敏感ですぐに泣いてしまう方もいて、当たり前あるが、同じ知的障害という障害をもつKUPI学生でも、個人個人によって全く違う特徴や

個性があること、「障がい者」という枠にはめて画一的なかかわり方をするのではなく、その人の個性に合わせたコミュニケーション方法をとる必要があることを改めて実感した。しかしペアワークが始まり、一方的であっても自分からペアの方に話しかけ続けているうちに、自分の得意なことや仕事のこと、家族のことなどを少しずつではあるが話してくれるようになった。双方向のコミュニケーションが円滑ではなくとも、KUPI 学生はたくさんの得意なこと、好きなこと（例えば阪神タイガースの大ファンであったり、マリンバの大会で優勝していたり、ダンスや歌、手話が得意であったり）を持っており、対話などの働きかけによってそれらを引き出し、生き生きと話しをしてくれた・目の色を輝かせた時に、心を通わせられた感覚がありとても嬉しかった。そして一つだけ気になったことがあった。はじめてペアになった３０代男性の KUPI 学生に、初対面にも関わらず「結婚してほしい。」と言われた。それほどストレートにそのような話をされたことがなく、とても動揺した。普通、初対面の人に結婚してなどという言葉をかけたりするだろうか？そもそも私が考えていた「普通」とは何だったのだろう？私にどう思われるかなどは考えないのか？帰ってからもずっとモヤモヤしていた。同じ授業を受けていた一般学生にそのことを話すと、「自分も同様の経験をした。障がいのある人は性にオープンな傾向があるのかもしれない。」と話してくれた。それが本当ならば、なぜだろうか。彼らには「恥」の概念がないのか、それとも感情を忖度なく豊かに表すことができ、私たちが相手に気を遣い暗黙のルールのようなものをつくっているだけなのか、はたまた「障がいのある人だから」と枠にはめて考えることではないのかもしれない。今後の問題意識につながった経験だった。

３Ｑの終わり～４Ｑにかけて取り組んだのが、「KUPI 学生の自己表現のサポート」であった。私がサポートすることになったのは、同い年の女の子だった。発表準備を進めていくにつれ、悩んだことが３つあった。一つは、彼女に妄想癖、虚言癖の傾向があったことだ。彼女の好きなものをヒアリングし、特に話題に上がったアイドルの曲をみんなの前で披露するという流れになりかけていたとき、彼女が「じゃあ、私が〇〇ちゃんと〇〇ちゃん（アイドルのメンバーの名前）に来てもらうように連絡しておくね！」と言った。話を聞くと、芸能人に友達がたくさんいて、連絡先を知っているのだと教えてくれた。私は話の途中から彼女が事実と異なることを言っていることに気づいていたが、「そうなんだ！すごいね」と一旦話に乗ることしかできなかった。しかし、自己表現の発表は彼女が現実で行うことである。アイドルが来てくれるという妄想の世界と、発表をしなければならないという現実の状況を、どう分けて伝えればよいのか分からなかった。メンターさんや先生を見ると、意外と「それは無理だよ。できないよ。」とストレートに言っている場面をよく見かけた。また KUPI 学生の親御さんでも、我が子に厳しくしている様子を見た。その時、私は無意識に彼女のことを「障がい者」として見ていて、サポートと「してあげる」側にいるのだ、丁寧に接しなければならないと思いすぎていたことに気づいた。この体験から、彼女に対し一人の人間として対等に接しなければならないと学び、良い意味で普通の友達のようにコミュニケーションを取るようになった。二つ目は、毎回やりたいことが変わる、言っていることが変わることだ。前回やりたいと言っていたことが、次の授業では話題にも上がらない。そして新しくやりたいことが出てくる。発表内容が固まってきていた時にそうなることが多く、可能な範囲で軌道修正することに苦労した。三つめは、自己表現が苦手で、自分の意思をはっきりと表せないことだ。彼女は「分からない」が口癖

で、意思決定が苦手なようだった。そのため「何がしたい？」と聞くのではなく、「何が好き？いつもよく何してる？」と質問し、How ではなく What で答えられるように工夫した。

このような関わりを通して、無事に準備を進め、発表の日を迎えることができた。急遽オンライン開催になってしまったため、彼女がみんなの前でダンスや歌を披露できなかったことはとても悔しかったが、それだけ自分事のようにこの発表に関わってこられたことに驚いた。すべてオンラインでやっていたら、確実にここまで KUPI 学生と話ができていなかったと思う。コミュニティが生まれる空間の重要性にも改めて気づかされた。

最後になるが、サポートという立場にいてずっと考えていたことがある。それは知的障がいをもつ相手が自分に心を開いてくれているかどうかだ。半期という短い時間の中で、メンターさんや津田先生より信頼関係を築くことはできなかったかもしれない。しかし、私と関わったことでいろいろな表情を見せてくれたり、楽しく活動したりできたと思ってもらえてたなら嬉しい。このような機械で生まれたほんの小さなつながりのきっかけを絶やさないよう、また新たな学びの場やコミュニティにつなげていってこそ、持続的な共生社会が生まれていくのだと考えた。

⑪

私にとって、この授業は葛藤の多い授業だった。受講生として KUPI 学生とうまく関係づくりをしたい自分、KUPI 学生のふるまいに違和感をもっている自分とがぶつかって、どのようにペアの学生に接するべきか、たびたび迷っていた。今でもその迷いは消えていない。

これはこの授業に限らず、特別支援学校の実習にいった際もそうだったが、私は、障害をもった人への嫌悪感や怒りをどのように消化すべきか、いつも悩んでしまう。そして、自分なりの正解が見つからず、モヤモヤした気持ちを抱えたままになり、結局良好な人間関係を築けることなく、時には関わること自体をやめてしまうことがある。

この授業は学校とは違い、先生と生徒というような境目がないという特徴がある。KUPI 学生と一般学生は、授業内では、支援―被支援の構造をとっていながらも、その前提に友だち、知人としてのフェアな人間同士の関係が存在する。このような特有の性質が、私が抱えるモヤモヤした気持ちをさらに複雑化させたと感じている。

また、学校であれば、自分の感情を伝えるかどうかの基準に「子どもの将来ためにそうすべきか」がある。これも明確な基準ではないものの、その場の空気が悪くなることを分かっていても教師が叱るのは、子どもにとってのよりよい将来のための教育的愛情によるものである。しかしこの授業はそうではない。一般学生は KUPI 学生の教育係ではなく、友だちであり、お手伝いをしているにすぎない。

このレポートを書くにあたっても、まだ、モヤモヤした気持ちをうまく言語化することができていないが、このような葛藤を感じられたことが、この授業での一番の学びだった。どのように接することが自分なりの正解か、見いだせていないが、今後も考え続けたい課題が見つかったよい機会であったと感じている。

⑫　協働作業を伴う自己表現支援によって自己表現を啓発されるということ

はじめに

私は、第４クォーターからしか履修しておらず、授業の目的や狙いを理解していないままに、実践活動に参加し、津田先生以外に知り合いも誰１人としていない状況であったので、少し不安な気持ちで授業に参加した。しかし、そんな心配は必要なかったようで、一緒のグループになった KUPI の学生の方が、初めて出会った日に明るく自己開示してくださったことで、私も安心して、毎回の授業での作業が楽しみになっていった。そして、この授業を通して、表現の領域で人と関わることが、好きであり、得意であり、専門分野であることを実感さえられた。このことから、自己表現支援によって、自分自身が開かれていく感覚にどのような価値があるのか、授業を通して考えたことを言語化してみる。

リアルなコミュニケーションの中での他者認識と自己認識

現代、あらゆるデジタル機器を介したコミュニケーションが主流になる中で、特に、ライフストーリーや、その人の人となりに日常生活の中で、触れることは難しくなっている印象がある。その中で、「自己表現の支援」を、きっかけとし、他者のライフヒストリーについて、質問をしたり、その中から、その人の「人となり」を感じたりするという経験は、現代に生きる私にとって、とても新鮮であった。同時に、高校生ぐらいまでは、喫茶店で知らないおじちゃんと喋ったり、近所の人とおしゃべりする中で頻繁に経験していた「まったくの他者とのリアルなコミュニケーション」が、ここ数年、とても少なくなっていたことに気づき、現代の課題性を感じた。

今回初めて、「他社の自己表現を支援する」という経験をしたが、このことは時間がかかることでありながら、人と人とがクロスして、リアルなコミュニケーションの中でしか、実現できなかったことであったと思う。私たちのグループでは、「結婚式」を通した自己表現を目標地点においたので、その実現のためには、「人生を振り返る」という作業が必要であった。T さんにとって、総合的に振り返るということは難しかったようで、仮想の結婚相手の「大野さんが好き」という気持ちが先に言葉として出てくるので、T さん自身の生活や、今までの出来事について、T さん自身がどのように向き合い、感じているのかという繊細な部分を、キャッチするためには、どのようにアプローチすればいいのか、迷いながら時間を過ごした。私は T さんのことをまず、知りたかったので、インタビュー形式でたくさん質問をしてしまったが、それは自分のエゴでもあったかな、と思ったりもした。T さんにとって、インタビューに答えるような形で、自分自身のことを考えたり、言葉にする時間を持ったことが、ポジティブな内省時間となっていれば、嬉しいが、実際はどうであろう。T さんがどのように実際に感じていたかはわからないが、私自身の感覚としては、その場の空気感や、T さんの声、チームメンバーの意見、色々な要素を敏感に感じながら、質問できたと振り返る。どこまで、どのように、相手の話を受け入れて、質問するか、ということは、特に相手のことを知らない場合、「繊細な交渉」が伴う。今回は、対面であったからできたことである。

対面で会って、話をして、感じて、はじめて出会う他者を理解した上で、一緒に活動をするということは、私たちが生きる現代において、新たな価値があるように感じる。オンラインでは、相手の表情や細かい気持ちを読み取ったり、汲み取ったりすることが困難だが、

一緒に、時間を積み上げることで、相手を知り、本質的にその人が表現したいところを感じ取れるようになったと思う。「相手のことを感じることができた」という深い喜びは、自分の生きる価値を感じることにも繋がっている。

自分の専門性と「自己表現」というものについて

自分の専門性を、他者の学びや自己表現の支援の中で試す機会を自分だけで作るのは、とても難しいので、今回の授業はとても有意義な時間となった。

「音楽」「踊り」という芸術領域に自分の専門性があるので、言葉を超えたコミュニケーションも必要な今回の授業のような場面では、言葉を介さない表現言語として生かしやすいはずであるが、自分を「表現者」としてメタ認知してしまっているとき、表現するときには、自分のその時の状態が影響してしまうので、エネルギーの準備ができていない状態で演奏したり、踊ったりすることを躊躇してしまうことがある。(謎のプロ意識みたいな感じ…) しかし、今回の活動の中では、T さんが、好きだという曲を、楽譜をネット上で探して、とりあえず弾いてみたり、なんとなく知っていたメロディーに即興で音をつけたり、遊びながら、とりあえず、「やってみた」。 そしたら、T さんも、チームメイトも、私の演奏に、とても喜んでくれたり、ピアノの音に興奮してくださったりしている様子を見て、本当に、人の情緒に影響を与えたのかもしれない、と実感し、だれかから褒めてもらう言葉以上に、嬉しく感じた。自分自身は、常に、日常の中で、どのように自己表現をするか、ということを考えてアウトプットしながら過ごしているが、時々、それが本当に“自己”であるのか、強烈な自問自答をすることがある。しかし、この授業で、T さんの自己表現の支援として、T さんが歌う曲などの伴奏をしたことで、私自身が肯定されているような気持ちになり、彼女の気持ちの入る瞬間や、思いのこもった声を聞くことによって、そこに心を動かされている自分に気がつくことができた。どう言葉にしたらいいのかわからないが、『「表現者」としての私が自己表現しているのではなくて、私が表現していることが、目的はどこにあろうと「自己表現」になっていて、「表現者」として他人に認識してもらっている、そして自己表現によって生じたその時の他人と自分の反応に対して、自分は嬉しく感じるし、生きることの盾みたいになってる』というような「自己」の存在に気づいた。

自己表現は誰でも持っている権利でありながら、社会の中で、自己表現をすることにはリスクが伴う。この授業を通して、こんなにも、それぞれが、多種多様な表現をしたい！！という思いがあることを知り、とても驚いた。一般学生や、社会においても、もっと「自己表現をしたい！」という思いを持つ人はたくさんいると思う。今回、T さんが、はじめから自己開示してくださり、安心したために、私もあれこれしたい、という気持ちが起こった。各々の自己表現を叶えるためには、「自分の内なるものを他人に伝えたい」と思えるような、表現したくなるような他者との関係性を創ることが必要で、そのような関係性を創るというところを、今回「自己表現の支援」として、経験できたのだと思う。今後も色々な人の自己表現との関わりの中で、自分の表現をしていきたい。

⑬

私が今回の授業を通して一番大切だと感じたことは、「その人の個性をどのようにして

引き出すことができるか、生かすことができるか」を考えることである。この考え方をすると、「障害」と聞くとできないことに目を向けがちだが、「こんなこともできるのか」「こんな風に感じるのか」とその人のできることや感性に目を向けることができた。
・I さんは「どう思う？」「どうしたい？」などの抽象的な質問に答えることが苦手であり、つい誘導的な質問になってしまうことがあった。しかし、お話をすること自体は好きで、特に自分の好きなことだったり、休日やったことなどを話すときは楽しそうであった。そのため、好きなことについて「何の歌が好き？」「何をつくるのが好き？」など好きなことについて質問をするとよく話してくれ、自己表現の発表の時もそのときに話してくれたことを取り入れることができた。
・ある男の子は野球チームが大好きである。しかしそれに夢中になりすぎて自己表現の話題に持って行くのは難しそうだった。それを、彼が得意な「文字に書き起こすこと」で表現する方向に持って行った一般学生の子は、その子の特徴をよく生かしているなと勉強になった。
・F くんと F くんのお母さんと一緒に 1 番長く活動した。今まで F くんの無表情の姿しか知らなかったが、授業外では、様々な表情をしていた。また、近くにいる時間が長かったため、顔を覚えてくれ、私が近くに行くと笑うようになってくれた。ご飯を食べるときの必死の顔や、バスが通ったときの嬉しそうな顔を見て、どんな人にも感情があることを学んだ。また、お母さんの「彼にいろんなことをしてもらおう」という強い気持ちや、みんなに彼のいろんな表情を伝えるために動画編集を頑張っている姿を見て、このようなお母さんがいたから彼はこんなに表情豊かなのだと思った。
大勢の強い個性を少人数で見るとなると、部分的にしか見れなくなり「できること」にも目が向かなくなってしまうが、一人一人とじっくり向き合えたことで、しっかりそれぞれの個性を捉えることができた。人数比が 1：1 であることもこの学びの上で重要だと感じた。

３）KUPI 学生の感想と感謝の気持ち

I 君

火曜日は一般学生たメンター生が来てくれて話してくれました。韓国語の障害者たちが作った動画はさいこうでした。自己表現を作ったのは、マリオのハテナボックスと変身机でした。飛び出すカードは「この木何の木」「ジェット旅客機」「シロナガスクジラ」そして「桃太郎の桃」を完成するのもすごく時間がかかりました。水曜日は赤木先生の「共同お悩み相談」を学びました。ドッヂボールでは人を当てることやフエルトパンチャーで作った南京町の西安門でした。宇宙や光の速さそしてブラックホールの話しをしました。音楽を聞いたり楽器やトーンチャイムなどを鳴らしていました。金曜日は神戸大学のカフェ「アゴラ」では絵かきをしました。六甲台キャンパスの図書館は大きく 4 冊の本を借りました。体験新喜劇で練習してみんなと一緒に本番の時にやりました。クリスマス会でお菓子詰めとプレゼント交換して楽しく活動しました。

0さん

KUPIに参加してみて感じることは、1回目のKUPIから、今に至り、そして来年も参加したいという気持ちがとても強く持っています。
KUPIの授業も途中からオンラインという形になり、始めてのことで、急にKUPI生や、メンターさん、一般学生の皆さんと会えなくなったことは残念な気持ちになっていました。でも授業は最後まで受講できてとても良かったです。
大変な思いをしたのは、KUPI生等よりも、断然、黒崎さん、河南先生が大変だったのではないのかなと思います。河南先生は、途中から会えない状態となってしまったので、来年、会えるのを楽しみに待っています。KUPIの中でのLINEつづり方サークルとして、作文の授業で講師であった川地先生と、私を含め6人のメンバーで作文を書き、感想を出し合うといったこともしています。また、私は、1月15日、残念ながら日帰りとなってしまいましたが、岡山県邑久光明園へ行って、とても普段とは違った体の動かしなどもしたりして、崖の所を歩いている時は「ハァッー」といった心情だったけれど、海岸の清掃をし始めるとたくさんのゴミがありすぎて大変でした。
そのゴミというのは、大きいものもあるし、小さなものもある。大きい物が多いので袋がすぐにいっぱいになってしまうということもありました。
私が好きな清掃活動というものがまだ身近にあって良かったなとは思ったけれど、清掃をしている時に思っていたことは、誰がどんな思いでゴミを捨てたのだろうかと考えてしまう部分もあり、この活動には、これからも参加していきたいです。
KUPIの授業の話から逸れてすみません。これからも私のKUPIへの参加は続くとは思いますが、授業の際には、自分の苦手な授業の時には特に、メンターさん等に付いていてほしいと思っています。話が二転三転してしまい、すみません。
来年、受けれる場合は、よろしくお願いします。
そして、今年もお世話になりありがとうございました。

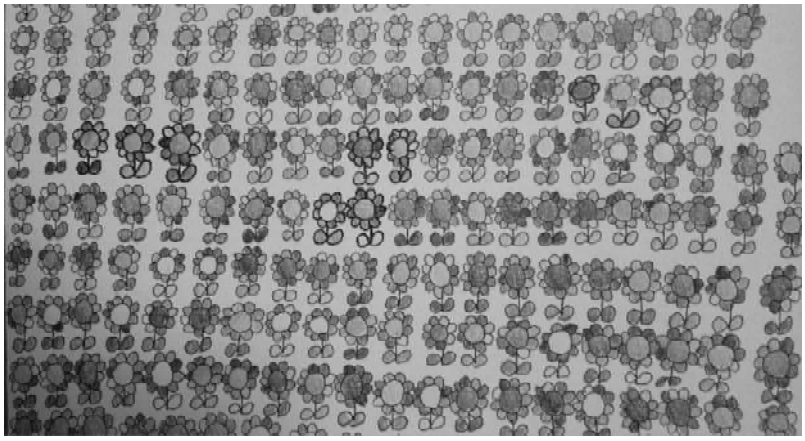
S君

僕のKUPIでの感想は、津田先生の自己表現の講義が楽しかったです。特にカメラで動画を撮ったりしたのが良かったです。後、神戸大学特別支援学校の柴田先生のフェルトパンチャー作りも楽しかったです。喜屋武先生のドッチビーも楽しかったです。
メンター学生さんや一般学生さんなどに　いろんなことを教えてもらいました。日頃から学生さんとは、接触がありませんでしたのでとても良い経験になりました。とてもうれしくなりました。ありがとうございました。

Tさん

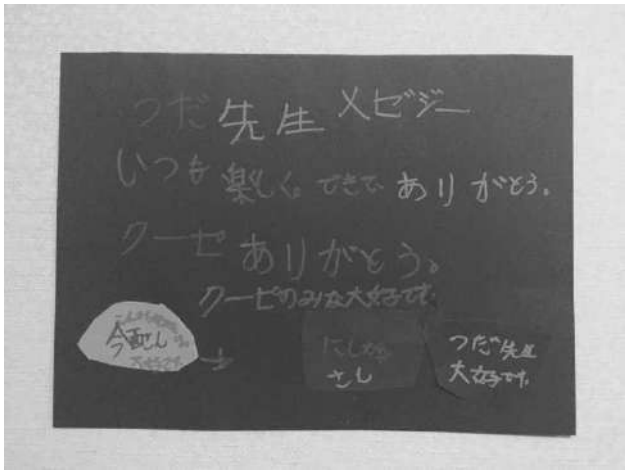
つだ先生へ
べんきょうおしえてくれてありがとう。
大野智のけっこんしきをしました。たのしかったです。わたしのセリフもよみました。
つだ先生大すきです。またあいましょうね。

オンラインしてくれてありがとう。
卒業式するのがさびしいです。はやく入学したいです。
くろさきさんへ
KUPI でふりかえりしてくれてありがとう。LINE してくれてありがとう。こうべ大学楽しかったです。またあいましょうね。オンライン（授業）してくれてありがとう。卒業するのがさびしいです。はやく入学したいです。くろさきさん大すきです。



T 君
KUPI の授業は難しいこともありましたが、いつも楽しかったです。授業の中で特に印象に残っている事は
①新喜劇で悪徳社長の役をしたことが楽しかったです。セリフもうまく言えたし、保護者の人達に見てもらえた事が嬉しかったです。
②火曜日の授業で結婚シュミレーションを作れた事が楽しかったです。メンターさんや学生さんと一緒に話しながら出来た事が嬉しかったです。ありがとうございました。

HH さん
つだ先生 メゼジー（メッセージ）
いつも楽しく。できて、ありがとう。
クーピ ありがとう。
クーピのみな大好です。
これからもなかよくしてね。
今西さん 大好です。
にしむらさん つだ先生 大好です。



HK さん
私が印象に残ってるのは自己表現と稲原先生の「幸せとは？」「愛とは？」家族、好きな

人・・・など。表現活動「手話歌、ダンス、詩を書く、絵を描く」私の方は手話歌が好きなので音楽と手話があうなぁ～って。
体育館でみんなとドロケイ、サッカー、風船バレーボール、なわとび、ボッチャ、いっぱい体をうごかして気持ちよかった。悩みや困りごとをみんなの前で話せるのっていちばんよかった。クリスマス会はプレゼントこうかん、いちばんさいこうにたのしかった。

F君（母、感想）
重度の障害で、しゃべることも字を書くこともできない息子H。
養護学校を卒業してから､同年代の方と絡みながら楽しむ機会はとても少なくなりました。KUPI の存在は初年度から知っていましたが、Hが参加できるようなプログラムではない、と思っていました。でも参加した人たちがとても楽しそうにしている話を聞き、H が参加できそうなところだけでも参加できないだろうか、と相談し、受験。なんと、受け入れていただけることになりました。(ヘルパーまたは保護者付き)

「退屈したり、いやになったりして、騒ぎだしたりしないだろうか｣､｢みなさんの邪魔をしないだろうか｣、という親の心配はすぐに打ち消されました。H は火曜日と金曜日だけの参加でしたが、どちらも途中で騒ぐこともなく、最初の授業からしっかりと楽しむ姿が見られました。

金曜日の授業で「図書館に行く」時は､｢一番苦手なところでは？これは静かにしていないといけないところだが、耐えられるかな？」といつでも抜ける覚悟で参加しました。が、以外にもみなさんと一緒にずっと図書館にいることができ驚きました｡図書館の方が､H の好きなものが載っていそうな本を､一生懸命探してくださったこともありがたかったです。また、同じく金曜日の授業ですが、時には自分も発言したかったのか、他の人が発言している時に「うーうー」とずっと声を出していて、KUPI の友だちから､｢H 君、少し静かにして」と注意されることもありました。そんな経験もまたこの場でしか味わえないうれしいことでした。
「新喜劇」は、他の場所でも経験があり、楽しめるプログラムでした。期待を裏切らず、みなさんの輪の中で演じる姿を見ることができてうれしいです。
金曜日の最後の授業で「KUPI のみなさんにとって H はどんな人でしたか」というテーマで話し合いをしてくれました。親である私にとって、ドキドキする時間でした。みなさん優しくて、悪いイメージはなく､｢明るい、力強い、優しい、一緒に音楽したい」など、プラスのイメージを話してくれました。一生懸命 H との活動を思い出しながら話してくれて、とてもうれしかったです。最後の方で R さんが「自分のこともテーマにして」と言っていました｡｢あ、みんな自分のことをいっぱい聞いてほしいし、見てほしいんだな」と思いました。

火曜日の授業は「自己表現」でした。H はいろんな表現をする写真を集めることにしました。一般学生さんが H の日常の様子を撮影に来てくれたり、ギター伴奏してくれたり、歌をうたってくれたりと、とても協力してくださいました。正直なところ私の宿題がたくさ

んあり大変でしたが、出来上がった動画は我が家の宝物になりました。
言葉はないけど表情と行動で気持ちを表す H。自分にとってつまらなかったら寝る、面白かったら笑う、楽しかったらはしゃぐ、難しかったらボーっとする、興味があったら前のめりで目をくりくりする､そんな姿を皆さんに見ていただけたと思います｡今回は新たに、自分も言いたいことがあると声を出す、という表情も見られました。KUPI のみなさんが、手を挙げて自分の意見を言うのを見て、H も覚えたようです。伝えたいことがあるときは相手に向かって声をかける。最近、家でもよく見られるようになりました。

ずっとHの代弁者として付き合ってくれたヘルパーさんからは､｢H 君に対しての学生さんからの質問に答えて､H 君もうれしそうにしていたと思います｡｣と感想をいただきました。みなさんの輪の中に入れていただいて、KUPI の授業はHにとってとても楽しく、わくわくした時間だったと思います。
こんな楽しい機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

M さん
初めて、KUPI に参加して、最初は不安でした。でも、皆さんが優しく声をかけてくれたことが嬉しかったです。あと、KUPI のメンバーが最高でした。火曜日は自己表現で一般学生さんと考えて編集をしたのが楽しかったです。一般学生さんとお話しできてたのしかったです。津田先生の自己表現の動画おもしろかったです。また、一般学生さんと勉強がしたいです。水曜日は体育でドッヂボールとドッヂビーをしてたのしかったです。ほとんど自分がボールとることができました。みんなからほめてくれました。勉強では宇宙、火星、月、光の速さの事まなんで、自分がしらない事が沢山ありました。詳しく話しきけて良かったです。金曜日は表現活動で手話歌をして、好きな曲 ONE LOVE の手話できて楽しかったし、うれしかったです。そのおかげで手話友だちができて良かったと感じました。

M 君
神戸大学で学べてとても良かったです。楽しかったのは伊藤先生の宇宙の科学の授業がとてもわかりやすく楽しかったです。自己表現で、今までは伊勢志摩スペイン村パルケエスパーニャでしたけれど今年からプロ野球スピリッツエースにしました。なぜなら僕は福岡ソフトバンクホークスが好きで選手がカッコイイからです。今年はパリーグ制覇してほしいです。
・体験新喜劇で Y 君と DA PUMP の USA を踊れたことが楽しかったです。・メンターの宮村真菜さん竿みうさん今西さんマツモリヒナさん中村さん尾崎さん藤井さん澤坂さんにたくさん話ができて嬉しかったよ！
・宮村真菜さん今西さん藤井さんに伝えたいことがあります。黒崎先生からメールが届き 3 月に神戸大学を卒業される予定ですと書いてました。宮村さん今西さん藤井さんお願です。卒業しないでください。他の所に行っても僕のこと忘れないでください。大好きだよ！また神戸大学に遊びにきてください。
・岡崎先生の音楽でも宮村さん今西さん藤井さんが居てくれて本当に「ありがとう」と伝えたいです。トーンチャイムの時宮村さんのとなりでしたことがとても良かったです。半

年間本当にお世話になりました。先生方をはじめメンターさん本当にありがとうございました。　令和4年2月16日(木) M

Y君
火曜日感想です。「自己表現」では何をすればいいのか最初はわかりませんでした。だけどメンターさんや先生に相談して「自分のしたいことで大丈夫ですよ」と言われダンスをすることにしました。最初は不安だったけど、最後は自分で思った通りのものが先生たちの手助けのおかげで作り上げることができました。
自分の思をダンスに表現することはとてもむずかしかったけど、楽しかったです。ご指導ありがとうございました。

「自己表現のダンスメンバーのみなさんへ」
　ぼくはさいしょ、まだ何をしたらいいのかわからなかったです。でもみんなとダンスをやりたいと思ってさいしょのペアの澤坂さんにそうだんをしたらいいよと言われて、自己表現のダンスのメンバーあつめがはじまりました。みんなのきょうりょくのおかげで15人のダンスメンバーがあつまりました。15人もあつまった、とメンターの今西さんに言ったらすごいね！よかったね！といってくれたおかげで、ぼくは自己表現のダンスがようやくはじまったと思いました。
　ダンスのふりつけはかんがえて、できたらメンターの今西さんにチェックしてもらって意見をもらって、なんかいもダンスのふりつけをかえるたびにメンターの荒木さんがれんしゅうにつきあってくれました。そしてダンスのふりつけがきまりました。
　1月11日の日にダンスメンバーとダンスのふりつけをれんしゅうしました。1月18日にみんなといっしょに本番をやってよかったです。きょうりょくしてくれたみなさんありがとうね。とってもよいさくひんができたと思っています。本当にさいこうの思い出をありがとうね。リーダーYより

４）ボランティアに参加をして

小林　真理子

　今回はKUPIの火曜日授業にボランティアとして参加させていただきました。
　私は普段、本学のサテライト施設「のびやかスペース　あーち」で業務を行っています。今回の授業のテーマが“自己表現”であると聞き、一般学生やKUPI学生がどのように授業での課題を進めてゆくのか、とても興味があり大学教員にお願いをして参加させていただきました。とはいうものの、私自身は特定の学生や作品作りに深く関わるということはなく、ただただその授業の雰囲気を観させてさせていただき、授業終わりのメンター学生の振り返りにも厚かましく参加させていくという、あんまりお役にたてない存在でしたが皆さんには毎回暖かく迎え入れていただきました。
　“自己表現”をテーマにした作品づくりは最初こそ穏やかな雰囲気でしたが後半になる

につれて活気のあるものへと変わっていきました。最初は KUPI 学生に対して何となく遠慮がちだった一般学生も KUPI 学生の作品作りの想いに応えるかたちで協力し、授業が進むうちに相互理解が進み互いのアイデアが自然と生まれていったグループもたくさんありました。日程が限られている上、途中でやむを得ず授業がオンラインに切り替わり多少の不便さも味わいながら、それでも限られた条件や時間の中に話し合いや作業は突き進んでいきました。一方 KUPI 学生各々のその人らしさを作品にどう込めて表現していくか、悩む学生の姿もありましたがどの学生もとても有能で随所に工夫を凝らしメンター学生のサポートもあり、どれも素敵な作品へと仕上がっていきました。

このような活気のある状況で作品づくりが進んでいったわけですが、今回の参加を通して気づきを得たことがありました。

そのうちの一つを挙げると“障がいに対する固定観念が自分自身の中にまだまだある”ということです。私は“個人がもつ障がいの特性に配慮し適切な対応をしないといけない”という強い観念がいつもどこかにあって、そればかりに随分と執われていたように思います。勿論、日常的に医療的ケアを必要とする場合もあるので、全ての特性に配慮しなくてよい、ということをいっている訳ではないのですが、先のような義務感に近い思いだけで果たして人とコミュニケーションを楽しみ、共に生き、楽しみ、共に感動を味わうなど温かみのあるものとなるでしょうか。コーディネーターや大学教員の様子をよく注意して見ると、一般学生も KUPI 学生に対しても、同じ学生としていつも寄り添い対等に語りかけていてました。今回の参加を通して自分の足りないところをまた一つ発見し、気づけたことは私にとっては大きな収穫でした。

印象に残っていることもあります。KUPI 学生の意欲や授業への姿勢はすばらしいもので、彼らの学びへの意欲の高さには尊敬の念しかありません。KUPI の授業は夕方から夜（5 限から 6 限）にかけて実施されます。仕事を終わらせてから授業に出る KUPI 学生もいるそうですが、どの学生も意欲的に参加し発言力もあり何より素直なのです。疲れが出ていないか心配することもありましたが最後まできちんと取り組む姿がとても印象的でした。

また、KUPI 学生と一般学生が共に考えアイデアを出し、協力しながら積極的に作品づくりへ取り組む様子は地域活動そのものにも見え、学内であっても地域社会にいるような実践的で質の高い学びの姿であるという感想を持ちました。

自己表現にむけた作品づくりは一旦終わりとなりましたがこの経験はきっかけに過ぎず KUPI 学生のその後へと続いていくような気がしています。短い期間でしたがとても楽しい時間でした。この場をお借りし KUPI 関係者の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

金曜ボランティアでの活動を通して

西浦

私は金曜プログラムのボランティアとして KUPI に参加した。当初私はメンター学生として活動する予定であったが民間企業に勤務する社会人である為に諸事情ありボランティアに変更して頂いた。KUPI にはゼミの担当教員である津田先生に誘って頂いた。私は津田

先生が携わっておられる「あーち」のあたたかな雰囲気とそこに集う人々が好きである。KUPI にも「あーち」と同じあたたかな空気があると考えボランティアとして関わる事をとても楽しみにしていた。コロナ渦に神戸大学に入学してオンラインでの学生生活を 1 年半送って来た私にとって KUPI は初めての対面での学びの場となった。

KUPI は 2021 年 10 月 1 日に入学式が行われて翌週から授業が始まった。授業の回を重ねるにつれて少しずつ KUPI 学生と私は関係を築いていった。KUPI に参加していて特に心動かされたのは読書会、表現活動、振り返り、新喜劇といった活動の中で KUPI 学生の「その人らしさ」が発揮された時である。ダンス、歌、音楽、詩のように方法はひとりひとり違っても自信を持って自らを表現する彼らの姿に私は魅せられた。なぜ彼らは「自分らしさ」を発揮できるのだろうか？と考えたときに場において「その人らしさ」が発揮されるには人を見守り、自らも見守られる双方向の関係が必要である事に気づくことが出来た。

私にとって KUPI の金曜プログラムは 1 週間に 1 回の癒しになっていた。大阪から神戸に向かう阪神高速神戸線の大渋滞に巻き込まれても気分は晴れやかであった。終盤に掛けて仕事の調整がいよいよ難しくなり遅刻、欠席が多くなったがたまに顔を出すと KUPI 学生、メンター学生、コーディネイターがあたたかく迎え入れてくれて凄く嬉しかった。KUPI は先日修了式を迎えた。私もこの 3 月に神戸大学を卒業予定である。私は KUPI での学びを一過性のものとせず卒業後も何らかの形で KUPI に関与させて頂けたらと考えている。メンター学生 I さんと修了後も KUPI 学生が集えるアジトを作っていこうと盛り上がった事と KUPI 並びに KUPI 学生が大学の学びの幅を拡げていく過程を見ていきたいからである。学びの機会を下さった関係者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

水曜日・金曜日メンター（ボランティア）

張 絵迪

当事者から見た健常者社会の規範化された居心地

私は今年度で KUPI への参加は 3 回目です。

1 期生として昨年度までは、KUPI 学生として参加させて頂きました。

今年度は立場を変え自分の意志でメンターとして参加を選択した次第です。

主に水曜日と金曜日、あくまでもボランティアと言う括りで『授業記録』として関与しました。

本題の前に少し個人的な事について触れさせて頂こうと思います。

私自身は当事者で有りながらも知的障害を罹患していません。即ち本来は KUPI 学生としては該当しません。

ですが受講条件に有る療育手帳を所有している事から、権利の狭間に有ります。そのため周囲と摩擦が起きています。

したがって、厳密に言えば本来の文部科学省の委託事業としての趣旨である、知的障害の方が大学での学びの機会が少ない事を危惧されている意義から、矛盾が生じていると感じます。

実際に 1 回目の KUPI 学生として参加した際に、一部のメンターや教授からの何気ないごく自然な雰囲気の質問で『何故知的障害は無いのに参加しょうと思ったの?確かに療育手帳は所有してるけど…。養護学校へ選択したのは何故?』と投げられる事がしばしば有りました。誤解を招く解釈なると思われる方もいらっしゃると思いますが、決して質問された事に対して批判的意見の意味では無い事を補足します。
本題に戻します。
2 回目の KUPI 学生として参加した際、修了式を迎える少し前に 3 回目の参加方法を自分の中で心に決めていました。
毎年目的意識を持って参加しました。
1 年目:ネットを介して情報入手し興味本位での参加。知的障害では無いが療育手帳を所有しているため参加。
2 年目: 学校教育と特別支援教育の受けた経験から私の中で当事者で無い人と価値観との間に価値観のずれを感じる様になりました。そのずれの理由を模索するため。
そして 3 年目。
高校で特別支援教育を目の当たりにした事で、私が複数の属性を持っている事は強みで有ると気が付きました。例えば…中国人のコミュニティで有れば中国人として振る舞う事が出来、日本人のコミュニティで有れば日本人としてそこに参加する事が出来ると言う事です。
最後に感想を述べ締めとさせて頂こうと思います。
授業記録としてボランティアの建前でメンターを 4 か月間しましたが、非常に疑問と歯痒さ…を感じました。
理由はシンプルです。何度も繰り返す形となりますが、本来は『KUPI 学生の卒業生』、即ち卒業生がメンターとして入ると言う事は関係者で有る事を説明が付けられるからです。
又 KUPI 学生の卒業生として読み取れるのに、何故建前でボランティアとして括られてしまい、メンターでは無い感じがありました。本来の想定とした事と掛け離れた感が水曜日のメンターで抱きました。本来は当事者として見える事とフラッグフットボールとして携わっている支援者の両方の強みとしての経験を活かす形で取り組めたかった。でも取り組め無かったと言うのが水曜日のメンターとして参加した率直な感想です。
又メンターにも関わらず、何処かで卒業生と言う側面や支援者よりの関わり方が何処か心地の悪さでは無いのですが、疎外感を抱きました。
金曜日は KUPI 学生やメンター学生などの規範化された考えを取っ払い、メンターと言う認識を持って週 1 のズームでの授業に関する会議や話し合いを通じて参加した感が有り凄く自分にとって適度な距離感で参加出来たのかなと言う感想です。

６．訪問者と訪問による報告

１）訪問日：2021 年 10 月 26 日，27 日
訪問者：NPO 法人エイブル・アート・ジャパン　櫻井　育子様、伊藤　光栄様
報　告：櫻井　育子様

２）訪問日：2021 年 11 月 5 日
訪問者：文部科学省より 4 名
訪問内容：地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究事業
「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」近畿ブロックの発表とプログラムの見学

３）訪問日：2021 年 11 月 9 日、10 日
訪問者：相模女子大学副学部長、教員、職員、学生、就労青年、相模原市職員、コーディネイター、報道関係者
視察内容：地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進
インクルーシブ・プログラム開発事業におけるインクルーシブ・リサーチについて
報　告：副学部長をはじめとするみなさま

３）訪問日：2021 年 12 月 8 日
登壇者：神戸大学附属特別支援学校　柴田　真砂代教諭
報　告：柴田　真砂代教諭

４）訪問日：2021 年 12 月 10 日
訪問者：兵庫県西宮市「放課後等デイサービス　コゲラ」
榊　千佳子様、細見　彩子様
報　告：細見　彩子様

５）訪問日：2021 年 12 月 14 日、22 日
訪問者：天理大学　森口　弘美准教授、学生 3 名

報告：NPO 法人エイブル・アート・ジャパン　櫻井　育子様

神戸大学 KUPI 見学
1 日目
13:00 アゴラにて昼食
13:30 津田英二先生より概要説明
15:00 大学院授業参加
17:00 KUPI 見学（火曜プログラム：自己表現）
18:50 振り返り見学
20:00 メンター振り返り見学・参加

15:00 大学院の授業参加。AAK とアカデミアに関する情報提供と質疑応答。イメージを伝えきれず積極的な質問を引き出せなかったのは反省。

火曜日の授業は津田先生の障害共生支援論という授業であり、その授業を KUPI 生が一般学生とともに受ける。一般学生はペアになり、KUPI 生の意見を引き出したりまとめたりする役割を担っている。今年度の授業では、「自己表現」がテーマで、この日の授業は「表現したい自分を考え、何をどう表現するのかを考える」というもの。はじめにペアを作るワークでは「何も言わずに誕生日順に並ぶ」というのが思いのほか難しかった様子だったが、メンターの助けにより楽しみながら並んでいた。この日は重度重複障害のある H さんが母親とヘルパーと共に受講（火・金参加）していた。発語はないが表情から友達の言葉や人の動きを楽しんでいる様子が分かる。(初めて会うので私たちの様子も気にしていた)

一般学生とペアを組むと、やや緊張感もありはじめは静かな語り合いだった。やや表情がこわばっている KUPI 生もいる。また男子生徒と組むことにがっかりしあからさまな態度を示す KUPI 生もいたが、いつものことのようでメンターやコーディネーターがうまくフォローする。他にもなかなか授業のテーマに入りきれない KUPI 生と、少しずつ本題に触れるようさまざまな共通点を探りながらコミュニケーションをとり続ける一般学生。鍛えられるなと感じる。

自己表現とは何か。津田先生が自分で作成した動画を見せる。それを見て感じたことを話し合うのだが、「なんで顔を映していないのか」「結婚式ではサックスを吹いたのか」「娘さんとの写真でどあほって書いてあったのが衝撃的でした」などの感想から、先生が何を伝えたかったのかを探る。「いつもみんなに見せていない自分を表現したかった」という先生の意図を掴めたかどうかは分からないが、KUPI 生の言葉を丁寧に拾って発表していく一般学生とのやりとりもよい。本題の「自分は何を表現したいか」は「どんな自分をみんなに教えたい？」と置き換えていた学生が多かったように思う。自然に「わたしはこれができる」「これが好き」というテーマになったため、自己紹介のような内容ではあったが、表現したい＝伝えたい、ということが多く話せている印象。

18:50 からは一般学生は授業終了、コーディネーターの黒崎さんによるファシリテートで、KUPI とメンターが「振り返り」を行う。授業中には伝えられなかったことや、発表しきれなかったことなどを丁寧に聞いていく。メンター１名に対して３～４人のグループワークになると、先程の雰囲気とはまた異なり、積極的な参加になる方も多い。そこで、授業中には出てこなかったような自己開示も出てきた。どんな表現をしたいのか、一人ずつ言語化できているものの、これからどんな形になるのだろうという不安もある様子。

20:00、KUPI 生は解散。保護者送迎の学生は迎えを待ったり、遠方の保護者は控室で待ちながら情報交換。このつながりもいい。自力で来ている学生はバスで下山。その後、コーディネーター、メンター、津田先生と授業そのものの振り返りや今後の展開を話し合う。メンターから率直な意見が出てよりよい授業を共同で作っている感覚。メンターの役割の大きさを知る。また、コーディネーターの黒崎さんがすべての中間に入るので、すべてのコミュニケーションが円滑になっている。対立構造にならず、思い込みにならず、良いバランスがとれている。

２日目
15:30 津田先生と質疑応答
16:30 KUPI ホームルームと夕食見学
17:00KUPI 見学（水曜プログラム：稲原先生による哲学の授業）
18:50 振り返り見学
20:00 メンター振り返り見学・参加

15:30 津田研究室にて、昨日の授業についての質疑応答など
16:30 KUPI の HR と自力通学や働いている方（大学内の清掃業務）などは終了次第来てセンターでお弁当を食べる。その後、移動。
17:00 稲原先生の授業。稲原先生は脳性麻痺があり、河南先生がコーディネーターに入り、サポート。今回のテーマは「愛」。（１回目は「幸せ」）かなり難しい授業であり、スライドも文字量が多く聞きなれない言葉が多く、途中で寝てしまう学生も。メンターはところどころで一緒にプリント資料のどこを見ているか支援したり､解説したりしている。話し合ってみようというところでグループワーク。メンターと話し合いが始まると、本人の言葉を引き出しながらそのとおり受け止めて書き、可視化。この時間が丁寧なので、本人なりの理解度と表出で、ワークが成立している。具体的に考えることは重要。次には「ラブレターを書く」（対象に手紙を書く）ワーク。対象が決まっている人はどんどん書く。「書きたくない。分からない」という表現をした学生にはメンターが無理なくフォロー。発表タイムでは書いた手紙を読みたい人が読む。熱烈なラブレターあり、好きな歌手や野球選手やメンターへの想いもあり、盛り上がってくると、やはり影響されながらみんなが発表したくなってくる。このあたりが集団だからこそ可能。仲間がいるということの強みである。
18:50 振り返りでは、講義時間に発表できなかった学生が休み時間中に書いたり，仕上げたり。この時間の中で、気持ちが整理されていく様子もある。本音の時間なのかもしれない。書きたくないと言っていた学生は、この時間の中で発表。全員が発表できている。
20:00 メンター振り返り。１回目の授業改善ができたということだったので、やはり運営の振り返りを即時でできるのは重要。ここでもコーディネーターがいることの強み。全体を見ることができるからこそ、各教授の不安も解決しながら続けることができる。水曜のプログラムはどちらかというと先生方の授業作りのためにも役立つ。多様性、という分かりにくさを教えにくさを持って理解していくということか。ここでの学びはどう？と尋ねると、「みんないるから楽しい」「メンターと話せるのはうれしい」「大学で勉強できるのが楽しい」という答えが返ってきた。

［雑感］
大学で知的障害のある学生が学ぶ、というのはどういう意味があるのだろう、という素朴な疑問については、以下のような発見があった。そもそも「学問」というものが、正解を求めるようなものではないため、「自分はこう考える」という意見を聞きあう、という哲学的な問題追求の場であるということを考えると、知的障害のある学生が考えていることを聞き合い、相互承認の場そのものを作っていると言える。ただ、一方でそのベースとなる知識を得にくいという彼らの特性に対してはアプローチが難しいので、障害のある学生自ら、こうした授業の中で「ああなるほど」「そうだったのか」という体験を得ることは難しいのではないか、と考える。ただ、具体的な体験を保障し、知らなかった言葉のシャワーを浴び、難しいことを難しいと言える環境で、分からないが安心して言えるという場が保障されることがとても大事だなと感じた。たとえそのときに分からなくても、人間の無意識の中で「こんなことを知った」というものが熟成されたりすることもある。大事なのは､同じテーマで対等に考える場にいる､ということそのもの。そしてあなたはどう？と問われ、話を聞くという環境があるということそのもの、かもしれない。
学校教育でのインクルーシブとはいったいなんだろう、と考えてしまう。幼い時から分けられないで育っていたら、彼らは「大学で学びたい」ということをそもそも考えるだろうか。幼い時から分けられないで、同じ対話のベースが作られていたら、すでにもっと安

心感を持って通常の社会の中で生きることができ、もっと安心感を持ってあたりまえに友達が地域にいて、「だれかと話したい」という思いが発散されていたら？小学校や中学校であまりにもはっきりと「勉強ができない人たち」という分けられ方をしていることそのものに疑問を感じている。ここでの学びのように、「お互いに思いを聞く」「言ったことを否定されない」という体験こそ、新しい学びに向かうための原動力になるのかもしれない。

また、もうひとつは大学生という年齢だからこそ、可能なのかもしれない、ということ。一般学生側の発達レベルとして承認欲求から自己実現の時代である青年期だからこそ、この授業が可能ということなのかもしれない、とも思う。他者を受け入れられる時期だからこその、出会い。とにかくお互いにとって貴重な出会いであることが、メンターの生き生きした眼差しや、戸惑いながらも真剣に話し合う一般学生の様子から伝わってきた。「学び」とはなんだろう。それは「出会い」なのかもしれない、と感じた。

報告：副学部長をはじめとするみなさま

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム（KUPI）視察をふりかえって

相模女子大学では、相模原市発達障害支援センターとの連携・協働により、発達障害や知的障害の若者を対象としたインクルーシブな生涯学習プログラム（「インクルーシブ・プログラム」）の開発をテーマに、令和3年度文部科学省「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」を行っています。このプログラムは、インクルーシブ・セミナー、インクルーシブ・ゼミ、インクルーシブ・リサーチという３つの柱で構成されます。

インクルーシブ・リサーチでは、これまで調査の対象であった発達障害や知的障害のある若者が調査の主体となり、大学生、大学教員等と協働して調査研究を行う活動を行っています。活動の一環として2021年11月9日~10日、「発達障害や知的障害の若者が大学に求めるニーズの探求」をテーマに、神戸大学「学ぶ楽しみ発見プログラム（KUPI）」を視察しました。視察には、相模女子大学「多様な生涯学習のあり方と、本学における位置づけの検討サブWG」のメンバーも同行しました。視察をふりかえって、各メンバーが感じたこと、考えたことを以下に記します。

●この度は、2日間に渡り私どもの視察を受け入れてくださりありがとうございました。大学という社会資源をいかに障害のある方へと還元していくのかという問題意識に基づき、KUPIや大学の関係各所、コンソーシアム等が連携してプログラムを実施している現状をよく理解することができました。特に印象的だったことは、KUPIのコーディネーターの存在やKUPI学生の保護者の方がコンソーシアム構築事業のコーディネーターとして関わっていたことです。学内のみならず学外の人間を巻き込んでいる点、それぞれの強みを生かした人材の活用、就労機会の創出などが行われつつ事業が運営されていく仕組みに感銘を受けました。資金、マンパワーなどまだまだ沢山の課題はありますが、本学において継続可能な事業の実施を考える上で大きなヒントをいただいたと感じております。また、学生や勤労青年にとっては、KUPI授業への参加や交流を通して、他大学での取り組みの現状を肌で感じ、改めて自分たちの活動を客観的に捉え直し、活動の意義を考え直す機会となりました。津田先生はじめ神戸大学の皆様、KUPIのみなさまからいただいたご厚意にお応えできるよう、私たちも相模原の地で自らの実践を重ね、よい報告ができるよう精進してまいりたいと思います。

（狩野晴子;相模女子大学人間社会学部人間心理学科准教授／インクルーシブ・リサーチ）

●２日間の見学で様々なことを学ばせていただきましたが、KUPIの活動がKUPI学生、メンター、一般学生、コーディネーター、KUPI学生のヘルパーさん、先生方、そして地域（あーちの活動など）が何層にもなっていることが印象に残りました。KUPI学生の皆さんがいきいきと学ぶ様子に感銘を受けたのはもちろんですが、この活動が津田先生とKUPI学生とメンター学生だけで構成されているのではなく、様々な立場の人が、様々な形でかかわっていることが驚きでした（私は社会福祉を専門としておりますが、日ごろから福祉的な課題をより多くの方に関心を持っていただくためにはどうすればよいのかということを考えておりましたので、そうした問題意識をもって特に学ばせていただきました）。KUPIのような活動が大学や地域で根付くには、多くの人の共感が必要になると思います。理念で「必要である」「正しい」ということを伝え説得をしていくことも時には必要だと思いますがそれではもともと関心がある方より先に広がっていかないのではないかと思っていました。

一人一人のKUPIへのかかわり方にはもちろん濃淡があるかと思いますが、様々な関わりの濃淡を認めることや、ある程度時間をかけて行う意識も必要であるということを改めて学びました。深くかかわることを望む人、スポット的な関わりの人など様々かと思いますが、様々な関わるチャンネルを用意することで、より多くの人がかかわることができ、具体的な関わりの中からそれぞれが何かを感じ（感じ方の押し付けではなく）、それを共有することで共感が少しずつ得られていくのではないかと考えながら２日間学ばせていただきました。最後水曜日講義を受講できず残念でしたが、多くのことを学ばせていただくことができました。津田先生、KUPI学生・関係者の皆様にはお忙しい中、たくさんの時間を割いていただき本当にありがとうございました。

（松﨑吉之助;相模女子大学人間社会学部社会マネジメント学科准教授／インクルーシブ・リサーチ）

●１日目、神戸大学に初めて伺い、大学の入り口付近で学生さんたちが図書館で学習している様子を拝見し、「大学の授業ってどんなことをしているのだろう？」「きっと思っている以上に難しいのかな？」と思いました。最初のオリエンテーションや、大学院の授業は内容がわからなくて、メモを取るタイミングがわからず、戸惑ってしまったこともありましたが、「大学や大学院の授業はこんなことをするんだ。」という貴重な体験が出来て良かったです。

インクルーシブ・リサーチの発表は、とても緊張しましたが、一緒に発表する皆様のおかげで、思いのほかうまく話すことが出来たと思います。急な質問に答えるのは、まだあまり出来ないので、今後も課題として取り組んでいきたいです。今回の経験で、以前より少しずつ予想外の質問に答えられるようになってきたと思います。授業終了後は、KUPI学生さんと、メンター学生さんのふりかえりの様子を見させていただきました。KUPIのふりかえりでは、学生さんが自分の楽しかったこと、感じたこと、アピールしたいことを素直に話していたので、私もKUPI学生さんたちのように、心置きなく話せる練習をしていきたいと思いました。メンターのふりかえりでは、メンターさんが今日あったこと、感じたことをスラスラと話せていたので、円滑に話せる人が羨ましいと感じました。しかし一部のメンターの方が「KUPI生のこういうことが気になるから…」など自分の言いたいことばかり話していた場面があったので、KUPI学生さんの良いところなどの話しをしても良かったかな？と思います。

２日目は、津田先生に質問する内容が思い浮かばず、「事前にインタビューの内容をもっと考えておけば良かった！」と思いました。そこで大学からいただいた「水曜日の授業～よりよく生きるための科学と文化～」の日程表を読んだら、様々なテーマの授業があり、内容もインクルーシブ・セミナーに似ていると思ったので、「水曜の授業のテーマはどのように決まるのでしょうか？」と質問をすることが出来たので、ホッとしました。KUPI学生さんとの交流では、たくさんお話しすることが出来ました。中には手話の検定を持っている方もいらっしゃったので、私自身もとても勉強になりました。手話の４級を取得したいという気持ちを改めて思い、引き続き学習していきたいと思います。一人の方とLINE交換することが出来たので、今後もお互いの情報交換などをしていきたいです。

神戸大学を視察に行ってみて、自分自身が学習したことは、学生時代は、授業で行ったこと、聞いたことをすぐに吸収することが出来たのですが、社会人になってから仕事中心となり、学ぶ機会が減り、授業の内容を吸収する力が弱くなっている気がしました。やはり社会人になっても学ぶ機会、勉強することは必要だなと感じたので、今後もさがみ女子大学のプロジェクトに参加させていただければと思います。
（岩本健吾；民間企業会社員／インクルーシブ・リサーチ）

●神戸大学の取り組みで良かったと感じたことは、当事者（KUPI学生）と一般学生、メンター学生が関わる機会を週3日設けて積極的に関わる時間を作っていることです。また、授業、振り返りの時にはKUPI学生2～3人に対して一般学生やメンター学生が1人ついており、いつでも質問しやすい環境になっていることです。また、曜日ごとに異なるプログラムがあり、それぞれで積極的に関わる機会を増やす取り組みをしていました。それにより、お互いの相互理解をしようとしていることが伝わったからです。
視察をしてみて臨機応変に対応する場面が多く、とても大変でした。
・津田先生への質問時、聞きたいことはこういう意味かを尋ねられた時
・津田先生が説明の合間に「何か聞きたいことはありますか？」「これについてどう思いますか？」などを聞いてきたことです。津田先生への質問時に自分が伝えたい内容が正しく伝わらなかった時にすぐ説明し直すことができました。それでも正しく伝わらず、うまく丸め込まれたので少し心残りがありました。改めて人に説明する難しさというものを学ぶことができました。
相模は当事者と学生の関わる機会は神戸大学より少ないものの
・活動後、話しながら帰宅する
・今回の視察以外での自分達だけでの観光
・風呂上がりにみんなで部屋に集まってトランプ、観光の計画
など、横の関係が築けていると改めて思いました。自分達の活動に自信を持ってこれからも参加したいと思いました。
（今藤孝拓；民間企業会社員／インクルーシブ・リサーチ）

●神戸大学の取り組みでよかったところは､授業後のKUPI学生の振り返り時間に入っても、振り返りよりKUPI学生からの発表や感想･質問を優先していたところである｡その理由は、スケジュール通りに進めることより、一人のKUPI学生が持つ「発表したい」「発表の感想を聞きたい」という気持ちを優先しているところが、一人ひとりに配慮した授業の進め方だと思ったからである。
また､2日目にKUPI学生と一緒に話す時間のなかで､KUPI学生が自分の好きなものを細かく教えてくれたり、私の話に興味を持って話しかけてくれたことが嬉しかった。あるKUPI学生で、話す内容を聞き取ることが出来なかった時に「本人にすごく申し訳ないことをした」と思っていたが、実際はそこまで相手が傷ついた様子はみられず、紙やスマートフォンにその話した内容を書いてくれた。この経験から、神戸大学での授業としてはメンターや一般学生と「ともに」進める取組だが、私自身の意識のなかでは「ために」という考え方だったのではないかと思い、授業の進め方だけでなく、メンターや一般学生の障害に対する考えも重視されるものだと考えた。
（加藤乃絵流;相模女子大学人間社会学部人間心理学科3年生／インクルーシブ･リサーチ）

●良かったと感じた点は、KUPI学生とメンター・学生・教師・コーディネーターの関わる機会が多い点が挙げられる。週に3日会って活動しているため、お互いについての理解が深まっている場面に多く出会った。もちろん人数が多いことによって把握できていない部分も見受けられたが､メンター同士で支え合ったり､KUPI学生に直接聞いたり対策していた。また大学の講義の内容のようなものを一緒に学ぶことができる機会(水曜日のプログラム)

は良いと感じた。障害があるというだけで一般的な学びに参加できないことが現状多くある中で、一般の学生と共に大学の講義に参加できる環境が整備されていることが素晴らしいと感じた。

今回の神戸大学への視察は自分にとってかなり衝撃的で様々なことを学ぶことができたと感じている。特に重度知的障害の方のヘルパーさんからの「今回重度の子を見て関わってみてどう感じますか」という質問は印象的であり、その質問が思い浮かぶことに疑問を感じる。私は綺麗事でもなんでもなく、特に何も感じなかった。しかし、神戸大学の中の雰囲気としてその子を特別扱いして故意に仲間に入れてあげている感が否めなかった。例えば「金曜日の活動に参加してもらって他のみんなと交流してもらっているんですよ」などとおっしゃっていたことなどが挙げられる。全体としてその子の「ために」何かしているという感覚を感じた。また、誘導的な場面も多く障害のある方と「ともに」活動していると表では掲げているが、細かいところを見ると誘導的であったり無意識のうちに上からのサポート体制ができていたと感じる場面が多く見受けられた。様々な活動を実行していて相模女子大学でも実践してみたいと感じる事業はあったが、上からサポートするような関わり方や上下関係の存在に関しては何かを参考にするのではなく、相模女子大学として独自で考えていくべきであると感じた。

（下斗米若菜;相模女子大学人間社会学部人間心理学科3年生／インクルーシブ・リサーチ）

●神戸大学の取り組みで良かったところは、長い時間をかけてふりかえりがあるところや何でも話せる雰囲気。ふりかえりをすることによって相手が考えたことや自分の思っていることを整理できること感じたから。話題に関係ないことでも話し、よい雰囲気だったことが印象的だった。

津田英二先生の神戸大学やKUPIについての概要は話が難しいところもあり、理解するのに必死であった。大学院の授業では中国からの留学生や社会人学生の意見を聞き、大学とは何かについて考えた。おかれている状況が違うため違った角度からの意見が面白かった。世界でも大学でも多様性が進んでいることが話題に出たが、相模女子大学が女子学生のみを受け入れていることに疑問を感じ、様々な人を受け入れなければ多様性と言えないのではないかと感じた。KUPIの授業では相模女子大学について発表を行った。予想していたよりも大きな教室で人数が多かったため緊張したがみんな堂々と発表ができていたのではないかと思う。KUPI学生とはlineやインスタグラムを交換し仲を深めることができたのではないかと思う。神戸大学の取り組みを視察し、いいところ、工夫した方がいいところがわかったのでみんなと話し合い、今後の活動に活かしていたい。

（菅谷春佳；相模女子大学人間社会学部人間心理学科3年生／インクルーシブ・リサーチ）

●神戸大学の取り組みで良かったことは、KUPI学生の振り返りの時間がしっかり設けられていてその日のことを消化できる時間があることだ。理由としてはわからなかったことやもっとやりたかったことをほったらかしにしないようにできるので、その日に解決できると感じたからである。他にはサポートの体制が万全なところだ。理由としては親御さんが安心して活動に参加させられるのではないかと感じたのでそう感じた。

なかなか考えさせられることが多い二日間だった。まとめると“ともに”活動するということを考え直したいと思った。大学で何かを教えるとなるとどうしても上下関係が存在してしまうことはあると思うが、“障害者のために”行われているメンター同士の振り返りの方法が変わればいいなと感じた。大学院の授業に慣れていない中でいろいろな発言をしてしまったのであれで合っていたのか不安なところが多くあるが、貴重な経験となった。そしてこれからとしては対等な立場で学ぶことのできる大学について考えていきたいと感じた。

（千早佳音；相模女子大学人間社会学部人間心理学科3年生／インクルーシブ・リサーチ）

●津田先生、コーディネーターの先生方、神戸大学のみなさま、この度は視察を受け入れてくださりありがとうございました。2日間で大変多くのことを学ばせていただきました。あるメンターの学生さんが、メンターになった理由について「取り組みが、なんか面白そうだった」と率直におっしゃっていたことが、特に印象に残っています。KUPI学生さんはもちろんのこと、メンターさんやコーディネーターの先生方など、プログラムに関わる方々もそれぞれに「面白い取り組み」と話されていました。改めて、学びの場において多様性があることは、学生だけでなく多くの人にとっても大変魅力的なことなのだと、勇気をいただきました。私たちは今年度から本格的にプログラム開発を始め、悩むことも多くありますが、なんとか試行錯誤しながら運営しています。神戸大学のみなさまから、いただいた勇気をもとに、プログラムをすすめていき、多くの方に取り組みの魅力を知ってもらえるようにも活動していきたいと思います。
（小林太郎；相模原市発達障害支援センター主任／インクルーシブ・プログラム）

●このたびは本当にありがとうございました。視察して最も「感動」したことは、KUPI学生がごく自然に大学構内を歩き、講義の前後に他愛のない雑談を楽しむ姿でした。その姿は、どの大学でもみられる風景であり、特別感がまったくありませんでした。また、大学の校舎の一番眺めのよい場所に、アゴラという障害のある人たちが働く喫茶店があり、ここもまったく特別感がなく、教員や学生が日常的に利用している様子でした。本学でも、こうした「特別感のない、自然な共生」を目指したいと強く思いました。
最も「納得」したことは、2日目に津田先生およびKUPI学生の保護者2名との質疑応答の場で、保護者が語ったKUPI入学の理由です。「学校を卒業して、地域の作業所は居心地がよかったが、日常的にやりとりができる相手はいつも決まったメンバーであり、刺激が少なかったので」と聞き、障害のある人たちの学校教育修了後の課題について改めて考えさせられました。新しい出会いや刺激は私たちの人生を豊かにします。当たり前の経験を持てることも、大学という場でプログラムを行うことの意義である、とすとんと納得ができました。
　KUPIは津田先生のリーダーシップのもと、素晴らしいコーディネーターの先生方、メンター学生たちのチームで成り立っています。2日目の作文の授業の先生も素晴らしかったです。こうしたチームをつくり、育てていくことが、本学の今後の早急の課題と認識しました。
　最後に、一連の視察を通じて、自分たちの側にいる学生（サガジョ生）や知的障害のある勤労青年についても、新たな「発見」がありました。大学院の授業で臆することなく津田先生に質問する勤労青年、KUPI学生との交流会で相手の好きなことや興味を丁寧に聞き取り共感的に微笑んでいたサガジョ生たち・・・初対面の、自分と立場や属性の異なる相手に対して、堂々と渡り合っている姿に感動しました。そして、他流試合は人を成長させるものだと実感しました。貴重な機会をアレンジしてくださった津田先生、河南先生、黒崎さんに心から感謝いたします。
（日戸由刈;相模女子大学人間社会学部人間心理学科教授／インクルーシブ･プログラム）

●神戸大学の講義参加、交流会と丁寧な対応に感謝します。帰浜後、勤労青年とふり返りをしましたが、大学院や学部の講義、KUPI生向け講義参加や交流会、津田教授との質疑応答などでたくさんの刺激や学びがあったと申しておりました。また、相模女子大生と同じ学生の立場で過ごし、語り合えた経験も彼らの人生にかけがえのないものになったようです。特別支援学校を卒業後、就労は安定していても、どうしても自宅と職場の往復が生活の中心になりマンネリ感もあったり、本音では就職前にモラトリアムの時間の選択肢も欲しかったと感じている彼らにとって今回の経験はまたとない青春謳歌の機会となりました。
　障害のある青年たちの学ぶ場の必要性を改めて実感しました。わが国の高等教育のインクルージョンは障害の重い軽いや方法などに拘らず、それぞれの大学にあった実践を積み重ねる時だと思います。今後もお交わりをよろしくお願いいたします。
（川口信雄；(株)はまリハ顧問／インクルーシブ・プログラム連携協議会会長）

●コーディネーターさんやメンターの学生さん、皆さんの協力が合ってこそなせることと思いましたが、主役は私たちと言わんばかりのKUPIの皆さんが、とても楽しそうな顔をして、またとても生き生きとした姿を見せてくれたことに感激しました。ココには確かに“学び”があるのだと思い、嬉しくなりました。大変貴重な時間を過ごさせていただき本当に有難うございました。このような学びの機会が少しずつでも増えて行くよう、先ずは私たちの周りから、取り組んで行きたいと思いました。津田先生をはじめ皆様に感謝致します。有難うございました。
（奥村裕司；相模女子大学副学長／多様な生涯学習のあり方と、本学における位置づけの検討サブWGリーダー）

●限られた時間ではございましたが、今回、見学させていただいた授業を通して、KUPIの皆さんの前向きさはもちろんのこと、神戸大学の学生の皆さんの取り組み姿勢に心を打たれました。大げさではなく、日本のインクルーシブ教育が、今、こうやって変わろうとしているんだなと感じることができました。また、同時に、本学での取り組みについても、学内でもっと認知してもらいたいと思うようになりました。大変有意義な時間でした。ありがとうございました。
（齋藤淳志；相模女子大学大学事務部長）

●プログラムを参観させていただくなかで先ず印象に残ったのは、参加をしている受講生の生き生きとした表情でした。メンター学生との会話や積極的に発表（発言）をする姿からは、まさに主体的に取り組む受講生の学びの意欲の高さを感じましたし、メンター学生が、プログラムへの参加を通して自らの学びにもつなげている様子をみますと、関わる人たち皆が学ぶ「インクルーシブ・プログラム」に取り組むことの意義を改めて感じました。この度の訪問では、プログラムを参観させていただくだけでなく、取り組みの背景やプログラムの概要、また係る費用等、細かな点を先生方よりご教示いただきました。インクルーシブ・プログラムを大学として取り組むにあたっては、運営する大学（教員・職員・学生）の思いや、魅力あるプログラムが必要ではありますが、運営に携わる人材や運営に係る費用などに鑑みますと行政や地域との協働によって成り立つものなのだろうと感じております。本学にとっても自身にとっても有意義な訪問となりました。ありがとうございました。
（有田雅一；相模女子大学夢をかなえるセンター部長／多様な生涯学習のあり方と、本学における位置づけの検討サブ WG）

報告：柴田　真砂代教諭

『KUPI：神戸大学・楽しみ学ぶ発見プログラム』の報告

１．日時

２０２１年１２月８日(水)　神戸大学　１７：００～１８：３０

２．取り組み内容

ものづくり：フエルトでつくるミニマット
～「フエルトパンチャー」を使って～
※パンチャーでの模様づくりを楽しもう

※高等部家庭科『フエルト織りでつくるランチョンマット』の授業実践をもとに、パンチャーでフエルトにデザインを施す、ものづくりの活動に取り組んだ。

３．参加者等について

○KUPI メンバー　１１名(当日参加者)
○スタッフ
・津田校長
・コーディネーター　河南勝さん
・サブコーディネーター　黒崎幸子さん
・メンター(応援学生)　５名
○本校：柴田　佐藤副校長　殿垣校内教頭

４．当日までの準備

(１)シラバスの準備　**(資料①)**
(２)道具、材料の準備依頼
※発注窓口：津田校長
パンチャー(１０)マット(１２)替え針(５)フエルト多数。
(３)取り組み準備
サブコーディネーターの黒崎さんにより、事前に参加者に活動内容とデザイン案の用意について伝えてもらい、当日を迎えた。

５．当日の流れ

(１)自己紹介と活動の説明　**(パワーポイント　資料②)**
(２)作品の制作
①作品のデザイン案づくり　②フエルトの裁断　③パンチャーでの制作活動
(３)作品の交流

６．取り組みについて

「ものづくり」の活動は『KUPI』では初めての取り組であったが、参加者への事前の呼びかけや当日のメンター生等の補助体制もあり、大変充実した時間となった。

活動は、パワーポイントでの活動内容の説明後、それぞれがデザインを決めて取り組んだ。デザインの決定には、随分と時間を要したが、どの参加者も「自分らしいもの」を作りたいという思いで粘り強く考えていた様子が印象的であった。事前アナウンスがあったことで、デザイン案用にビッセル神戸のロゴ入りのリストバンドを用意している人もいたりしたが、大半が、スマホを駆使してアイデアを探したりメンター生と話をしたりしながら考え、自分ならではのデザイン決定に至っていた。どの人も、自分の好みや趣味など、様々な思いをくぐったこだわり感あるデザインを考え、ひとたびイメージをもつと、次の工程であるフエルトの裁断に気持ちを向けていた。

フエルトの裁断は紙とは異なるため、はさみ操作にやや手間取る様子もあったが、メンター生の援助も受けながら取り組んでいた。制作場面では、パンチャーをフエルトに刺す道具操作の分かり易さと針の突起がフエルトの繊維に引っかかる独特な手応えの楽しさがあり、一端活動がわかると夢中にパンチングを楽しみながら制作に臨んでいた。少しずつ自分のデザインが大判のフエルト画面に描き上がっていくことで、できあがりへの期待をもちながら活動ができたようだ。予定の９０分が瞬く間に過ぎ、終了時間が近づいたが、制作途中で終わりたくない､作品を最後まで作り上げたいという意見が参加者から出され、時間の延長をして、仕上げ切ることができ、よかった。

できあがった作品は、正にその人らしさあふれるものとなった。応援しているビッセル神戸のロゴを描いた作品、自分の職場である神戸大学のイメージキャラクター『うりこ』を描いた作品、USJ のカラフルなクリスマスツリーを自分らしく再現した作品、クリスマスの時期らしいトナカイを細部にこだわって仕上げた作品等､一つとして同じものはなく、一人ひとり思いの詰まったオリジナル作品を作り上げれた。活動の終わりの作品交流も大切な時間となり､自分の手がけた作品を大変誇らしげに披露する姿があちこちで見られた。今回使った道具を購入して自宅でも作ってみたいという参加者もいた。

KUPI の活動が、学びと共に新しい人との出会いの機会であり、仕事場や家庭とはまた違う新しい自分の居場所ともなっていることを、私自身が活動を共にして肌で感じることができた。初めての取り組みであったが、サブコーディネーターの黒崎さんが当日までに丁寧に連絡を取ってくださり、当日を迎えることができた。見通しを持った細やかな準備もありがたかった。

資料①　シラバス用原稿

１２月８日（水）のKUPIの活動について

ものづくり：フエルトでつくるミニマット
～「フエルトパンチャー」を使って～
※パンチャーでの模様づくりを楽しもう

8日は、“フエルトパンチャー”という道具を使って、フエルトのコースターやミニランチョンマットを作る手芸活動を楽しみます。

手芸といっても針と糸で縫う活動ではありません。“フエルトパンチャー”という道具をフエルトに刺していき(パンチングしていき)、フエルト同士をつなぎ合わせて模様を作り上げるものづくりです。針を布目に刺し込む感覚も楽しく、自分の好きなデザイン模様を作ることができます。

当日は、フエルトを切って自分のデザインパーツを用意してから、“フエルトパンチャー”でパンチングしてマットを作っていく予定です。コップやお皿を置いたりできる小ぶりのマットをイメージして、自分の作品のデザインを前もって考えておいてください。あまりデザインが細かすぎると難しいかもしれませんが、アップリケをイメージして考えておいてください。好きなキャラクターやロゴ、クリスマスシーズンなのでサンタやツリーなどの絵もいいですね。

皆さんと一緒に活動できることをとても楽しみにしています。

神戸大学附属特別支援学校　教諭　柴田真砂代

報告：細見　彩子様（放課後等デイサービスコゲラ）

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム（KUPI）見学の感想

・見学日　2021 年 12 月 10 日（金）
・プログラム内容　新喜劇の練習②

私は、放課後等デイサービスコゲラに心理士として立ち上げから関わらせてもらっています。普段は西宮市保健センターで発達相談を行ったり、今年度からは神戸市の小学校のスクールカウンセラーもしています。今回、神戸大学にコゲラの榊が見学に行かせてもらえることになったという話を聞き、赤木先生のされていることを実際に拝見したいという思いから便乗させてもらいました。貴重な機会をいただき本当にありがとうございました。以下に感想を述べさせていただきます。

私たちが訪問させていただいた日は、「新喜劇」の第二回目の練習ということであった。どんな感じなのかなと思っていたが、感想は一言、大変楽しかったということだ。
なぜそう思ったのか。そこにはいくつかのポイントがあった。まず一つ目は KUPI が参加者にとって非常に安心感を持てる場所だということだ。赤木先生含めスタッフの方も、メンターもメンバーも皆フラットで、パット見、誰がメンバーかメンターかスタッフかわからないほどだったし、この場ではどんな自分を出しても受け入れてもらえる安心感が漂っていた。授業の最初に赤木先生が「思ったように表現してもいい」「間違ってもいい」とそれを言語化して皆と確認してから始まったことも、より安心感を保障していたと思う。
皆が劇の中で思ったことを発言し、それをぐっちーさんがすべて笑いに変えることで、すべての発言がこの場の空気に受け入れられていくのを目の当たりにして、私はあることを思い出した。大学院生の時に授業で経験した心理劇だ。倉光先生の授業で行ったその心理劇の時の解放感は何十年たった今でも忘れられないし、それ以後同じような気持ちは味わったことがない。しかし、メンバーが二回目の劇の時は一回目より面白いことを言ったり工夫して発言しようとしている姿をみて、あの時と近い心の解放感を感じているのではないかと思った。

また、うまく劇そのものに入り込めないメンバー（記録？の方やアンドロイドの通行人の役）に、周りのスタッフがうまいこと声をかけて、その人に役割を与えていることにも感心した。人はその場に自分がいていいんだと思うためには、その場で役に立っているという実感が必要だと思う。劇には乗り切れないけど自分の存在を認めてほしい彼はウロウロしたりちょっかいをかけるしかなかったのだろう。そのウロウロそのものを役割（通行人）にして本人を受け入れるというスタッフのユニークさが素晴らしいと感じた。私も昔療育をしていた時に、あるアスペルガーと診断された青年と出会った。全身から敵意を放っていた彼に、ＳＳＴで不良の役をやらせた。たまたまそれがはまり、周りからも大絶賛。それをきっかけに少し周りのメンバーと会話ができるようになった彼を思い出した。ＳＳＴそのものに効果があったかはわからない。でも新喜劇をみて、やはり「劇」というものそのものの持つ力を改めて感じた。日常と違う自分の新たな「役割」を与えられ、その中で自分を解放でき、それを受け入れてもらえる。素晴らしいツールなのだと思い知った。

しかし、ただ劇をやればいいというわけではない難しさも同時に感じた。砂川さんやぐっちーさん、ゆうきさんの高い技術によって支えられているところが大きいのではないか。どんな発言が飛び出しても、どんなボールが飛んできてもすべて拾って笑いに変えて、劇を進めていく力。お笑いの方でもベテランの心理士でもそんな力は持っているような気がする。個人的なことだが私も現在小学校（六甲山小ではありません）でコミュニケーションスキルをつけるという名目で授業を行う機会がある。その時にも「自由に発言してもいいけど相手を傷つけるようなことは言ってはいけない」と約束をしてから始めるが、楽しくなって色々な発言の中にマイナスの発言が出たときにとっさに対応できず、そのまま進

んでしまい、子どもたちのペースにこちらが巻き込まれて、すべての子どもが「安心感」を持てる場を提供できなかったことを反省することが多い。そんな私にはぐっちーさん、ゆうきさんの対応が非常に勉強になった。

このような様々な要素によって、KUPI がメンバーそれぞれにとって大切な「居場所」になっていることを実感した。このような場は知的障害者だけでなく、すべての子ども、すべての人間にとって必要だとも感じた。KUPI のような場が色々なところに広がっていけばいいなあと思うし、まずはコゲラの活動で学んだことを生かして行きたいと思う。

７．コーディネイターの感想

KUPI　3年目の学び

コーディネイター　河南　勝

3年目の今年も、昨年同様にコロナ禍にありました。しかし、1月2月の一部がZOOMでの授業にはなりましたが、それ以外は幸いにも対面での授業が実施できたことにホッとしました。(もっとも、個人的には交通事故に遭遇し、最後の段階でご迷惑をかけてしまったことがとても残念ですが・・)

私の担当する水曜日プログラムは、今年度3人の新しい先生にお世話になりました。健康・スポーツの喜屋武先生には「ドッヂボール」、社会保障の井口先生には「憲法と社会保障」、神戸大学附属特別支援学校の柴田先生には「フェルトを使った生活小物づくり」の授業をしていただきました。身体を動かすスポーツの授業や、創作的な活動も時々取り入れるのも授業に変化が生じて良い効果をもたらしたように感じました。全体にいろいろな先生方の専門性を活かした水曜日プログラムの特徴が発揮できたように思います。とくに毎年授業をしていただいている先生方が KUPI 学生にわかりやすいようにという工夫を感じられる授業展開をされました。内容をしぼったわかりやすいものにし、グループ討議を授業の間に入れる、質問を引き出して答える形など進め方にも工夫が見られました。

メンター学生のサポート力のアップも今年度特に目を見張るものがありました。あるテーマでグループ討議をすると、その討議内容を視覚的にわかりやすく紙にまとめてKUPI学生が発表しやすくするなど、学びを支援してもらいました。また、一人一人の状況や気分に寄り添い、授業から離れた場合も付き添い、気持ちを聞く姿が見られました。

今年は兵庫県教育委員会が企画された「コンファレンス」での発表や、相模女子大学との交流の企画などもありましたが、そこでも KUPI 学生の積極的な発言や発信する姿には成長ぶりを感じました。それは、相模女子大学の方の「主役は私たちと言わんばかりにKUPIの皆さんがとても楽しそうな顔をして、また生き生きとした姿を見せてくれたことに感激しました。」という感想に象徴されていました。

水曜日プログラムだけではありませんが、KUPI学生の成長ぶりは年を重ねるごとに感じることができました。KUPI学生は基本、日中は働きながら夕方からの学びに参加しています。その日中働く場において、それぞれが課題を抱えています。そのこと自体が結構大きなことなのですが、それを乗り越えて（人によってはそんなことにおかまいなく)、休まずKUPIの学びに参加しています。それだけの魅力がKUPIの学びにはあると言えます。かれらは、どこに魅力を感じているかを考えた時に、同じ学ぶ仲間としての友だち関係ができることであり、同世代の神戸大学生との交流であり、もちろん大学での学びの楽しさ（あこがれも含めた）にあるのではと思います。その経験の中で、積極性がでてきて、自分の考えを発言する、発信する力になってきているように感じています。

次年度は、この委託事業の最終年度になります。大学における実践研究のまとめをして、どこの大学でもプログラムを準備することは可能であり、受け入れる条件を整えれば特別な教育課程として設置することが可能であること、何より知的障害青年の学ぶ意欲は強いということを実証したものです。そのことが、全国の大学に波及していくことを願って頑張りたいものです。

KUPI は多くの人に支えられています

サブコーディネイター　黒崎　幸子

修了式が無事終わった。修了生からの一言は感想にとどまらず、感謝の手紙やメンター学生に「卒業しないで！！」と懇願する叫びもあった。F くんは渡されたマイクをしっかり握って姿勢を正した。みんなに向かって声を出したのは偶然じゃないと感じた。修了式はハイブリッドで行ったが、画面の向こうにはメンター学生やボランティアさん、そして修了式前日に退院された河南先生の姿もあった。1 月下旬、河南先生が交通事故に遭われたことを KUPI 学生に伝えると、毎日のようにいつ退院するの？ケガはどんな感じ？ほんとに大丈夫なん？と KUPI 学生は聞いてくれた。O さんはどんな様子か教えてくれませんか？とても気になっています、と何度も連絡をくれた。みんなで心配をしたが順調に回復されていると聞いてホッとした。

KUPI のコーディネイターを担当して 3 年が終わったが、事務手続きについては教務学生係の笹野係長をはじめとする各ご担当のみなさんがサポートをしてくださった。総務係の浅野さんは KUPI 関係者の雇用業務を担当してくださり、本書を作成中は変更手続きが多くて大変お手数をかけた。KUPI は毎年 7 月から翌年 2 月までやってくる嵐かもしれないが、神戸大学の事務のみなさんが快く KUPI 運営の土台を作ってくださるおかげで、今年も安心して運営することができた。KUPI 学生の修了については出席管理表を提出して会議で決定されている。修了式前日に神戸大学長印が押された履修証明書を受け取った時は感動をした。神戸大学の事務局に感謝を伝えたい。

授業はスタートした当初からクラスは落ち着いていた。半数を占める再受講生が良い雰囲気を作ってくれた。しかし日々いろいろなことが起こった（想定内！）　友だちになりたいけど相手にしてくれない、授業態度を注意したけど聞いてくれない、音が気になるからなんとかしてほしい、希望する学生さんの隣で授業受けたい、などなど。KUPI 学生の様子を見守りながら配慮が必要な時はすぐに対応をした。友だちになりたいと話す N 君に「それは言い過ぎ、こだわり過ぎだよ！」と指摘することもあった。N 君はニヤリと笑ったが、根底には友だちになりたい気持ちが強い現れだとわかった。どうやって伝えたら良いか、逆に相手はどう思っているか考えよう、と休み時間も話した。そんな時に体育館で運動をすることがあった。二人は他のなかまも一緒にサッカーのパス回しをずーっとしていた。会話こそなかったが、その時間は N 君にとって一番の思い出になっただろう。

そういえば初めのころに F 君が授業中に声を出すと異常な反応を示したり、遠ざける KUPI 学生がいたことを思い出した。いつのまにか特に注目する空気はなく、逆に「F 君、ちょっと静かにして」とみんなと同じ対応になっていた。授業の前は一緒にご飯を食べてトイレを済ませ、授業に間に合うように車いすで教室に駆け込んだ。

今年もメンター学生さんの活躍により、KUPI は充実した内容になった。火曜日はメンター学生とボランティアさんの計６名がいろんな場所で自己表現の練習や撮影をしている教室を歩き回ってサポートを続けた。サポートだけでなく出演やカメラマン役をすることも多く、一人で何役も務めた。最後の編集作業に８時間以上かかった作品がいくつかあり、在宅勤務で仕上げてくれた。KUPI 学生が帰ったあとのふり返りでは、津田教授も交えて KUPI 学生 13 名の進捗状況を確認し、次週につなげた。計画、撮影、出演、編集を手際よくこなすメンター学生のチームワークは圧巻だった。

水曜日は担当教員の授業が 2 回（1 回）ごとに変わるため、内容によって KUPI 学生の関心が大きく変わった。おそらくサポートの仕方も変えていたと思われる。グループディスカッションはメンター学生 1 名と KUPI 学生 2～3 名が 1 グループになった。授業の合間に話し合うことで理解度や関心を確認して授業の補足説明も行った。KUPI 学生の席はほぼ固定されたため、メンター学生が毎回違う席に座って多くの KUPI 学生と関わりを持った。

金曜日は KUPI 学生のやりたいことを聞いてメンター学生が可能性を広げた。本書の 2.3）③で詳細を述べている。最後の活動は対話③で F 君について話し合った。終わったころに KUPI 学生が「自分のことをみんながどう思っているか話し合ってほしい」と言った。まだまだ時間が足りなかった。メンター学生と一緒にボランティアとして参加した張さんは、一期、二期の KUPI を受講した元 KUPI 学生だ。今回は水曜日と金曜日に参加をしてくれた。パソコンスキルの高い張さんは、授業内容だけでなく、みんなの発言内容も記録した。そしてメンター学生とコーディネイターのふり返りにも参加をして、そこでは発言内容の記録だけでなく元 KUPI 学生の立場から発言をした。それらの意見はとても参考になるものだった。授業の翌日には修正した記録をメンター学生とコーディネイターに共有してくれ、本書を作成する際にも大いに活用させてもらった。仕事帰りに来てくれてありがとう。

KUPI を支える人は他にもたくさんいる。一番近いところにいるご家族は体調を一番に心配し、仕事と KUPI が両立できるよう様々な配慮をされていたと想像する。秋～真冬に実施するプログラムのため他の季節に比べるとより一層慎重になったであろう。しかもコロナ禍だった。遠方から送迎する家族は待っている 3 時間もの間は待機室で読書や仕事をしていたと聞いた。その時間を利用してウォーキングをする人もあった（キャンパス周辺は歩きごたえがある！！）

全国に広がり、兵庫県でも多くの大学でこの取り組みが広がれば自宅に近い大学で受講することができる。高等学校卒業後の学びについて考えるのはみんな同じである。この取り組みが特別ではない日が来ることを願っている。

今年度も津田教授、赤木准教授、河南先生、メンター学生さん、ボランティアのみなさんに助けていただいてなんとか務めることができた。卒業されるメンター学生さんには私からも「卒業をしないで！」と叫びたいが、これからのご活躍を応援したい。先生方は失敗することがあってもそれは経験と考えてサポートをしてくださった。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

８．おわりに ―表現を通して、ひとはやさしく、かしこく、おもしろくなっていく―

赤木　和重

表現を通して、ひとはやさしく、かしこく、おもしろくなっていく―――私が、3 年目の KUPI にかかわって、感じたことである。もちろん、すべての授業を見たわけではない。あくまで、オムニバス授業の一部を担当した経験や、体験新喜劇のコーディネートをしたなかで見たこと、会議で津田先生はじめとする先生方の授業の様子や KUPI 学生の様子を間接的に聞いたことによる。そのうえでとなるが、「やさしさ」「かしこさ」「おもしろさ」それぞれについて、順に述べる。

表現を通して、ひとはやさしくなっていく

12 月における金曜の授業で、体験新喜劇に取り組んだときのことである。砂川一茂さんたち講師と共同で、喜劇のシナリオを即興的に作成していった。そのなかで、商店街の店の人になり、さびれた商店街の活性化を提案するというシーンがあった。KUPI 学生の一人が、本屋さんの定員になって、おすすめの本を紹介する企画を提案し、演じた。ご本人は、小説が好きで、その思いを表現する場となった。とてもいいなぁと思いながら見ていた。

そのときのことだ。誰かはわからないが、誰かの携帯電話がなりはじめたのだ。しかも、なかなかなりやまない。正直にいうと、私はイラついてしまった。当該の KUPI 学生の声はどちらかというと小さい。その学生がしっかり考えて発言しているいい雰囲気をぶち壊すような着信音だった。私だけではなく、その場にいる多くの人が、イラつきはしないまでも、困惑したことと思う。

しかし、その瞬間、講師の中川佑希さんが、「本の注文がもう入ったみたいですね～」と、その着信音に「のった」。爆笑がおきた。とても面白かった。同時に、その携帯電話の持ち主は救われただろうな、と思った（そして、イラついた自分を恥じた）。携帯電話の持ち主は、「しまった！場を壊した」と焦っただろう。そんなとき、周囲が「気にしなくてもいいよ」といっても、気にするものだ。それに、KUPI 学生も、少なくともいい気はしなかっただろう。しかし、中川さんの「本の注文がもう入った」という一言で、それぞれの表現（この際、着信音も表現に含めよう）のどれもが必然的な笑いのピースとして組み込まれていく。

このような「失敗」がゆるされる、むしろ、「失敗」をユーモアでくるんでいく雰囲気は、体験新喜劇だけではない。私が担当した「共同お悩み相談」でもそうだったし、津田先生の授業でもそうだ。ちなみに津田先生は、KUPI の入学式で、ジャケットを忘れて、急遽、代わりに私が開会のあいさつを述べることになった。津田先生と私はちょっとあたふたしたが、みんなも笑ってくれて、サイコーに面白いひとときだった。

このようなやさしい雰囲気は、さらなる表現を生成させていく。「失敗してもいい」「なんでもよい」という雰囲気が、他者の評価や基準という足かせを外すことにつながり、さらなる自由な表現につながっていく。表現を通して、KUPI 学生はもちろん、メンター、スタッフ、保護者、みなやさしくなっていったと思う。

表現を通して、ひとはかしこくなっていく

2 月の修了式のことである。今年はコロナ禍もあって、残念ながら、KUPI 学生、保護者、今年卒業するメンターの 3 人、KUPI スタッフだけの参加となった。対面で参加できないメンターさんには、ZOOM で参加いただくなどの配慮はしたが、来賓の方々や、多くのメンターにはその場で参加してもらえなかったのは、残念だった。残念だったが、じっくりとそれぞれの声を聴くことができた。

「メンターさん、卒業しないで！」など、魂の叫びともいえる KUPI 学生の思いと願いのつまった一言一言を聞きながら、修了式は穏やかに終わった。修了式のあと、それぞれの KUPI 学生がお世話になった友人やスタッフに、お礼の品や手紙を渡していく、名残り惜しい時間を過ごした。その後、KUPI に対する感想を書いてきた学生の文章をいくつか読ませてもらった。

どれも本当に素敵な文章だった。個人差はあるが、全体として、長文で自分の思いを綴られていた。ぱっとかける量ではない。時間をかけて書いたのだと思う。内容も深かった。KUPI への感謝もあれば、それぞれの授業に対する評価も、自分の言葉で考えて書かれていた。また、自分が KUPI に参加するときの葛藤や、これからの希望も書かれていた。夜中の 2 時すぎまでかかって、メッセージを書いて、印刷していたと言った KUPI 学生もいた。

一般の学生に比べれば、決して、書くことは簡単ではなかっただろう。それでも、これだけ熱量のある文章を綴れたのは、KUPI で継続的に参加したことが大きかったのだと思う。稲原先生の哲学の授業、川地先生の作文（綴り方）の授業、岡崎先生の音楽の授業など、自分の思いを書き言葉や音楽で表現することを、KUPI 学生は学んできた。さらには、単発の授業だけではなく、「綴り方サークル」までもが立ち上がっていた。このような学びの蓄積が、豊かな表現を生み出したのだろう。知識を一方的に詰め込まれるのではなく、表現を通して、人は、かしこくなっていくことを感じる。

表現を通して、ひとはおもしろくなっていく

津田先生の授業では、「自己表現」をテーマに授業が行われていた。私は、その詳細を知っているわけではないが、授業最後の発表会（オンライン）に参加することができた。衝撃を受けた。一般学生やメンター学生と共同しながら、自己表現の動画を作成し、その成果を発表するものであったのだが、とにかく表現がつきぬけているのである。ある KUPI 学生は、嵐の大野くんと実際に結婚式を行う動画を作成し、発表していた。教会風？の場所で、結婚式の衣装を用意し、かつ、男性は背の高いボランティアが務めていた。男性の顔にはもちろん嵐の大野くんの顔写真がはりつけられている。まさに結婚式であり、満面の笑みを浮かべている KUPI 学生の映像をみたときの衝撃は、まだ十分に言葉にはできない。ただ、素敵でありつつ、笑顔をうかべてしまった。。

他にも、体験新喜劇において、ある KUPI 学生が、自作の楽器をもって披露する場面があった。ただ、音が小さく、しみじみとした音色であり、観客一同、一瞬、リアクションに困ってしまった。しかし、そんなことはおかまいなしに独特の雰囲気で演奏を続ける。なんともいえない、じわじわとした笑いがその場に広がるひとときだった。今、思い出してもじわじわ来る。

もっとも、結婚式の自己表現も、演奏という自己表現も、他者から笑いをとろうと思ったわけではないだろう。自分がやりたいことを全力で表現したいという思いがあふれているのだろう。その意味では、「おもしろい」という表現は適切ではないかもしれない。ただ、KUPI 学生の表現が、既存の常識を打ち破るという斬新な表現でのおもしろさを感じる。同時に、私にとっては、他者の評価や常識を気にせず、ここまで突き抜けられるのは、うらやましいという意味でのおもしろさでもあった。KUPI での表現活動を行うことで、おもしろさを獲得していくのかなと思う。それは言い換えれば、常識から自由になっていくプロセスでもある。

おわりに

ホルツマンという発達研究者は、学習や発達における即興的なパフォーマンスの役割を重視する（ホルツマン, 2009/2014）。具体的には、予測できない状況に対処することこそが、「今ある自分ではない誰か」をパフォーマンスし、新しい自分になっていくと指摘している。KUPI 学生の表現活動にひきつければ、どのような表現でも真摯に、かつ、おもしろがって受け止めてくれる他者との共同活動を通して、潜在的に有していたやさしさ、かしこさ、おもしろさを社会的に達成していくプロセスとしてみることができるだろう。

最後になりましたが、KUPI の活動は、本当に多くの人たちの支えで成り立っています。KUPI 学生はもちろんのこと、メンター学生、ボランティア、一般の受講生、人間発達環境学研究科の教員・事務職員、さらには、神戸大学総務部業務支援室、文部科学省障害者学習支援推進室、兵庫県教育委員会、神戸大学附属特別支援学校の方々、様々にご協力いただき，本当にありがとうございました。みなさまのおかげで、KUPI の活動は、障害のある人の生涯学習を推進するともに、学ぶことの意味について鋭い問題提起を行う場となっています。感謝申し上げます。

文献

Holzman, L. (2009). Vygotsky work and play: Rourtlege. （茂呂雄二（訳）（2014）遊ぶヴィゴツキー：生成の心理学へ　新曜社）

津田英二（2021）知的障害青年のための大学教育の創造　文部科学教育通信，522，22-23.

連載　知的障害者の学びを支援する高等教育機関の挑戦　第5回

知的障害青年のための大学教育の創造

―神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム―

神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授　津田　英二

はじめに

神戸大学「学ぶ楽しみ発見プログラム」は、学校教育法一〇五条に規定された「特別の課程」（履修証明制度）によって運営する取り組みである。私たちはこのプログラムをKUPIと呼んでいる。Kobe University Program for Inclusionを意味する。

選抜を経て入学した知的障害のある青年たち一〇名ほどが、秋学期の半年間、神戸大学の授業を受ける。彼らの多くは、それぞれの職場や社会福祉事業所などで働いた後、夕方になって三々五々集まってきて、まずは歓談しながらお弁当を広げた後、一七時から始まる授業を受けるためにそそくさと教室に向かう。そして二〇時近くまで授業を受け、六甲おろしが吹く中を帰って行く。こうした生活リズムが週三日、半年間続く。楽な条件ではないが、青年たちはほとんど休むことなく、最後まで楽しそうに生き生きと学ぶ。

彼らは半年間でいろいろな初体験をする。大学の授業を受けて興味を広げることはもちろん、神戸大学の一般学生と人生を語り合うことも、夜景を見ながら友達と家路につくことも新鮮な経験となる。〝難しいけど楽しい〟という彼らの声は何度も聞いた。彼らに関わった教員や一般学生は、そんな彼らの学ぶ姿勢に驚き、刺激を受ける。

プロジェクトに至る経緯

(1)国際的動向・国内の動向からの刺激

国立大学で知的障害者を対象とした教育プログラムのパイロットプロジェクトを走らせる。日本では大胆なプロジェクトと目されるだろうが、国際的にはさほど珍しいことではない。神戸大学と一〇年以上交流を続けている韓国ナザレ大学には、知的・発達障害学生だけを対象とした学部がある。アメリカでは、法律（Higher Education Opportunity Act）に基づき、多くの大学が知的障害学生に対する教育プログラムの提供を積極的に行っている。その他の国々にも注目すべき取り組みがあり、中にはロンドン大学、シドニー大学、シラキューズ大学、カリフォルニア大学など、世界的に有名な大学のものも含まれる。KUPIもこうした国際的動向に刺激を受け、日本型の取り組みを模索しながら構想された。

国内に目を移すと、公開講座として実践されている知的障害者を対象とするオープンカレッジが、いくつかの大学で開かれている。KUPIは、東京学芸大学が実施しているオープンカレッジ東京などからも大きな刺激を受けて始まった。

(2)インクルーシブなキャンパスに向けた取り組み

神戸大学では、知的障害者に関わるいくつかの先駆的な取り組みを行ってきている。

障害者雇用の分野では、知的障害者を環境整備員として雇用し、キャンパス清掃業務を担わせている。また、キャンパス内のカフェの従業員として知的障害者を複数人雇用している。いずれも先駆的な形態として注目された。知的障害者がキャンパスの中で役割を担い、学生や教職員と日常的に接触する状況がつくられている。

障害学生支援の取り組みも、二〇一五年に設置されたキャンパスライフ支援センターを中心にシステムがつくられ、成果を挙げてき

ている。また、神戸大学は、五〇年以上の伝統をもつ附属特別支援学校を併設していることや、「子育て支援を契機とした共に生きるまちづくり」を標榜する附属の社会教育施設である「のびやかスペースあーち」を運営していることも、インクルーシブなキャンパスづくりに向けた取り組みの強みになっている。

こうした背景のもとで、KUPIの実践が始まった。

プログラムの概要

(1)授業の概要

KUPIの授業は週三日ある。それぞれ授業と授業ふりかえりの時間によって構成される。授業の内容を学生たちがゆっくり時間をかけて咀嚼するために、ゆとりをもった時間を設定している。

火曜日は、神戸大学の一般学生向けの授業にKUPI学生も参加し、相互に学び合う状況をつくりだしている。授業名は「社会教育課題研究」という。ライフストーリーを語り合ったり、ニュースポーツを体験したり、海外の知的障害者グループとオンライン交流をしたりなど、年ごとに一貫したテーマをもって取り組んでいる。

水曜日は、KUPIのオリジナル授業である。授業名は「よりよく生きるための科学と文化」という。心理学、教育学、哲学、音楽学、宇宙物理学、動物学などを専門とする神戸大学教員が、それぞれの領域の初歩の講義をする。

金曜日は、話し合い学習を柱とした主体的な学びの授業である。授業名は「話し合う！やってみる！」という。表現活動や自由研究やフィールドワークに取り組む。

(2)プログラムを支える人たち

こうした授業を支えているのは、二名のコーディネーターと一〇名を超すメンター学生たちである。

コーディネーターは、水曜日の授業をコーディネートし、授業の組み立てや配慮の相談に応じる。また、メンター学生をとりまとめて金曜日の授業の運営をする。KUPI学生やその家族の相談に応じ、学習環境を整えるための業務も行う。いわばプログラム運営の柱といえる。

メンター学生は、それぞれの授業に入り込んでKUPI学生の理解を助け、学びを深める役割を担い、さらに金曜日の授業を組み立てる。プログラムが進むにしたがってKUPI学生と友達のような関係を築き、一緒に遊びに行く計画を立てたり、時には各種の相談に乗ったりすることもある。

大学の事務や各教科の教員も重要な役割を果たしている。彼らが「余分な業務」とは思わず、意義のある取り組みとしておもしろがって役割を担っていることが、プログラム遂行上の大きな力となっている。

おわりに

KUPIは、文部科学省からの受託研究として始まったプログラムである。受託期間中に、プログラムを実施することによって得られる利益やプログラム遂行を阻害する要因などについての知見を得ること、それによってこうした取り組みを全国に広げていくことを目標としている。

ここまで、知的障害学生の成長という点での成果以外にも、一般学生の学びへの好影響、教員の教育上のモチベーションやスキルへの好影響など、プログラム実施によるメリットの手応えは多く得ている。それらについては、毎年報告書を刊行しているので参照してほしい。報告書は、神戸大学学ぶ楽しみ発見プログラムホームページからダウンロードできる。

他方、こうした取り組みを各地に広げていくという点では、まだ十分な成果を挙げているとは言えない。先日、知的障害者の教育プログラム開発に取り組んでいる相模女子大学から教職員や学生の訪問を受け、交流を行った。それぞれの大学で、特徴を生かした取り組みが生まれていくことに貢献することができれば幸甚である。また、そのためにも、受託研究の次の形として、大学のプログラム運営を支える新しい制度が構築されることを期待している。

川地亜弥子（2021）研究し交流する場としてのキャンパス　応用心理学のクロスロード，13，30©応用心理学会

研究し交流する場としてのキャンパス

川地　亜弥子

神戸大学大学院人間発達環境学研究科は、六甲山に点在する神戸大学キャンパスの中でも最も標高が高く、眼下に大阪湾が広がります。多様な教育・研究が展開されていますが、今回は、特に障害がある人と＜交流する＞＜学ぶ＞＜働く・運営する＞取り組みを紹介します。

＜交流する――エコールKOBEと＞

福祉事業型専攻科エコールKOBE（18歳以上の青年が２年間通う学びの場）の学生が毎年神戸大学にやってきて、講義に参加して研究成果を発表したり、修学旅行の話を聞かせてくれたり（エコールの学生たちはハワイに修学旅行に行ったりするので、神戸大学の学生から「いいなー！」の声が上がったりします）、サッカーで真剣勝負をしたり、食堂で一緒にご飯を食べたりしています。えこーる新喜劇（プロの演出家・砂川一茂さんが一緒に来てくださったこともあります）を披露してくれたときには、神戸大学の学生も飛び入りで参加したりして、大いに楽しみました。

年に１～２回の取り組みです。2020年度はCOVID-19の影響でまだ実現できておらず、残念です。毎年、同年代の青年同士で様々な刺激を受け合ってきましたので、2021年度にはぜひ再開したいです。

＜共に学ぶ――Kobe University Program for Inclusion: KUPI＞

障害がある人たちの生涯学習の権利を保障しようと、知的障害がある人たちへの学びのプログラムを2019年度に始めました。文部科学省の委託を受けて進めています。プログラムのウェブサイトには、「大学の資源を無理なく効果的に活用することで、言語によるコミュニケーションが可能な知的障害のある青年が、学ぶことの楽しさを感じ、自己理解や他者理解、人格を陶冶するプログラムモデルの開発」とあります。

仕事が終わってから参加できる時間帯で、神戸大学の学生と一緒に学びます。学生同士で日帰り旅行に行ったりするなど授業以外でも親交を深めているようです。最後の修了式（研究科長から修了証が手交される立派な式です）では、お互いの学びをたたえ合い、別れを惜しんでいます。

私も授業の講師として関わらせて頂いていますが、こちらが学ぶことが多く、まさに互恵的な学びの場になっています。

＜働く・運営する――カフェ・アゴラ＞

大阪湾と神戸の街並みを一望できる６階にあり、障害のある人たちがスタッフや実習生として働いています。実習生の職業訓練の場であり、対人支援に関心をもつ学生の実践の場でもあります。カフェの運営は、教職員、学生、スタッフ、実習生で議論しながら行っています。

コーヒー・紅茶だけでなく、おでんやカレーなどしっかりした食事もあり、白いご飯か玄米入りご飯かを選べたりもして、学生や教員だけでなく、ときには一般の人も来られて、交流したり、お茶を楽しんだりしています。ギターやキーボードも置いてあり、気の赴くままに演奏する人もいます。現在は附属特別支援学校の子どもたち、青年たちの作品が展示されており、アートの刺激にあふれる場になっています。

もし、本研究科にお出でになることがありましたら、ぜひお立ち寄りください。

参考文献：

岡本正、河南勝、渡部昭男編著（2013）『福祉事業型「専攻科」エコールKOBEの挑戦』クリエイツかもがわ。
KUPIについて　http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html
カフェ・アゴラについて　www2.kobe-u.ac.jp/~zda/agora/agora-index.html (kobe-u.ac.jp)

川地　亜弥子（かわじ・あやこ）／福井県生まれ。自己表現としての作文教育の研究を行っている。神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 准教授。共著に『戦後日本教育方法論史』（ミネルヴァ書房）、『グローバル化時代の教育評価改革』（日本標準）。

川地亜弥子（2022）ねがいひろがる教育実践（第 11 回）青年期を謳歌する　みんなのねがい，673，30-33.

ねがいひろがる教育実践

神戸大学
川地亜弥子

かわじ　あやこ／研究テーマはわかる・楽しい・感動のある授業づくり、安心できる集団づくりについて。編著に『実践、楽しんでますか？―発達保障からみた障害児者のライフステージ』（クリエイツかもがわ）など。

第11回　青年期を謳歌する

もっと学びたい

神戸大学では、学ぶ楽しみ発見プログラム（通称　KUPI（クピ））という、障害がある青年（高校か特別支援学校高等部を卒業した人）に向けた学びのプログラムがあります。10月～2月（「後期」といって、大学の半年分の授業と同じ期間です）、週に3回、仕事が終わるくらいの時間から集まって学びます。

今年度で始まって3年目。毎年参加者を募集するのですが、3年連続で来ているKUPI学生さんもいれば、3年連続参加のメンターさん（授業のサポートをしてくれる大学生）もいて、なかなか人気のあるプログラムです。

私もそこで年に2回授業をさせてもらっています。私の授業では作文教育の歴史や理論を話した後、KUPIの学生さんたちに作文を書いてもらい、みんなで読みあいます。文字の読み書きの得意不得意はあり、ほんの一言の人もいますが、全員が書けます。自分の好きなこと、家族のことなど、時には好きな人のことも。今年は愛の告白の作文もありました！　読みあいの時に相手の人からさ

らっと流されてしまいましたが、読めた本人は満足そうでした。

今回の授業では、特に3年連続で参加しているKUPI学生さんの大きな変化がありました。たろうさんは、1年目、なかなか書けず、メンターさんがつきっきりで相談に乗ってくれて、題とイラストで表現してくれました。2年目は自分から2つの作文（イラスト付き）を書きました。3年目、私が「KUPIの思い出を書きましょう。それ以外の題がいい人は、自分の好きな題で書いてください」と言うと、じっと考え、急に立ち上がって外に出て空を見つめ…。なかなか書き出しません。部屋に戻ってきて、メンターさんと話をし、メンターさんから「この3年間に使ってきた教室をまわりたいそうです」と相談がありました。授業の時間は気になりつつ、でも、それはすごい！　と思い、「いいですよ！」。ちょっと心配になるくらいの時間に戻ってきて、一気に書き上げました。

ゆきなさんは、最初の年、作文を書いたけれど、みんなには読まれたくないと言っていました。でも、2年目には、みんながどんどん読んで盛り上がっているのを見ていて、メンターさんにも後押しされ、みんなの前で読み、3年目の今年は、最初から「ぜひ読んでほしい」の印をつけていて、読みあいました。授業が終わって私がいなくなった後、「これからも書きたい」ということになったそうで、メンターさんたちとも相談して作文を書くサークルをつくったのです。LINEで私に「顧問になってください」という依頼があって、二つ返事で引き受けました！　サークル名もいろいろ出ましたが、「神戸大学つづり方サークル（通称　書きサー）」に決定。ゆるやか～に活動を続けています。

このKUPIプログラム、新型コロナの前にはみんなでお出かけしたりもして、単に大学の授業を受けるだけではない、青年期らしい生活を謳歌する場になっています。コロナが広がってからはお出かけはむずかしいのですが、休み時間も大いに盛り上がっています。

学びの場に挑戦・冒険を

KUPIは5ヵ月だけですが、神戸には、高等部卒業後に2年間継続して学ぶことができる福祉事業型「専攻科」エコールKOBE（こうべ）があります。知的な障害がある人は、高校や高等部を卒業した後、「就職」か「福祉的就労」しかないという現実に強い問題意識をもち、他の青年なら当たり前に選ぶことができる「学びの場」へ、という「第3の選択肢」を求めて、WAPコーポレーション（障害者の社会的自立を応援するために設立された会社）の社長、岡本正さんによって開設された、青年期の学びの場です。

エコールは、「学生」「先生」などの呼称を使い、ゆるやかな学年別プログラムを採用しています。ここでは、開設から3年間の、学園づくりのワクワクとドキドキに満ちあふれた期間に注目します。社長の岡本正さんをはじめ、学園長（当時）の河南勝さん（元養護学校教諭）、元気な先生たちが、学生の学びをしっかり支えています。

学びの場、と言っても文字の読み書きや技能の訓練だけをするのではなく、青年期ならではの学びを保障することを重視しています。そのための実践の柱が、①ゆたかな体験、②主体的に学ぶ、③仲間とともに、の3つです。

エコールは開設当初から、放送作家の砂川一茂さんと挑戦する新喜劇、キャンプでのツリーイング（ロープを使った木

登り）など、さまざまな「冒険」「挑戦」を欠かせないものとして位置づけてきました。開設当初からの目標だった、海外への卒業旅行も実現するなど、青年期らしいチャレンジの場をたくさん用意し、学生はそれを謳歌しています。

悩んで迷って自分で決める

やるかやらないか、どのくらいやるかは学生が自分で決め、無理に活動に入らせたりはしません。学生が自分で決めてやることを大事にしています。たとえば、ツリーイングでは、足を浮かすことが目標の人も、一番高い木に登ることが目標の人もいます。車いすでもツリーイングできますし、やらないで別のプログラムを選択するという人もいます。

ただ「選べる」というだけでなく、やるかやらないかを迷える時間をできるだけたっぷりとれるようにしていることは、大きな特徴だと思います。いくら「自分で決められる」と言っていても、悩み迷える時間が短いと、やろうと決めた時には間に合わない、ということになりかねません。

1年目のキャンプでツリーイングに入らなかった結花さん。1年目のチャレンジプログラムはツリーイングしかなく、みんながツリーイングをしている森の入り口で結花さんは待っていました。先生は彼女の心情を想像しながらも、そのままキャンプは終わってしまいました。

結花さんは2年目のキャンプで、「ツリーイング」と「登山」の2つのチャレンジプログラムから「登山」を選びました。事前学習・準備も登山で進めてきたのですが、キャンプの初日が無事すんで、明日の登山の準備もできて後は寝るだけ、という夜に、彼女はもの言いたげに女性の先生に近づいてきます。

「どうしたの?」と先生がきくと「明日…行けそうもない…」。そこで先生が「そう…」と受け止めた後しばらくして、「じゃあ、どうする?」と尋ねると、「どうしたらいいか、わからへんねん」。ここを先生は「本人が、いまの自分の『気持ち』を言葉にした瞬間でした」ととらえています。しばらくしてから先生がききました。「登山じゃなくて、ツリーイングする?」「…する」。

翌日、班で説明をきく時には少し離れたところにいたのですが、実際にする時には、ゆっくり、ゆっくり、ツリーイン

写真協力／神戸大学附属特別支援学校

エコール創設期の実践については『福祉事業型「専攻科」エコールKOBEの挑戦』をぜひ。設立に至るまでのドラマもわかります。エコールの新喜劇に関心のある人は『ユーモア的即興から生まれる表現の創発 発達障害・新喜劇・ノリツッコミ』もおすすめ！

グをしました。彼女にとって、1年越しの挑戦だったと思います。

このように、時間をかけて悩み、迷い、やってみようと思うことは、今の学校ではどのくらい大事にされているでしょうか。早く決めないといけない忙しいスケジュール。一度決めてから変えることへの否定的なまなざし…。「やっぱりやってみたい」という挑戦に向けた第一歩をしっかりサポートできる体制と、こういう場合にどう判断するかということについての指導する側の方針や柔軟な話し合いが大事になります。

みんなで納得して原則から決める

エコールには学生自治会があります。この自治会は、原則から学生で決めることを大事にしています。エコールに来るまでの学校でも自由が尊重されていたとしても、多くの場合は学校のカリキュラムの枠の中のものです。エコールの学生は全員青年ですので、もっと広く、野外活動の行き先、土曜登校の内容、学園のルールも話し合って決めます。

自治会のメンバーは選挙で選出されます。どんな役職が必要か、何人必要か、学生が決めます。選挙管理委員は必要だ、応援演説はしてよいか、副会長は2人いた方がいいのでは…など話し合い、選挙は厳正に行います。一方で、落選者が出そうな時には、選挙管理委員会で「せっかく立候補してくれたのだから」と相談して、落選者がよければという役を新しくつくり、その役で自治会役員に入ってもらおうという提案をまとめました。学生全員に意見として投げかけると了承され、結果として10名全員が当選しました。もちろん年によっても違い、「そんなに役員はいらないよね」という年もあり、立候補も少なくて役員が5人ということもありました。みんなで決めて、実際にやって、変えたいとなれば案にまとめ、学生全員に提案し話し合い…と、みんなの納得のなかで進めています。

これは1学年15名という小定員だからこそできることなのかもしれません。あまりにも規模が大きくなると全員で決めることがむずかしくなります。特別支援学校ではその規模の大きさが問題になっていますが、「人数に対して校舎が狭い」という問題だけでなく、そこで学ぶ人たちが「ここは私たちの学びの場なのだ」と感じられ、自治の場（学校とは自治を学ぶ場でもあります）となり得るかという観点からも重要です。

学生の試行錯誤を大事にすることが冒険もゆたかにする

この前提となっているのが、学園が一方的に青年を学びの場から排除しないという原則だと思います。レストランで大きなトラブル（友だちとのけんか）を起こしてしまった学生がいた時に、先生は「人それぞれに個性があり、苦手なところや弱いところがあるけど、それを受け入れていくのがエコール」と学生たちに語りかけ、退学させることは簡単なことだけれどそれでいいのか？　と問いかけました。ある学生から返事があり、全員が納得したわけではないけれど、もう一度受け入れていくことになりました。

学園が学生の試行錯誤や失敗を大事なものと位置づけているからこそ、自治会も枠組みから考えることができているのではないでしょうか。学生を排除しないという原則が試行錯誤や失敗を受け入れて、次へと生かすことにつながっています。それは学生の冒険や挑戦を大きく支え、さらに先生たちの「やってみよう！」という挑戦につながっています。

河南　勝（2021）知的障害青年が大学で本格的に学ぶ新しい試み
神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム（KUPI）　はあとブリッジ，420，2

（毎月１回）　２０２１年１０月２９日発行　第４２０号　兵庫支部ニュース１１月号

知的障害青年が大学で本格的に学ぶ新しい試み

～ 神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム（KUPI）～

河南 勝（コーディネーター）

神戸大学で知的障害のある青年たちの学び、KUPI（ Kobe University Program for Inclusion）の授業が 10 月から始まりました。2 月までの後期、火曜日、水曜日、金曜日の週 3 日夕方からの授業に 13 人が参加しています。今年 3 年目を迎えたこの取り組みの概要、意義や授業内容の一部を紹介します。

●学ぶ意欲に感心！

夕方、4 時半ぐらいからぼちぼちと青年たちが山の上の国際人間学部の校舎にやってきます。授業前に食事をすまして 5 時からの授業に入ります。メンター（KUPI 生をサポートしてくれる神戸大学生）と、「やー、元気？」と声を掛け合い、雑談している間に授業はスタートです。

昼間は働いている人、作業所に通っている人、それぞれに疲れているはずなのに、夜の学びにくるエネルギーには感心します。2 年 3 年と続けて参加の学生も多く、知的障害があっても学ぶ意欲はいっぱいあることを証明してくれています。

●多様なプログラムで楽しい学び

KUPI のプログラムを紹介しましょう。火曜日は、正規の授業「社会教育課題研究」（共生教育論）という授業で、一般学生と共に学ぶ共生教育の実践の場でもあります。昨年はライフストーリーや、イギリスの障害青年とのオンライン交流にも取り組みました。今年は、「新しい自己表現」ということで、一般学生と協働で自分なりの表現をする授業です。

水曜日は、「よりよく生きるための科学と文化」をテーマに、オムニバス形式でいろんな先生方がその専門性を活かしてわかりやすく個性豊かに授業を展開されます。私はこの水曜日の授業のコーディネーターとしてかかわっています。今年は、発達心理、哲学、教育、スポーツ、宇宙物理学、音楽療法学、経済学の 7 人の先生方に授業を担当していただきます。トップバッターの赤木先生の授業の様子は、次のページで赤木先生から紹介していただきます。

金曜日は、「話し合う！やってみる！」がテーマで、KUPI 生が話し合い、やりたいことや研究したいことなどを出し合い、メンターさんと一緒に考えて取り組んでいきます。昨年は、「体育館でスポーツしたい」「自分のテーマで研究したい」「クリスマス会がしたい」などのねがいを実現してきました。

また、外部講師として、プロのカメラマン豆塚さんに来てもらっての写真教室や放送作家砂川さんの協力で体験新喜劇にも挑戦しました。どの授業も、90 分の授業ですが、その後にはメンターさんの協力も得てていねいに振り返りをしてまとめをしていきます。

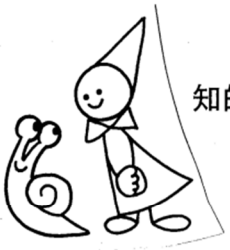
●大学での学びに道を開く新しい試み

障害者の学校卒業後の学びについて、文科省は「生涯学習」の推進をしています。委託事業を全国で進め、地域ごとの「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」を開催するなどに力を入れています。神戸大学の取り組みは知的障害者の大学での学びの実践プログラムづくりになります。また、大学当局の協力で、「特別な課程」履修証明制度という制度によって学び、履修できた人には修了書が渡されます。

知的障害者の学校卒業後の進学という選択肢がほとんどなく、進学率は学校型専攻科などの 0.4%程度です。大学での学びとなると、発達障害学生の増加がいわれていますが、知的障害者は皆無といえます。世界では、各国とも学びの形態は様々ですが、だいたい5%程度が大学で学んでいます。神戸大学の取り組みが全国の大学で実践され、知的障害者が当たり前に大学で学べる日がくるといいですね。

赤木和重（2021）知的障害のある青年に対する大学での授業実践報告
「共同お悩み相談」の授業を通して　はあとブリッジ，420，3

（毎月１回）　２０２１年10月２９日発行　第４２０号　兵庫支部ニュース１１月号



知的障害のある青年に対する大学での授業実践報告

―「共同お悩み相談」の授業を通して―

赤木和重（神戸大）

河南先生が紹介されたKUPIというプログラムのなかで，私は知的障害のある青年を対象に授業をしています。試行錯誤の連続ですが，青年たちの意欲に助けられて楽しく授業ができています。ここでは，その様子を簡単になりますが，紹介します。

毎週水曜日に行われる授業科目「よりよく生きるための科学と文化」を担当しています。この科目は，オムニバスといって様々な神戸大学の先生が担当します。わたしは，第１回目・第２回目のみを担当し，「心理学」を教えます。また，授業がスタートしてすぐの授業なので，青年たちがリラックスし学べるような雰囲気づくりをこころがけました。

授業は「悩み」を主題にしました。というのも，授業の合間などに青年と話していると，職場では言えない悩み，親には言えない悩みなど，様々な悩みを抱えていることを感じることが多かったからです。とはいえ，「こうすれば解決できる！」といったハウツーではなく，「悩み」を多角的にとらえる機会にしようと考えました。具体的には，次の４つの視点から授業を構成しました。

（1）悩みを口にしてええんや，（2）悩みを共有するのもええなぁ
（3）みなで悩みを解決するのもええなぁ，（4）そもそも悩みは解決しなくてもええんや

最初に，「研究室が片付けられず尋常な汚さになってしまう」という私の悩みを研究室の写真付きで紹介しました。どよめきが起こります。こうして，悩みをオープンにしてもいい雰囲気を醸し出し，少人数で，気楽に悩みを出しあいました（もちろん悩みを口にするのに時間のかかる青年もいました）。メンターさんといって神戸大学の学生もグループにはいり，同じように悩みを出します。「早起きが苦手」「毎日ケンカばかり」「かみなりがこわい」「職場の人に注意されると落ち込む」などが出されました。「わかるわかる」と言いながら悩みを共有します。１回目の授業はここまででした。

そして，２回目の授業で，「共同お悩み相談」を実施しました。１人では悩んでいたことも，みなで悩めば解決することもあるし，同時に，「そのままでもええやん！」と感じてもらえるようなねらいにしました。メンター含め３，４人１組で「相談会」を実施しました。

果たしてその結果は…というと，とても盛り上がりました！ 例えば，「荷物が多い」という悩みに対しては，「ひたすら捨てまくる」「持ってくるカバンを小さく」するといった解決が出ました。確かに！と思いますよね。でも，それだけではなく，「そのままええええやん！」という意見が出ました。具体的には，「筋トレになるからええやん」「何でも入っていてドラえもんのポケットみたいでええやん」といった意見が出ました。

どう解決するか？だけに話が向かったグループもあり，反省は多々あるのですが，多角的に自分の悩みをしり，つきあうきっかけになっていればな？と思います。なにより，本当に「学びたい！」という意欲が高い青年たちで，とても元気をもらうことができました。

赤木和重（2021）大学における履修証明制度を活用した知的障害青年の学び
（自主シンポ：大学における知的障害青年の学びと課題）
日本特殊教育学会第 59 回大会

日本特殊教育学会第59回大会／2021年9月18日～20日／自主シンポジウム
【大学における知的障害青年の学びと課題】

大学における 履修証明制度を活用した 知的障害青年の学び

赤木和重（神戸大学）
akagi@pearl.kobe-u.ac.jp

学ぶ楽しみ 発見 プログラム

「学ぶ楽しみ発見プログラム」（KUPI）

- KUPIとは？
  - Kobe University Program for Inclusion
  - 大学の知へのアクセスから最も遠ざけられてきた知的障害者の学びに貢献するプログラム
  - 受講者：知的障害のある青年（2019年度11名，2020年度9名）
    - 2020年度9名のうち，4名が2019年度も受講
  - 関与者：神戸大学・人間発達環境学研究科の教員（津田英二先生を中心に9名），コーディネーター（2名），メンター学生（10名）
  - 文科省の委託をうけて，2019年度に開始
    - 2020年度は，兵庫県との共同で実施

KUPIのプログラム概要（2020年度／対面で実施）

・授業は、10月から2月の火・水・金、17時から20時過ぎまで。

火曜日のプログラム

学部の授業に参加し、一般学生との学びあいに挑戦。
授業名：社会教育課題研究（障害共生教育論）担当：津田英二

自己紹介・互いのことを知る
↓
イギリス・ピープルファーストとのオンライン交流

水曜日のプログラム

研究科の教員のオムニバス。それぞれの専門の初歩に取り組む。

・当事者研究	赤木和重
・よりよく生きるための哲学	稲原美苗
・音楽と人とのかかわりの歴史	大田美佐子
・音楽する人間	岡崎香奈
・自然と共に生きる人間	清野未恵子
・人間生活と言語表現	川地亜弥子
・宇宙の科学	伊藤真之

金曜日のプログラム

KUPI学生の自発性に応じた話し合い学習やフィールドワーク。

- 自己紹介
- 体育館活動（ドロケイなど）
- 写真コンテスト
- 新喜劇の取り組みに参加
- クリスマス会　など

2020年度の改善点（おもに履修制度について）

- 2019年度：「聴講生」の制度を利用。しかし，いくつかの問題
  - 1）厳密にいえば，聴講しているのは「火曜」の授業のみに適用。プログラム全体に対する履修証明が得られるわけではない
  - 2）必要な書類が多く，受講者および家族への負担が大きい（例：健康診断書，成績証明書など）
  - 3）受講料を自由に決めることができない

- そこで，2020年度から「特別の課程（履修証明プログラム）」を利用することに変更
  - なお，実践的には，大きな変更はない

「特別の課程（履修証明プログラム）」とは？

- 学校教育法第105条の規定による「特別の課程」による「履修証明制度」を利用
- 文科省サイトhttps://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shoumei/08020613/001/001.htmによれば…
  - 「大学における社会人等を対象とした様々な学習機会の提供を一層促進するため制度上の位置付けをしたもの」
  - 「大学が履修証明を行うプログラム（以下「履修証明プログラム」という。）は、社会人等の学生以外の者を対象として開設するもの」
  - 「大学における履修証明は、大学の自主性・自律性に基づき、多様な分野において多様な取組が行われることを期待しており、履修証明プログラムの目的、分野、内容、修了要件については各大学において適切に設定されるべきものであること」
- KUPIプログラムに対して，適用できるものとして申請

実際の進め方について

- 大学事務も理解があり，問題なく進行
- 神戸大学に以下の概要があげられている（https://www.fgh.kobe-u.ac.jp/ja/node/897）

特別の課程の構成（開設科目等）

開設科目等の名称	講習・授業科目の別	時間数	単位の有無	担当教員名	備考
社会教育課題研究（障害共生教育論）1	授業	15時間	無	津田英二	
社会教育課題研究（障害共生教育論）2	授業	15時間	無	津田英二	
よりよく生きるための科学と文化	講習	30時間	無	赤木和重他	
話し合う!やってみる!	講習	30時間	無	コーディネーター	

学校教育法（昭和22年法律第26号）第105条の規定に基づき、神戸大学国際人間科学部において、本学の学生以外の者を対象とした特別の課程（履修証明プログラム）を設置しました。募集要項等の詳細については，学ぶ楽しみプログラムホームページをご覧ください。（http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html）

神戸大学国際人間科学部 特別の課程（履修証明プログラム）

実施部局	国際人間科学部		
特別の課程の名称	神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム		
目的	大学の資源を無理なく効果的に活用することで、大学の知へのアクセスから最も遠ざけられてきた知的障害者の学びに貢献する方策を探る。（文部科学省の委託研究）		
内容	学校卒業後の知的障害者を対象として、大学の知に触れることで楽しく学びながら活躍する知的障害者のリーダーを養成することを目的とし、自己認識と自己表現、他者認識と対話、社会認識を柱とするカリキュラムを提供する。		
履修資格	高等学校あるいは特別支援学校高等部を卒業した、言語によるコミュニケーションが可能で、かつ遠隔教育の受講が可能な知的障害のある青年。		
定員	10名		
受講料	50，000円	総時間数	90時間
実施期間	10月～2月		
講習又は授業の方法	正規授業への参画と、本プログラム固有の講習とを組み合わせて実施する。なお、新型コロナの影響を考慮して、遠隔授業ができる体制を準備する。		
修了要件	授業に出席し活発に発言するなど、十分に学びに参加すること。		
単位授与の有無	無		
実施体制	コーディネーターやメンター学生を雇用することで受講者の学びを保障し、協力教員の参画を得る。また、実施委員会及び評価委員会を組織し、それぞれ修了判定等、課程の評価を行う。		

「特別の課程（履修証明プログラム）」の利点と課題

- 利点
  - KUPIのプログラムを，大学のなかで位置付けやすい
  - 実践的な点で制限を受けることがない
  - 受講料を自由に設定することができる，かつ，受講料をプログラムの運営にあてることが可能

  →どの大学においても，利用しやすいのではないか？
- 課題
  - 「特別の課程」そのものよりは，そこに至るまでのプログラム実施そのものの問題があることが予想される（人の配置，プログラム協力者）
  - その場合，学外との連携が鍵になる
    - 「履修証明プログラムにおける講習又は授業科目の担当は、実施主体である大学の教員として位置付けられた者が、当該講習又は授業科目の実施計画を作成し、自ら講習等を実施し、履修者の成績評価を行うことが想定されているが、これらを補助する者として、例えば学外から講師を招聘することは可能であること」https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shoumei/08020613/001/001.htm

本冊子の編集者・執筆者

津田　英二	神戸大学人間発達環境学研究科
赤木　和重	神戸大学人間発達環境学研究科
河南　勝	神戸大学「学ぶ楽しみ発見プログラム」メインコーディネイター
黒﨑　幸子	神戸大学「学ぶ楽しみ発見プログラム」サブコーディネイター
井上　太一	神戸大学人間発達環境学研究科博士後期課程（メンター学生）
土居　綾美	神戸大学人間発達環境学研究科博士前期課程（メンター学生）
宮村　真菜	神戸大学国際人間科学部（メンター学生）
今西　恵美華	神戸大学国際人間科学部（メンター学生）
藤井　令奈	神戸大学国際人間科学部（メンター学生）
竿　　美羽	神戸大学国際人間科学部（メンター学生）
荒木　紘汰	神戸大学国際人間科学部（メンター学生）
澤坂　綾乃	神戸大学国際人間科学部（メンター学生）
松森　日菜	神戸大学国際人間科学部（メンター学生）
橋澤　慧	神戸大学国際人間科学部（メンター学生）
加戸　友佳子	神戸大学人間発達環境学研究科研究員（メンター）

本実践研究にあたって、神戸大学大学院人間発達環境学研究科における人を直接の対象とする研究審査による承認（No.454）を受けています。

2021 年度　文部科学省委託事業

「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム」

～知的障害青年のための大学教育の創造～

2022 年 3 月発行

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

〒657－8501　神戸市灘区鶴甲 3－11

Tel 078－803－7970　　fax 078－803－7971

KUPI

Kobe University Program for Inclusion